

平成26年3月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

3月のNHK中央放送番組審議会は、17日(月)、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、NHKスペシャル 震災ビッグデータ file 3 「“首都パニック”を回避せよ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、4月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長	北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委員	有森 裕子（元マラソンランナー）
	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
	小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	東儀 秀樹（雅楽師）
	谷口 肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

<NHKスペシャル 震災ビッグデータ file 3

「“首都パニック”を回避せよ」（総合 3月2日(日) 後9:00～9:58 放送)

について>

- 「震災ビッグデータ」のシリーズは3回とも見ているが、とても興味深い番組だ。今回の番組では、渋滞したときは裏道を通ればということだったが、すべての運転手が即時に裏道がわかるようになると、すべての道が渋滞してしまわないか心配になっ

た。結論は「家を出ないように」ということで、ビッグデータがあれば何でも便利になるということではないことがわかった。高校の教頭をしていた知人が、震災の際に在校生全員の名前をホームページに掲載し、全員が学校で無事であるので迎えに来ないようにと家族にメールを送り、しっかりと統制していた。そういうことのほうが大事ではないかと思った。東京・渋谷の過密は心配だ。寺田寅彦が「天災は忘れた頃にやってくる」と言ったが、文明が進化すると災害がより激化する。今回の東京電力福島第一原子力発電所の事故もまさにそうだ。東京をこれ以上過密にして大丈夫なのかという観点も必要だったと思う。課題はこれで終わりではないので、続けて取り組んでほしい。

- さまざまな膨大なデータを解析し、いろいろと考えていたが、個人として何をしたらよいのかがわからなかった。家を出るなということがいちばんの教訓になるかと思うが、見た人が自分の教訓として持てるものを付け加えるとよかったと思う。
- わたしも自分の教訓としては、家を出るなということぐらいしか感じられなかった。車で子どもを迎えに行ってしまう大変な思いをした母親のインタビューは、身近でわかりやすかった。どういことをして、どうい失敗をしたのか、実際の行動から検証すると、より教訓として得られるものがあるのではないかと思う。ビッグデータの解析力のすごさに驚いたが、これが便利だということを伝える番組ではなく、私たちがこのビッグデータをどう認識するか、そのことを考えさせられる番組だった。便利だから国民の皆さんは従ってくださいという見せ方にはなっていなかったと思う。CGがとてもリアルで、危機を現実的に感じることができ、効果的で引き込まれた。

(NHK側)

今回は、特に首都圏で何が起きたのか、定性的には帰宅困難や渋滞が起きたということは、NHKでもこの3年間伝えてきている。定量的にはどうい状況だったのか、映像に残されていない混乱も含めて、ビッグデータを使ってあの日の全体像を確認してみようというのが番組のねらいだった。ビッグデータの活用は、国でも防災利用など、いろいろと検討されている。番組ではあくまで当時の現状はこうい状態だったということを紹介していて、その上でどう対策するかということになると、ビッグデータの力に加えて、人間の力が重要になってくるのではないかと番組制作を通じて感じている。

○ 次なる巨大災害に備えてサバイバル術を描き出すということだったが、その部分よりも大都市のライフスタイルがいかに問題を多く抱えているかを、とてもリアルに描き出していたのではないかと思った。次にどうするか、何の役に立つのか、番組としてはそういう部分に目配りをしないといけないのだろうが、答えを出すというより問いを立てるだけでも意味のあることではないかと思う。ビッグデータは新聞でも扱うが、人や車の動きがあれほどはっきりとわかるような示し方は紙媒体ではできず、特にビジュアル的に、テレビの特性が存分に生かされていたのではないかと思う。共助力の話で東京都世田谷区の例が出ていたが、そんなことまでわかるのかと驚きを感じた。たいへんおもしろい番組だった。

○ 「震災ビッグデータ」については、過去の2回の放送では、あまり見応えを感じなかったが、今回の番組ではビッグデータにより車の動きが全部わかり、緊急自動車用に通行可能なルートや渋滞にならないところが図示され、たいへん興味深かった。そこをすり抜けたタクシーの運転手を特定して話を聞くことができたというのは、ビッグデータは単に集合体だけでなく、個々の特定もできるということかと、驚きと怖さを感じた。なぜ渋滞になるのかという点に関しては、「潜在需要車」の存在は新しい概念だと思う。地震発生から10分後に渋滞が通常の2倍に達するというのは恐るべきことで、この問いを出しただけでも十分に意味があったと思う。人の密集度が異常に高くなることについても、渋谷の250㎡のところには3万人という話があった。時間がたつにつれ人々の気持ちがすさんできて、パニック化する前兆現象のようなものがツイッターなどに出ているという立証も、問いとしてこれからとても役に立つ話だと思った。いちばん感心したことは、個々の家屋の倒壊率と共助力を掛け合わせたところだ。個々の建物の倒壊率は、地盤の強さと家の強度から出しているという印象を受けた。その情報がどこにあるのだろうか。あれはビッグデータというよりは、積み上げデータのような気がした。どのように集め、だれが管理し、どういう形で運用しようとしているのか。また、共助力もその時間帯に何人ぐらい助けられる人がいるかという精密なデータだが、どのように入手したものかも知りたい。

(NHK側)

今回の番組で使用したビッグデータは個人情報が入っていないデータなので、タクシー会社の運転手の特定は通常の取材によるものだ。記者がデータの提供を受けている2社のタクシー会社へ行き、この時間帯に走っていた人がいないかを確認した。会社に乗車記録を見てもらい運行記録から特定できたもので、あのデータだけではどれだけ解析しても、どの運転手かはわからない。われわれの足で探し、地図上に可視化し

た。共助力や倒壊率のデータは、入手できるものを掛け合わせたデータだ。倒壊率の算出は地図情報会社のデジタル住宅地図に、総務省が管理している住宅・土地統計のデータ、地震調査研究推進本部が作っている全国地震動予測地図を足し合わせ、個別に倒壊率のパーセンテージを出した。共助力は携帯電話事業者が提供しているモバイル空間統計という基地局の500メートル四方に何人かいるのかというデータ、電車などに乗ると人の動きをチェックするパーソントリップ調査、そうしたいろいろな調査を足し合わせ、統計学的にデータを出した。NHKが独自に解析したというより、東京大学の秋山祐樹助教の研究を可視化したものだ。ビッグデータを使ったさまざまな防災を目的とした研究の最前線のものを紹介した。

- 個々の建築物がどの程度の倒壊率であるかといったデータもインプットされている印象を受けた。視聴者が自分の地区や、辺りにある建物がどういう状況にあるのかと関心を持って見たと思う。自治会などからそうしたデータを提供してほしいという要請があった場合、提供はできるものなのか。

(NHK側)

共助力マップは東京大学の研究チームが中心となって防災目的で作成を進めている。防災の専門家とデータを見ていろいろな検証を重ね、そのデータをどうすれば防災に役立たせることができるのか、データを見て個々がどうすればよいのかということなど、秋ぐらいをめどに公表していきたいということだ

- ビッグデータにはこういう使い道があるということを示したという意味で、とてもよい番組だと思った。問題はそこからどういう教訓を得るかだ。消防の人が、このデータをリアルタイムに見ることができたら非常に役に立つという趣旨の話をしていた。そのあたりの可能性はどこまで来ているのか、番組の中で言及すればよかったと思う。今回は潜在需要車、密集、共助力という3つの大きなテーマで構成されていたが、切り口としても、取り上げ方もよかった。潜在需要車のところでは、家を出るなという結論でよいのかということもある。あのときは震災発生から1時間後ぐらいに、帰れないから迎えにきてほしいという要望がたくさんあり、渋滞が起きたわけだが、それを防ぐにはどうすればよいのかという専門家の人たちの話が聞きたかった。密集については、ツイッターからわかるということに驚いた。密集に入ってしまったときには個人では防ぎようがないという状況がある。密集にはまらないよう

な方法があるのかを知りたかった。防災地図のところでは、こんなことまでわかるのかと思ったのが、昼間の動きと夜の動きが調査でわかるのかということだ。携帯電話の微弱電波で人がいるのかいないのかを見るのか、夜と昼で時間をおいて共助力が落ちるという話があったが、どうやってわかるのか不思議だった。今回はデータはこうやって取っているという裏側の説明が不足していることもあり、見ているほうは戸惑ってしまったところもある。

(NHK側)

実際に車の渋滞情報が利用できるのかは、ビッグデータの防災利用に関する国のプロジェクトでも検討されているが、技術的には可能だそうだ。それをだれにどのように提示するのか、広く一般に提示したら大渋滞になるということも含めて、総務省と内閣府が中心となって新しい防災のありようを検討している。潜在需要車、密集の危険性に関する解析結果を防災的にどうすればよいのかということも、議論が必要だろう。東日本大震災時の首都は震度5強を幅広く記録したとはいうものの、首都直下地震で想定される被害とは全く違う。自動車の利用状況や住宅の倒壊状況も当然異なってくる中で、今後どう生かしていくのかは答えがひとつではない。防災研究者もビッグデータからの知見をもとに、今まで出している首都直下地震への備えのほかに何か付け加えることがないか、意見を出していきたいとしている。昼と夜の動きについては誤解があるかもしれないが、きわめて明確な個人の動きというよりは、統計学的にこういう行動であるという処理がされている。500メートル四方の携帯電話の基地局に何人いるか、国土交通省が人間の動態を調査しているパーソントリップ調査から、この地域はこういう動きの人が多いいんことを統計学的に導き出しているものだ。ある人がそのときにはこういう動きをするという傾向だと理解してもらえればと思う。

昨年 の第1回の放送のときに、いろいろな防災関係者が集まりデータをどのように使うのかという技術的な検証を行った。自動車の渋滞情報は30分～1時間の誤差で、どれだけの車が走っているのかは機械的に再現できる。いざという時に情報を提供できるシステムが組み込まれているそうだ。位置情報もリアルタイムでの利用は技術的に可能で、システムも作れるが、どのように使うのかという議論をしているところだ。

- たいへん興味深い、すばらしい番組だと思った。パニック寸前だったのかもしれないが、大パニックは起こらなかった。なぜ大パニックが起こらなかったのか。ビッグデータの中で注目されるのはツイッターの役割だ。渋谷駅付近でたいへんなことが起こっているとツイッターで流され、情報がシェアされていた。役所や気象庁などからの情報ではなく、シェアする情報が人々をどのように行動させ、どのように助けていくのか、その視点がもう少し出ていればよかったと思う。大パニックが起こらなかった理由はツイッターによる情報の流通にあったのかもしれない。そのあたりの分析が今後あってもよいかと思う。情報端末が人々の行動にどういう影響を与え、それが場合によっては大パニックを加速させるかもしれないが、一方で抑制する効果もあるのではないかという解析がNHK独自の視点から欲しかった。潜在需要車は急に移動を始めており、茨城県で起きた大きな余震が引き金になったのではないかと思った。

(NHK側)

ツイッター上でもデマが流れたという話があり、デマはどう拡散したのかという形でビッグデータを解析したが、拡散は考えていたよりも少ない印象だった。ツイッターを利用している人同士がお互いに補い合って正確な情報をつかんでいたと思われるが、そういうところまで番組で紹介すればよかったと思う。余震の分析も行ったが、さまざまな余震で渋滞が増えている。また、潜在需要車が動き始めたのは午後4時半ぐらいからが多く、暗くなってきて、交通機関が止まっているという情報がメディアを通じて流れたタイミングということが傾向としては顕著に見られた。

- 本当にすばらしい番組だった。抜け道がわかっても渋滞してしまっただけでは意味がないのではないかの発言もあったが、私はそれでも意味があると思う。その情報を得たうえで、自らの判断に寄与することによって自立的なフィードバックループが形成される。電車のアプリで、それを見ると山手線のどの車両が混んでいるのかがわかるものがある。その電車に乗らずに、次の電車を待っている間に歩いて空いている車両のところに行き、満員電車が緩和されるといった状況になる。これを道路に適用すると渋滞の緩和に資するようになるのではないかと思う。多くの可能性を秘めた番組だと思った。特に共助力マップに関しては秋に公表するのであればもう1度取り上げ、放送してほしい。NPOを運営している人間にとって重要なテーマだ。NPOでもいろいろな事を行うが、地域の共助力を全体的に高めることは資源が限られており難しい。人もお金も限られている中で、どこが弱いのか、弱いところにはしっかりと手当てをし、強いところは行わなくてよいと見切れることは大きいと思う。番組を見た後にイ

インターネットで検索をしたが、共助力マップは出てこなかった。秋ごろ公開ということなのでその使い方も含め、研究者が単にインターネットに掲載しただけではだれも使わないので、NHKが共助力マップを使えばこういう可能性があるということを見せる形の番組を放送するとよいと思う。保育所の選定にも役に立つと思った。弱者の子どもたちを震災のときにしっかり守るとか、避難させないといけないときに共助力のある施設に避難できることはとても大きい。被災地でも保育士の先生は1対6で子どもを見るので、1人で6人の子どもを担げない。地域の人に助けをもらって避難ができ、死なずにすんだという事例も多々ある。共助力マップに基づき保育のような設備が位置できることで被害をより防げるという応用発展もあると感じた。こうした公益性の高い番組、世界に誇れるような内容のものをインターネットに外国語字幕付きで掲載するのはどうだろうか。すべてでなくてもよいので、人命にかかわるような番組は、期限付きでもよいのでインターネットに掲載し、海外に知らせることをしてほしい。そうすれば地震大国日本が培ったノウハウを人類の役に立つように使うことにつながるのではないかと思う。

(NHK側)

共助力のマップについては、協力してくれている研究者もデータをインターネットにただ掲載するだけではなく、使い方も含め、フィードバックできるときにきちんと公表したいと話している。公開の際には使い方も含め、伝えるようにしたいと思っている。

- 今回の膨大なビッグデータから何を取り上げ、どういった方向のものにするのかは、研究者との協力関係はあるだろうが、番組企画として独自に行っているものなのか。将来的にビッグデータがどういう方向に行き、あぶり出されたものがどこに行くのか、それぞれが検証されるのか、ワークショップで分析するのか、その辺りの連鎖があれば、そこから次のビッグデータの企画の道筋が見えてくると思う。ビッグデータであるがゆえに見えなくなる面もある。震災のときは、かなりの方が歩いて帰った。歩ける人については公共交通機関がなければ何時間かかっても歩いて帰ろうとし、それをいろいろな団体がサポートし、歩いて帰ることをそれぞれの地域、沿線でバックアップする仕組みを作っていた。これは車とは違う。あそこまで解析すると逆に埋もれてしまうものもあるが、それをビッグデータで拾えというのではなく、そういう動きも並行して起きていたので、番組の中で問題点の示唆ぐらいはあってもよかったと思った。
- おもしろく、興味深い、重要なポイントをあぶり出している番組だった。不完全燃

焼の部分もあり、これだけの情報が与えられ、今の段階で最終的な答えがないというのはわかるが、ビッグデータをどう使うかという検討がされているという紹介があるともう少し方向感があったと思う。この番組のフォローアップの番組が将来あってもよいと思う。震災と別の面でもビッグデータということばをたくさん耳にするが、具体的にビッグデータとは何なのかと思っている人もたくさんいたと思う。ビッグデータとはこういうものだという強いインパクトを与えた番組だったと思う。

- ビッグデータとはこういうものだということを、わかりやすく教えてくれたことは有益だったと思う。東日本大震災のつらい経験と犠牲のうえで知りうることができたこのデータを、垣根をどのように越え、英知を結集し、個を生かしていけるのか、もっと掘り下げられればよいと思う。こうしたデータを地域ごとにどのように活用し、どのような対策があるのかを考えることをうながす視点も大事だと思う。地域住民、法人などの連携による地域での防災訓練などの事例が一部出ていたが、そういうことも含めて放送してほしい。
- 政府でも防災対策にどうつなげていくかを検討中だということだが、ビッグデータの示すところを人間が次にどう生かしていくのかという部分がポイントになる。政府の検討内容も含め、フォローアップの余地が大きいと思う。

(NHK側)

平成24年9月に東日本大震災ビッグデータワークショップが始まった。インターネット関連の企業も含めてさまざまな形でビッグデータを防災に利用しようと今でもいろいろと検証している。NHKでは、映像でビッグデータを表現し、その可能性を伝えてきた。夢物語だけではない、ビッグデータの可能性や限界もだんだんわかってきたし、最後にはそれを使用する人間が問われることもわかってきた。どういう形になるかわからないが、番組で継続して伝えていけたらと考えている。ビッグデータを所有しているのは民間企業が多いが、民間企業同士が直接つながりこれらを掛け合わせていくことはなかなか難しい。一方、NHKは営利企業でないので、さまざまなビッグデータを利用してその防災的な価値を高めるハブの役割を果たし、それらを伝えていけるのではないかと考えている。

- これほどデータをはっきり出すことができるのかと単純に驚いた。いちばん印象に残ったのは、共助力の部分だ。震災時には40代の人々が力を発揮したことから、どう

いう年代の人が、どういう所に住んでいるのかを把握し、その地域の人たちが40代の人がいる世帯を回り協力を呼びかけていた。自分としてもできると思える内容が紹介されており、こういうことが自分の地域でわかればよいと思う。今回は首都のデータとして紹介したのだと思うが、震災は東京だけでなく、ほかの都市でも起きる可能性があり、このようなデータがあるということを自治体の担当者が知ることができるような仕組み、情報の流れを今後確立していけばよい。子どもたちも身近にこういうことが起きるとか、危険があるということは、知っていてよいと思う。今回のような番組と同時に、子どもたちでもわかるような内容の番組や教材があれば、理解が根付き、大人になったときに実際の行動につながるのではないかと思う。そうした意識づけにつながるような番組があったらよいと思う。

- ビッグデータを、特に車の移動などを視覚的に出したのはよかったと思う。逆にあれだけ視覚的に出せるということはプライバシーの課題もある。個人を特定しないようにしていたと言うが、いろいろなデータをつなげると、個人情報も隠していても個人が特定できてしまう。ビッグデータをプライバシーの関係からどこまで利用してよいのかという点も、今後番組を制作する際に考えた方がよいと思う。潜在需要車というたいへんおもしろい視点を取り上げていたが、今後このことをもう少し深く取り上げてもらえればと思う。新たに車を動かすことで大渋滞になるという情報があったが、高速道路を閉鎖したために一般道がさらに渋滞したこともあると思う。潜在需要車の問題で、こういう問題が起きたときに新たに車を動かすことは、1、2台でも大きな問題になるというあたりは今後取り上げてもらえればと思う。渋谷にあれだけ密集したのは、JRが止まったが地下鉄は動いていて、渋谷からその先に行けなくなったこともあったのではと思う。パニックにならなかったのはそこにいた人たちに差し迫った身の危険がなかったからだと思う。首都直下地震だと火事が起きたり、ビルが倒壊したりすると人々の行動は違ったものになると思う。交通機関のどれを動かす、どれを動かさないという問題、なぜパニックにならなかったのかというあたりをもう少し突き詰めると、実際に起きたときに人々はどう行動すればよいかという指針になるのではないかと思う。

(NHK側)

防災の目的で「震災ビッグデータ」という番組を企画し制作している。国もビッグデータを個人情報と抵触させずにどう有効に利用するか、内閣府を中心に大綱のとりまとめを行っている。ビッグデータを個人情報に配慮し、どう防災に利用していくのか、国は具体的な検討を進めている。そのことについては、今回の番組内では十全に伝えることができなかったが、ビッグ

データをどのように使えば、多くの命を救うことができるのか、一人でも多くの命を救うということを常に視野に入れた番組を今後も制作していきたいと思う。

<放送番組一般について>

- 3月16日(日)のNHKスペシャル メルトダウンF i l e . 4「放射能“大量放出”の真相」を見た。ベントする際の水温が高いと、格納容器からの蒸気に含まれる高濃度の放射性物質がそのまま放出されるということをイタリアでの実験によって明らかにしており、すばらしいと思った。

- NHKスペシャル メルトダウンF i l e . 4「放射能“大量放出”の真相」は、忘れることがいちばんいけないことで、継続することが大きな災害事故のフォローアップの取材や報道に必要なだと思わせてくれる検証番組だった。東京電力福島第一原子力発電所の3つの原発がメルトダウンをしているが、爆発を起こさなかった2号機から放射性物質が最も多く放出されている事実に着目し、突き詰めて検証していた。科学では、ある同じ一定の条件を作って物事を再現し、同じことが起きれば一般的にも、その可能性について納得することができる。その手法を毎回用いている。日本にその施設が無い場合は、今回のようにイタリアなど海外に出て実験施設を使っており、番組制作費は相当かかっていると思うが、こういうことについては納得感のある費用のかけ方だと思った。事故が起きたときには原発を止め、多重防護し、放射能を出さないというのがこれまでの安全神話だった。建屋は爆発したが、相当分厚い格納容器はどういう状態なのかがまだ見えていない。破損し、そこから流れ出ていないとあれほど高い放射能は出ないだろうという推測のもと、1号機の水の流れているところに船を浮かべ、船から見た映像で事実に向かっていた。そうでないかもしれないが、ひとつの可能性として説得力があった。もっと素朴な疑問として、なぜ1号機がメルトダウンしたのか。地震が起き、数十分後に津波が来て電源が喪失し、冷やすことができなくなりメルトダウンに至っている。国会の事故報告書などを読むと数時間後にほぼメルトダウンしている。数時間でメルトダウンしていることを当時の東京電力にしろ、政府にしろ、把握していなかった。その後いろいろな形で検証されたが、本当にメルトダウンを防ぐ手がなかったのかという観点からの検証番組はNHKでも放送していないと思うし、説得力のある議論がないような気がする。1号機のメルトダウンからすべては始まっているので、その大きなポイントについてあらゆる手段を講じ、将来ほかの原子炉、世界の知見のためになるような検証をしてほしい。水で冷やせなかった場合に数時間でメルトダウンしてしまうことをだれが事前

に認識し、予測していたかというところが決定的に欠けていると思う。その辺りが明らかにならないと、今回の事故原因はいちばん大事なところがいつまでも出てこない結果になるのではないかと思った。

- NHKスペシャル メルトダウンF i l e . 4「放射能“大量放出”の真相」はメルトダウンをどう防ぐかというたいへんよい番組だった。いろいろ指摘されている問題が、安全審査にどう影響するのかについても言及してほしい。1号機のメルトダウンについては、電源が喪失したらメルトダウンするとアメリカですでに言われていて、その情報がなぜ日本の中で利用されなかったのか。NHKは以前にも番組で放送していたと思うが、皆が放送を見ているわけではないので、再放送をするなどしてもらいたい。日本はもともとわかっていたのに、そういう情報が来ても利用しなかったようだ。今後の検証の中で生かしてもらえればと思う。

(NHK側)

2011(平成23)年12月18日(日)に放送したNHKスペシャル「メルトダウン～福島第一原発 あのととき何が～」(総合後9:15～10:04)では、非常用復水器が最初に起動し、熟知していなかった運転員が間違えて止めてしまい、メルトダウンを早めてしまったことを取り上げた。詳細はわかっておらず、これから廃炉に向けての作業で中にカメラを入れ、原子炉の中がどうなっているのかがわかって初めて原因が特定されていくと思う。4月以降も廃炉に向けたシリーズを「NHKスペシャル」で放送する予定だ。廃炉の作業でわかったことを事故原因の分析に返していくことは続けて行っていく。

- 2月25日(火)のクローズアップ現代「大雪の猛威 “空前の立往生”はなぜ起きた」はとてもよかったが、農林業への影響も検証してもらいたい。私も大雪のためある国道で動けなくなり、本当に恐怖を感じた。群馬県においては農業被害が422億円、県の年間農業生産の17%が一気に壊滅した。山梨県はいまだに調査中だ。ビニール、ハウスガラス、重油、パイプ鋼材など、廃棄先が見つからず、手つかずの実態が散見されている。田植えを間近に控える中で育苗ハウスは鋼材が手に入らずに困っている実態もある。100年に一度の豪雪というが、大きな被害になった背景がもう少し明らかになればと思う。これこそが今後の被害を小さくする手立てにつながると思うので、こういう検証も取り上げてほしい。

(NHK側)

農林業の大雪被害については、3月14日(金)の特報首都圏「大雪が産地を襲った～広がる農業被害の実態～」で、関東甲信越地方に向けて、首都圏の農林業を中心とした大雪被害を取り上げた。農業、林業に大きな被害を与えた災害だったので、個々のニュースでも継続的に取り上げていく。

- 3月6日(木)のクローズアップ現代「日米関係はどこへ～ケネディ駐日大使に聞く～」でのキャロライン・ケネディ駐日大使へのインタビューは注目して見たが、興味深い内容になっていた。難しい局面でもある日米関係についてアメリカ側のニュアンスがよく伝わり、よかったと思う。また、番組が自ら会長や経営委員の発言について大使に問いを立て、言及していたのはよかった。メディア自身が自分のメディアについて語ることは重いテーマであり、なかなか難しいが、しっかりと向き合っていてよかったと思う。
- 3月8日(土)、9日(日)の「NHKニュース7」を見た。8日(土)は福島の大震災の反原発集会、その後少し間をおいて台湾の反原発デモを報道していた。9日(日)は都内での反原発集会を取りあげていた。3月11日を前にした「NHKニュース7」で、実際に起きている話ではあるが、取り上げ方としては偏っていると思う。特に台湾の反原発デモについては台湾の原発政策を前に紹介するなどしてからであればよいのだが、反原発デモという情緒的な取り上げ方をしていたと思う。台湾は3つの原発で6基動かしていて、4つ目を建設中だ。北端に2つ、南端の1つが今動いていて、北端に4つ目を造っていて、これは日本も絡んでいる。もう少しバランスをとってほしいという感想を持った。

(NHK側)

台湾の反原発デモについては台湾の状況をもう少し伝え、なぜこういうデモが起きているのかということも含めて報道できればよかったと思う。

- 「ドキュメント72時間」も気に入っている番組だ。定点観測で、いろいろなところを選んで72時間に行ったり来たりする人にインタビューしている。3月14日(金)の「福島 早春のスーパーから」では巨大スーパーマーケット取材しておもしろかった。「プロフェッショナル 仕事の流儀」、「SWITCHインタビュー達人達(たち)」などで抜きん出た人を取り上げるのも、それはそれでおもしろく、た

めになるが、名もなき人のコメントが時として非常におもしろいことがある。30分という短い時間でなるほどという余韻もあるよい番組だと思う。

- 3月16日(日)の日曜討論「与野党に問う 経済・集团的自衛権」は、参議院の幹部が集まった番組だった。自由民主党の脇雅史参議院幹事長が集团的自衛権について党内の石破茂幹事長とは違う意見を述べ、それがニュースになっている。集团的自衛権の行使容認をめぐる議論は、官邸と党にかなり差があることまではかなり報道されているが、党の中でもさらに意見が割れている趣旨のことはあまり報道されていなかったのもので、そのあたりのフォローをNHKがしっかりと行っているのはよかった。これから集团的自衛権の行使容認の問題は、かなり政治的な問題になるので、幅広い意見をNHKがどう報道していくのかも注目されている。そもそも論や歴史の問題、いろいろ幅広い形で報道、解説してほしい。
- 3月16日(日)「とっておきサンデー」の枠内で佐村河内守氏の問題の検証番組を放送したことはよいと思う。放送できちんと示すことによる透明性はたいへん評価できる。
- 2月13日(木)の明日から役立つワークルール～初めての労働法「残業代、もらってる？」(Eテレ 前 0:10~0:34)は、職場でのトラブルについてアドバイスをする番組だった。バラエティー系のドラマ仕立てだが、きわめて説得的だった。わたしはこの種の労働相談を手がけてきたが、知識やアドバイスは役には立たない。法律でこうなっていると説明してもそれを実務に展開できない。今回は時間外残業の話だったが、おそらく知識だけでは対応できない。ドラマ仕立てでどう言えばよいのかまでシナリオに入っており、残業代の計算のしかたも示していた。知識だけでなく、実務とノウハウをあれだけの確に短時間で伝えたものはなかなかない。
- 3月16日(日)のサイエンスZERO「緊急SP! STAP細胞 徹底解説」では、STAP細胞について、問題が指摘されているタイミングで取り上げていたが、何が今回の問題のポイントなのか、問題点を短い時間の中でしっかり伝えており、とてもよかった。京都大学のiPS細胞の研究に携わっている人のコメントがあったが、それぞれの分野のエキスパートが横に連携して研究を行っていること、別の人からもらったデータ、資料などは基本的に疑うことをせず、性善説に基づいておこなっていることなどがわかり納得した。

(NHK側)

「サイエンスZERO」で取りあげたSTAP細胞について

は、関心は高いが、これからどうなるかは結果が出ていないのでわからない。今の時点でどこが問題になっていて、どの部分が議論されているのかを整理しようということで放送した。

- Eテレで「ティーンズプロジェクト フレ☆フレ」という高校生の夢を応援する番組がある。ドキュメンタリー調で、地味だがとてもよい。10代のがんばっている姿を映し出していて、放送が若者を元気づける、すばらしい番組だと思う。NHKは若者に届いていない危機感を持っているが、こういう良質な番組が今後の視聴者を育てるのでないかと思う。ぜひ継続してほしい。

(NHK側)

若者の応援番組は、総合テレビでも「応援ドキュメント 明日はどっちだ」を放送している。若者を応援する番組はこれからも続けていく。

- ソチパラリンピックをあれだけ取り上げてもらったことは、パラリンピアンにとってよかったと思う。アスリートの意識ももっと変わらなければいけないが、放送に出る機会があることはモチベーションになる。世界で戦っているアスリートの中にはいろいろな人間がおり、パラリンピックに知的障がい者も参加できるようになったという情報も含め、今後、知的障がい者のスポーツも取り上げてもらえればと思う。
- 一連の震災報道、原発事故報道を見たが、あらためてNHKならではの、訴えかけられるものがあつた。3月16日(日)に明日へー支えあおうー 証言記録 東日本大震災 第27回「福島県いわき市～そしてフラガールは帰ってきた」を放送していたが、このような放送は継続してほしい。復興については時間がかかりすぎるという議論もある。いくつかの番組でも、復興の形、イメージそのものがしっかりできていないのではないかという厳しい問題提起をしていた。抽象的かもしれないが、復興とは何かという基本的な問題を問い続ける企画は継続しておこなってほしい。原発の話は終息していないという立場でしっかりと伝えてもらいたい。再稼働の問題はさておき、東京オリンピックに向けてあらためて終息という方向に全体が行きかねない。事故原因の分析だけでなく、社会的な問題、帰還できない問題も含め、社会的事象だと思うので、今までのスタンスでしっかりと続けてほしい。
- 日本国内では3月11日を中心に、それ以外の日にも復興への関心はとても高い。残念ながら海外では、震災そのものについての報道は多く行われていたが、復興、そしてそこで明らかになってくる問題点などについてはあまり興味をもたれていない

のが現実だと思う。日本が地震の国であること、また、地震だけでなく自然災害に日本がどう対応するのか、どういう問題が浮かび上がり、どういう政策がとられるのかということ、日本として発信していく義務、使命があるのでないかと思う。その辺りの取り組みを積極的におこなってほしい。

(NHK側)

復興についての海外への発信は、NHKワールドTVで「TOMORROW」という番組を毎週放送している。各国の専門家が被災地を訪れ、震災後の変化、新たな動きを自らの視点で切り取り、世界各地の未来創造のヒントになる番組として放送している。まだ数が少ないかもしれないが、引き続き取り組んでいきたいと思う。

- TPP（環太平洋パートナーシップ協定）の関連番組がいくつかあった。閣僚会議後の説明会に行ったが、あらゆる業界の人が来ていた。今でもTPPに反対、考え直すという活動はあるが、そういう活動は報道もされず忘れられている感じだが、本当はわたしたちの生活にとっても影響があることだ。TPPについてももう1度よく考えてみるような番組を作ってもらえたらと思う。

(NHK側)

TPPは、交渉がやや行き詰まっている状態だが、生活のあらゆる分野に影響が及んでいる。全国のネットワークを通じ、どのような影響が出るのか、さらに継続的に取り上げていく。

- 若干気になっていることだが、報道番組で「相次いで」ということばがよく使われる。頻繁に起こっている印象を時として与える。「相次いで」ということばを使うと、どのようにどれぐらいの影響があるのかがあいまいに伝わる印象を受ける。冬にノロウイルスの集団発生のときの報道でこのことばが使われていたが、どの程度の確率として起こることなのか疑問に感じた。「相次いで」ということばがかなり安易に使われているような印象を受けたので、考えてもらえればと思う。

(NHK側)

「相次ぐ」ということばがどのぐらいの頻度を指すのかはあいまいな部分がある。客観的な報道という意味で頻繁に使うようなことばではないと思うので注意したい。

- 最近NHKオンデマンドをよく利用する。パソコンからのアクセスはとても簡単だが、テレビで使おうと思うととても難しく、見たい番組に行き着けないことがある。NHKオンデマンドをテレビで利用しようとするとは複雑だと感じており、パソコンと同じように簡単になるとよいと思う。

(NHK側)

NHKオンデマンドをテレビで利用する際に、そのような意見があることは耳にしている。NHKからだけの提供ではなく、他社からもいろいろなサービスが提供されており、その中のひとつなので、注文は出しているがどの程度まで改善されるかは手の届きにくいところがある。実際に利用者からの要望もあるため、厳しく注文していきたいと思う。

- ニュースサイト「NHK NEWSWEB」は、速報性も高く、文字ベースでニュースが出ている。一定期間がたつと記事がなくなる仕様になっているが、これを変えられないかと思う。アーカイブスにすることが難しいということはおそらくないはずだ。「クローズアップ現代」はホームページで放送内容を「放送まるごとチェック！」というテキストベースで残してあり、いつでも参照できるようにしてある。これができるのであれば「NHK NEWSWEB」もできると思う。これをするのはとても大きなインパクトがある。ネット上でいろいろな議論をする際に根拠が必要になるが、そのニュースがリンク切れになっていると根拠のないやりとりになり、言説がブラッシュアップされない。NHKのニュースなどがきちんとリンクされ、しっかりした事実に基づいているというものであれば対話、議論の質の高さが担保されるようになると思う。BBC、PBSなどではウェブで出しているニュースが保存されている。検討してもらえればと思う。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年2月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

2月のNHK中央放送番組審議会は、17日（月）、NHK放送センターにおいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、島耕作のアジア立志伝「“女性の正論”で壁を打ち破れ～董明珠～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、3月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長	北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委員	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	田中ウヰェ京（（株）ポリゴン代表取締役、メンタルトレーナー）
	東儀 秀樹（雅楽師）
	谷口 肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<島耕作のアジア立志伝「“女性の正論”で壁を打ち破れ～董明珠～」について>

- 今回の主人公のストーリーは興味深く、とてもおもしろかった。中国社会のいろいろな問題が指摘されている中で、中国でもこうした形で企業経営をしている人がいるということを実体的に取り上げたのは、中国に対するわれわれの見方も変わることになり、一種の驚きを感じた。描かれていたのは有能な個性、個人の格闘の歴史であると同時に、中国というこの20年ですさまじい飛躍を遂げた経済モンスターの組織環境のようなものもあった。また、なぜ董明珠さんが一介の販売員からあそこまで短時間で昇りつめることができたのかという点では、中国の商習慣や能力のある者は女性であってもトップに上がっていくというアメリカ以上のダイナミズム、日本とまった

く違う中国の経済環境、競争環境があるという印象を受けた。日本との比較のうえでも、そこを強調すれば違いがより出たのではないかと思った。一方、島耕作というアニメの枠組みを通して今の中国の経済状況をとらえることが適切なのかということも感じた。アニメの部分にあった、若手の女性社員に対して、「君もがんばらなければいけない」という結論のつけ方にも物足りなさを感じた。もっと明確な教訓を引き出し、それを日本の社会に向け発信できたのではないか。番組は総じてコンパクトにまとめられていて視聴者に対して分かりやすい構成だと思う。

- この番組はよく見ているので、見慣れてきた感覚でいうと、今回は少しとりとめがなく、もう少し深い内容があればと感じた。10年、20年前はカリスマという言葉がもてはやされたが、今は1人が圧倒的に優れているということより、組織の力に焦点が当たりやすいと思う。以前、カリスマ的な存在の寿司職人を追ったドキュメンタリー映画があった。その中で、評論家がどこがどのように優れているのかを解説していた。日本の食文化を支えているのは、一部の寿司職人や日本料理職人だけでなく、魚河岸での職人たちの食材を見分ける力、漁師の存在、さらには魚をしめるという文化があると伝えていた。寿司がキーワードとなって、なぜそれが優れているのかがよくわかる作り方だった。今回の番組でも、一部のカリスマのことだけでなく、そのバックボーンまで描かれているとよかったと思う。
- 知らなかった話でもあり、おもしろく、最後まで興味深く見た。一方で、中国におけるビジネス文化のコンプライアンス軽視を、そんなに短期間でどのように克服できたのか、ただ正論を突きつけるだけで切り開けたのかということがいまひとつ解明できなかった。中国では、単にビジネス文化というだけでなく、中国共産党という政治勢力が利権の根を張っている。どのようにそういうものをくぐり抜けたのか、あるいはまったく関係なかったのかということも知りたかった。番組の内容時間が短くなった影響もあるかと思うが、事実が興味深いだけにもっと知りたいことが出てきてしまった。島耕作が出てくる部分については、今回については絡み方が必然的でないような気がした。そういうものは除いて、ドキュメンタリーでたっぷり見たかったという気がした。
- 中国では共産党との絡みの上で、そんなにきれいごとで旧弊を打破できるのだろうかという印象を率直にもった。調べると、この会社は1985（昭和60）年に特区で生まれ、国営企業として出発しており、1994（平成6）年には胡錦濤前国家主席がこの会社を視察していて、後ろ楯には鄧小平氏がいるということだ。この社長は2003（平成15）年に全人代のメンバーに選ばれ、政治の世界にも入っている。去年は、広州市の公安担当をこの会社の副総裁に迎えている。とてもではないが、こういうことが

分かると、きれいごと、ビジネスだけで彼女が今の地位にあるとは思えない。そういうことを指摘すると放送できなくなるのかということも含めて、政治色をまったく消してしまったのはどういうことなのかを教えてください。

- 董明珠さんが若いころ、社長に商品を値下げしないように説得し、その意見が通ったと番組では簡単に伝えられていた。どう説得したのかは番組を見ていけばいたい想像はつくが、その当時の社長が、なぜ部下の反対意見に同意する方向に傾いたのか、中国の社会でそういうことはあり得ないと思っていたので、上司が部下の意見を取り入れる様子、どのような決断でそうなったのかをもっと取材できていたらよかったと思う。中国という社会で、短期間でどのようにしてあの立場に昇りつめたのかということや、董明珠さんの存在を煙たがり、出る杭を打とうとしている人たちがどういう立場でいたのかについても知りたかった。アニメの中での、島耕作の若い女性に向けたコメントは深みがなく、適当にあしらっている感じがした。董明珠さんが若いころの場面を、映像では再現できないのでアニメを使って伝えていたことはとても効果的で、感情も入りやすかったが、島耕作の部分は必要性をあまり感じなかった。また、本編に入る前に本編と同じ映像を序章として使うことがよくあるが、その部分が長すぎて、本編では先ほど見たものを改めて見ているようで違和感を覚えた。
- それほどすんなりと正論だけで通るのか、中国社会の複雑なしがらみや利権の構造を、董明珠さんはいったいどのように突破したのかということをもう少し詳しく入れてほしかったということだと思う。カリスマ性を強調しているが、組織的な力学がどこかで働き始めている面があるのか。

(NHK側)

きれいごとではないかという指摘だが、董明珠さんは押すだけの人間でなく、アメとムチを使い分け、販売店などに報奨金を出すなど、ある意味狡猾（こうかつ）に、タフに商習慣を変えていったという事実がある。日本より優れている部分だと思うが、中国は女性管理職の割合が50%を超えている。社長の絶大なる信頼を得ていたことも大きかったと思う。中国では2008（平成20）年に労働契約法が改正されるなど、コンプライアンスの状況が以前に比べればかなり変わってきた。以前よりはよくなったというレベルかもしれないが、中国の中でこうした女性が生まれてきた、そうした変化が出てきたということを番組では描きたかった。カリスマだけにスポットを当てるのではなく、という意見はその通りで、確かに1人の人間がすべてを

変えられる時代でなくなりつつあることは間違いない。しかし、アジアにおいてはまだ1人の人間のパワーが、組織やそれぞれの国の経済を変えうる部分も残っている。1人の人間の力が何かを変えていく瞬間を描きたいというのがこのシリーズの趣旨だ。現在第2シーズンまで制作してきて、来年度以降は第3シーズンの企画を温めているところなので、より有機的に島耕作のアニメが絡んでくるシリーズにしたいと思う。

- よく耳にする、中華思想や事大主義という観点からすると、自己利益より他人利益を優先するような経営マインドがあったのかと感心して見た。番組では、女性の力とか、女性は正論を言うとか、女性が鍵となっている言い回しがあったが、かえって女性に対して特別視、一段下に見ているよう印象を感じ、視聴後感があまりよくないという声が周りからあった。また、番組制作を外部の制作会社に委託しているようだが、NHKの品質管理として、NHKが日本におけるアジア観を下げないような努力をするべきではないかという声もあった。

(NHK側)

女性観についてだが、「島耕作のアジア立志伝」で女性の経営者が出たのは初めてだった。当初から取りあげたいと思っていたが、交渉がうまくいかない人が多かった。女性だから取り上げたとか、女性を特別視して描いたつもりはない。また、この番組は外部パワーも導入し、演出委託という形で制作しており、外部のスタッフも入っているが、NHKのプロデューサーが構成の段階からすべて入って管理している。個人的には、「日本はアジアの中のトップリーダーだ」という歴史観から、いまだ日本人が抜けていないところがあるという気がしている。今回の番組では、アジアの何人かの人が「日本の放送局が初めて上から目線ではなく、本気で学ぼうという気持ちを持って対等に見てくれた」と評価してくれた。これまでもNHKはそういう立場で制作してきたが、従来以上に偏りのない立場でアジアとともに歩む番組を作りたいと思う。

- とてもおもしろかった。着眼点そのものがエンターテインメント性を超え、学ぶことがたくさんあると感じた。せつかくならばこの人物を3回ぐらいのシリーズで見たいと思った。何を正論とするのか、もっと聞きたかった。自分の正論が普遍的な正論になっていく過程があったと思うし、どう伝えたかという伝え方にも彼女の中で変遷

があったと思う。視野の持ち方も世界の中の中国といったものによって変わっていったように感じたので、どうしてそうなったのか、最初に仕事を始めたときはそんなことを考えていなかったのではないかなど、その辺りの彼女の考え方の変化について聞いてみたかった。これらはどんな世代が見ても学べるところがたくさんあるのではないかと思う。楽しく見るより、もっと深く見ても良い番組だと思った。

(NHK側)

そのように見ていただけるとありがたい。中国はいろいろな不正があり、たいへんな国だという面はあるが、一方で変わろうとしているとも思う。董明珠さんを取り上げたことの大きな要因は、彼女が中国の経済人大賞をとったことだ。ここまで世界に目を向け、中国にはコンプライアンスが必要と訴えている人間を認めようという機運が中国の中に生まれていることが興味深い。「世界の中の中国」を初めて本気で考えた女性経営者だったのではないかと思う。

- タイトルに「島耕作の」とあるので島耕作が出てくることは番組の構成上しかたがないと思うが、あまりに無駄なカットではないかというところもあった。強調したかったのかもしれないが、先に見たのものがまた出てくる場面もあり、30分という短い番組で、知りたいことが多い番組だったので、時間的にももったいない気がした。中国は女性管理職が50%を超えていてアメリカより進んでいるところがあると知って驚いた。タイトルの「女性の正論」について、なぜ「女性の」と付けるのか。ビジネスの話であり、「女性の」と付けると全体的に質が落ちてしまうような感じがして惜しい気がした。

(NHK側)

番組の時間が30分になって窮屈になった一方で、テンポよく見られるという意見もいただいている。ただ島耕作のパートで長々と話す部分は要らないという感じを受ける人もいるかもしれない。冒頭の部分については、われわれは常に視聴者を引きつけたいといけないうる考えから、おもしろい部分を先に見せて、見ている人を逃がさないようにと工夫している。ただ番組時間が短い中で、やりすぎてしまうときがあるのも痛感しており、そのあたりは十分に気をつけていきたい。

- 董明珠さんの発言は本当に正論で、日本企業にとっても参考になる。女性の発言と

いうよりも経営者の発言として妥当だと思った。なぜ「女性の」ということはあるにしても意味のある発言だったと思う。社長に反論する場面は共感を持った。いくら立派なことを成し遂げても、普通にいけば11年で社長にはなれない。なぜ董明珠さんは社長になれたのか、よほど上に引き上げる人がいたのか、党の関係する人が引き上げてくれたのか、そのあたりの理由がよくわからなかった。共産主義と言っているが、アメリカでもないぐらいのダイナミズムなので、そこに疑問は感じたが、それを示したことはよかったと思う。私はこの番組を「島耕作の」とタイトルに付いているのでアニメだと思って見ていたことが無かった。「島耕作」ということで人を引きつけて見られているのか、視聴率はどの程度なのか。「島耕作」と付いているのでアニメだろうと思って見なかった人もいるのではないかな。あれだけの内容ならば過去に放送にしたものも、ドキュメンタリーとしてまとめていれば見たいと思うぐらい、内容はとてもおもしろかった。

(NHK側)

衛星放送の視聴率は地上波のそれとは視聴可能世帯数が違うため、単純な比較はできないが、視聴率は1%弱の数字で推移している。1本目を総合テレビでも放送したが、その時の視聴率は4.2%だった。

○ うまくまとめて、総合テレビでも放送したほうがよいと思う。

(NHK側)

なぜ11年間で社長にまでなれたかということについては、社長にたいへん信頼されていたということがあったようだ。社長はおそらくこの女性が中国の経済の何かを変えるのではないかという期待をもったのではと思っている。彼女はわれわれが想像する以上に中国の業界の体質を破壊的に変えていった人だ。そのやり方を見て、これならばコンプライアンスを含め、中国を変えることができるのではないかと考えたのだと思う。この女性ならば中国の旧弊の体質を変えられるのではないかと期待をもたせる女性だったことがいちばん大きかったのではないかな。それが11年での急速な昇進につながったのではないかなと思う。

○ 政治との絡みについてはどうだったのか。また、日本との絡みについては、最初に出てきたときに日本の経済力についてのコメントがあり、「技術力は高いが、大局的

な戦略性がない」と鋭い指摘をしていた。そのあたりを具体的に展開していれば、もっとのめり込めたのではないかと思う。

(NHK側)

董明珠さんは、党幹部とも緊張感を保ちながらも、かなり食い込んでいたと聞いている。日本については、この番組で取り上げた経営者たちは「かつては最大の教師だった。しかし、今や戦略性がないので勉強することが少なくなった」と言う人がとても多い。董明珠さんもそう考えている1人だと思う。

- 安値攻勢より品質で勝負というところがある。この会社は技術開発の面ではほかに学ばないで先行し、独自開発の部分が多いということか。

(NHK側)

技術革新がないと会社としての意味はないと言っている人で、この会社は例えばエコロジーの技術ではトップクラスだ。かつてはすべてにおいて日本の企業のほうが優れていたが、トップに躍り出たころからさまざまな新技術を開発していった。開発費を確保するためにも絶対に安売りをしてはいけない、値下げをしてはいけないというのが強い信念としてあったと聞いている。

- この会社は日本の企業と提携しているので最先端の技術は日本企業が出している。日本の企業のコメントを入れてもおもしろかったかもしれない。
- 冒頭の漫画のシーンで上着を着て出かける島耕作の後ろのベッドで足をパタパタさせている女性の絵が何となくおかしく、大きな問題では無いが、中国では女性の管理職が50%以上という話を始めるときに、日本の女性は何をしているのかという少々変な印象が残った。安倍首相はさまざまな場で、日本の女性進出の重要性を訴えている。少子高齢化が問題になる中で、女性の働く場を増やし、管理職としても活躍してもらうことは重要だと思う。工学に関わる研究者の中では女性は少なく、さらに管理職や教授を務める女性が非常に少ないことが問題だと考えている。このような意味でも、中国、米国などで活躍する女性、その新しい役割などを次々に放送することは重要だと思う。非常に分かりやすい番組だったが、「鉄の女」、「通り過ぎた後には草も生えない」など同じような話があり、若干冗長な印象を受けた。

<放送番組一般について>

- 120年ぶりの大雪や、集中豪雨、フィリピンの大型台風の問題など、地球の環境が大きく変わっているのではないかということを感じる。地球温暖化の問題については、いろいろな説があるので1つの説に偏ることはできないと思うが、「NHKスペシャル」などで取りあげてほしい。一時はみんなも関心を持って、クールビズなどと言っていたが、原発が止まってからどちらにしてもCO₂の排出は増えるとあきらめたのか、クールビズの話も出なくなった。実際に日本は原発が止まったことによって温暖化をさらに進めている面もあると思う。原発問題とも関係するが、地球温暖化の問題をきちんと取り上げ、いろいろな論があると思うが1つの論だけでなく、反対意見も含め、総合テレビでも取り上げたほうがよいと思う。

(NHK側)

今「NHKスペシャル」で取材している。夏から秋にかけ、巨大災害について、温暖化との関係で放送するべく取材をしている。

- 期待している。何がNHKらしい番組なのか、何を視聴者はNHKらしいと思って喜んでいるのか。視聴者の声は好意的な反響が多かったとか、少なかったとかの報告はよく聞くのだが、視聴者はNHKの番組として喜んでいるのかどうかは常に考えたほうがよい。若い人が見なかったら仕方がないではないかというぐらいの覚悟でもよいのかと思う。
- 1月27日(月)のクローズアップ現代「あしたが見えない～深刻化する“若年女性”の貧困～」で女性の貧困について取り上げており、このようなテーマにきちんと目を向けてくれたのはよかったと思う。貧困問題にはとても強く懸念を感じている。特に20代のシングルマザーのセーフティネットが風俗業になっている状況はなかなか知られていないが、今回きちんと焦点を当ててくれたのはよかったし、何とかしなければいけないと思う。一方で、生活保護を申請するには何か月もかかるから当座生活していけないといった発言があったが、生活保護の申請には2、3か月もかからない。申請はその日のうちにできるし、結論は原則14日以内に出さなければいけないものだ。何か月もかかると本当に役所で言われたとしたら、本当はやってはいけないことで問題だ。放送を見て「生活保護は時間がかかるから無理だ」と思われてしまうと人の命にかかわる。たとえばテロップで「実際は法的にその日のうちに申請ができ、14日以内に結論が出ます」と補足があれば、実際に生活保護まで追い詰められている人はあきらめなくて済む。そうした配慮をしてほしい。「クローズアップ現代」

はホームページでもしっかりと内容を出しておりすばらしい。番組を見逃したときにもホームページを見ている。たとえば福祉事務所の連絡先など、いくつかの情報を入れ、貧困で瀬戸際にある女性たちが見たときに連絡できるような公的機関の問い合わせ先を入れると制度と制度の狭間に落ちてしまう人たちを救う一助になるのではないかと思う。

- クローズアップ現代「あしたが見えない」で光の当たらない部分の深刻な現状を見て驚いた。妻と娘と見たが、たいへんなショックをもって受け止めた。親から続く貧困から抜け出せない日本の実態、がんばっても報われない実態をさらに今後深くさまざまな形で知らせてもらい、どのような対策が必要になるのか、深掘りして教えてほしいと思った。

(NHK側)

クローズアップ現代「あしたが見えない」では、風俗店の面接に来た女性がインタビューで「市役所にいくら通っても2、3か月かかると言われて、待っているわけにいかない」という発言をしていた。われわれとしては窓口でこういうことがあれば不適切な運用であると認識している。本来セーフティネットの役割を果たすべき生活保護がそういう状況なので、風俗業がセーフティネットになっている現実を伝えたかった。インタビューを聞いてそういうものなのかと思ってしまう人がいるというところまで思いが至らなかった。今後は不適切な運用であると断ったうえでこのような声を伝えたほうが良いと思っている。ホームページに公的機関の問い合わせ先を掲載することや、待機児童について伝えていくことは、これまで何度か取り上げているが引き続き検討していく。

- 「クローズアップ現代」で取り上げてもらいたいことが子育て支援の危機に関してだ。ニュースで取り上げていたが、厚生労働省が待機児童解消を含めた子育て支援に1兆1,000億円かかるという試算を出した。しかし、実際の財源は7,000億円しかない状況で、待機児童を解消することができないことを意味している。かなり重要な話題なのだが、地味なのでそこまで火がついていない。今のままだと財源が足りずに待機児童の解消もできず、安倍内閣の言う女性の活用という話も頓挫しかねない。この部分にきちんと財源をつける議論をしなくてはいけない。待機児童対策はかなり危うい状況にあることを「クローズアップ現代」などで取り上げてほしい。

- 1月25日(土)の戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか 第8回「山形 高島 日本一の米作りをめざして」(Eテレ 後 11:00~26日(日)前 0:29.30)を見た。有機農業の米作りについて、戦後の頻繁に変わる農業政策の中での減反、機械貧乏、出稼ぎ、空中散布、産直提携など実態がわかりやすく描かれていた。今後のことについてもT P P (環太平洋パートナーシップ協定)、離農という動きと格闘している村の実態が本当に正確に伝えられていた。一方で無力感もある。番組の性格上しかたないのかもしれないが、若い世代の話を見ると若者たちは未来志向だ。高島もラ・フランス、サクランボ、米沢牛でがんばった人々もいる。証言だけでなく、将来を予言するような、農業を元気づけるような番組づくりも検討してもらいたい。
- 教育番組の中に、自ら考えさせる番組が増えてきており、本来の教育番組の役割を果たしていてとてもよいことだと歓迎している。物事の切り口、アプローチのおもしろい番組が増えてきたと思う。「さんすう刑事ゼロ」「スイエンサー」など、いろいろなものに興味を持っている人にアプローチしやすい番組が増えてきたと思う。歴史番組もおもしろくなっている。歴史なので本来であれば同じような内容を繰り返すことが多いのだが、見せ方、切り口、表現を変えアプローチしている。たとえば「歴史秘話ヒストリア」、「先人たちの底力 知恵泉」、上半期に放送した「タイムスクープハンター」など、新番組もそうだがとてもおもしろくなっている。一方で美術、芸術系の番組はもっと努力が必要なのではないかと思う。2020年に東京オリンピックを控え、国民の文化力向上は不可欠であり、NHKにけん引してもらいたい。私たちとともに現在活躍している美術、芸術分野の人を取り上げてほしいと思っている。「日曜美術館」にしても3年ぐらいの周期で同じ人が出てくる。なぜ現役で活躍している人が駄目なのかと聞いたところ、現役の作家を扱うとその人の価値、評価が上がる可能性があるからということだが、そこについては市場はきわめて正當に評価する。NHKが取り上げて話題になったとしても市場は冷静だ。また、もしNHKが現役の作家を取り上げることで価値が上がるのであれば全力で取り上げるべきだと思う。国力が弱くなった今、世界で日本の美術や芸術の市場がどんどん縮小している。私たちが自らの文化を買い支える、見て支えることが必要だ。日本には人間国宝がいるが、どれだけの人が知っているのだろうか。人間国宝には截金(きりかね)という分野があるが、截金の技術をどれだけの人が知っているだろうか。世界中で話題になるぐらい数億冊の漫画を売っている作家がいるが、漫画家のことをどれだけ知っているのだろうか。漫画を知っていても作家のことは知らない。「100分de名著」で取り上げている人は世界中の、100年、200年前に亡くなった人たちで、いま活躍している人たちをなぜ取り上げないのか。過去の人を取り上げるほうが情報としても蓄積があり、資料も集めやすいとは思う。一方、現役の人は私たちがアンテナを高くしておかないと、その人を見過ごしてしまう。NHKにはその部分を努力してもらい、

日本の文化力向上のために、美術番組、芸術番組を磨き上げてほしいと思う。

(NHK側)

以前にも「日曜美術館」については指摘があった。現役の人を取り上げるとその作家の作品価値が上がってしまうという面もあったのかもしれない。制作現場にはもう一度考え直してほしいと伝えてある。現場も現役の人を取り上げてはいけないという思い込みに縛られていたところもあるので、そこは虚心坦懐に、どういう条件なら取り上げられるのかを考えるとやっており検討している。「100分de名著」については名著を扱っているのに、タイトルを変えないと新しい人を取り上げられない。「100分de名著」の中ではないと思うが、アンテナを張って現代作家も取り上げ、チャレンジしたいと思っている。

「日曜美術館」ではないが、「プロフェッショナル 仕事の流儀」などの番組で、今の人もいろいろと取り上げている。

- ソチオリンピック・パラリンピック関連の「アスリートの魂」や「NHKスペシャル」など、スポーツの特集番組を多く見ている。NHKでのスポーツ、特に競技の紹介は素晴らしいと思う。トレーニングには5つの側面がある。いちばん上といちばん下が心理の部分で、それを外した2、3、4の3つが体を鍛える身体トレーニング、技術トレーニング、戦略トレーニングとなる。この3つが体、頭脳の部分だ。この3つをしっかりと描いていると感じる。涙を誘うストーリーではなく、その競技の身体面、技術面、戦略面を視聴者にわかりやすく伝えていて本当に素晴らしい。いちばん下の心理の部分が、なぜあなたは競技をやっているのかという部分だ。メダルをとりたいたいというのではなく、なぜ金メダルでなければならないのかということに心理面からアプローチしている。番組の中でも随所に出ている。いちばん上はリラクゼーションスキル、イメージスキル、集中スキルなどメンタルの部分だ。スポーツドキュメンタリーの中で、5側面をうまく取り入れると、母を亡くしたとか、事故に遭ったなどの選手の人生の部分だけではなく、競技のおもしろさを取り上げていけると思う。これからももっと素適なスポーツ番組を放送してもらいたい。
- スポーツ選手のインタビューやスポーツ番組の進行役に、NHK離れの若者層を取り込もうとするために、お笑いタレントなどを起用し目を引こうとしている番組が多い。本筋に寄り添わない質疑応答や的を得ていない質問をするため、選手は当たり前なことではないかとだんだん不機嫌になる場面が見受けられる。金メダルをとった、

銀メダルをとった、入賞したということで感想を求めるときに「今の心境は」という質問を形を変え、ことばを換え、結局同じ質問ばかりをしていると感じることがある。背景を勉強したアナウンサーが責任をもってインタビューに臨み、メンタルな部分や、そこにたどりつくまでの5側面を理解して質問すると、もっと見ている人に勝つ意味や勝つ方法について、知識欲も満足させられるものになると思う。スポーツ番組だけでなく、音楽、文化的なものにしても、まったく違うジャンルのタレントを使うことで魅力が半減すると感じることもある。お笑いタレントのすべてがそのようなわけではないが、好きならば自分のネタを披露しようとそれしか探っていない感じがして、そういうものは民放に任せればよいのではないか。NHKの番組は文化力の部分を「滑稽な」ではなく、「興味深い」のほうのおもしろさで基盤をしっかりと支えていくような作り方であってほしい。若者離れについては、離れてもよいではないかぐらいにNHKがどっしりと構え、若者が大人になったらそろそろNHKでも見たくなくなってきたとなるような、こびを売らない番組づくりをしてもらえたらよいと思う。

(NHK側)

実際は65歳よりも若い、団塊世代以降の人たちはどんどんNHKから離れているので、若者だけの問題ではなくなっている。20代、30代にNHKを見なかった人は40代、50代になっても見ていないという事実がある。インタビューの技術が稚拙ということは反省しなくてはいけないと思うし、しっかりとした本質を聞ける人を育てたいと思う。だが、そのことと、若い人たちにもNHKを見てもらおうとする努力は別のことで、いまNHKを支持してくれている人は65歳よりも上の人が圧倒的だ。支持層がどんどん少なくなると予想されるので、何とか65歳以下の人にも見ていただくべく努力している。データの的には年を取ればNHKを見てくれるようになるということはないと実証されている。50歳になって今までNHKを見なかったが、見てみようと思えるような番組、ニュースなどを放送していきたい。

インタビューに関しては、パターン化を避けることは重要だと思う。そのあたりはいろいろ工夫をしているが、より注意していきたいと思う。スポーツ実況をしているアナウンサーはテレビでコメントを極力削ることに腐心している。テレビの実況では、何をやっているのかをあまり細々と言うのではなく、伝えるべきこと、見てもらいたいポイントを押さえることを大事に

している。それは日ごろから勉強を積み重ねないとできることではなく、取材をしないとできない。今後もこれらのことを重視していきたいと思う。

- 私はインタビューを受ける立場が多いが、インタビュアーは質問する項目をたくさんメモしてくる。10個ぐらいのメモがあり、1の質問に対して話していると3、4の質問に答えてしまっていることがある。それでも3の質問を3番目にしっかりしてくる。パターンはあってもよいが、あまり余裕が感じられず、質問をして答えを聞いているときに次の質問のことを考えてしまって歯車がかみ合わなくなっているケースが多いと思う。

ほかの委員から文化力についての話があったが大賛成だ。2020年の東京オリンピックに向け、ちまたでは英語を学ぼうとしている人が増えているようだが、外国人はそんなことをまったく望んでいない。むしろ日本人が日本の文化を母国語できちんと語れる人であってほしいと願っていると思う。日本の中に日本の文化をしっかりと語ることができる人が増えれば、外国人に簡単に伝わり、それが国際親善、コミュニケーションの要になっていくのではないかと思う。このような方向性を伝えるような番組も増やしてもらいたい。

- ソチオリンピックが始まる前にも選手を紹介する番組がいくつかあったが、2月2日(日)のNHKスペシャル シリーズ金メダルへの挑戦「世界最高得点をめざせ～日本フィギュア男子～」で男子フィギュアスケートを取り上げていた。3人の代表選手がいるのに、町田樹選手のことを一切触れられていなかった。4回転ジャンプと表現力の2つを中心に置いた番組だからなのかと思うが、男子フィギュアの日本代表は3人しかいないのに名前すら出てこなかった。町田選手はダークホース的な存在でもあったのでどんな人物かを知りたいと思った視聴者もいたのではないか。何か明確な意図があって作られたのかと思うが、残念な気がした。

(NHK側)

同様な指摘を視聴者からもいただいている。世界最高得点をめぐる争いという番組だったので、それにいちばん近いカナダのパトリック・チャン選手、羽生結弦選手と、羽生選手が出てくる前に最高得点を取った高橋大輔選手を取り上げた。日本の代表選手を紹介する趣旨の番組ではなく、世界最高得点をめぐるオリンピックでの争いというテーマに絞ったものだった。町田選手はほかのニュース企画などでたくさん取り上げており、全体としてはバランスを取っているつもりだ。

- 今回で審議委員から女性2人が退任するので、中央放送番組審議会では性別のバランスを考慮に入れ、新規の方を検討してほしい。現在、16人中男性が11人、女性が5人という構成だ。われわれの社会は男性と女性が半々で成り立っているので、なるべくバランスを考えてほしい。男性と女性の話をしたが、主観的な性は男性と女性だけでなくなくなってきている現状もある。LGBTの人もある。そういう人の声が放送、番組の内容に届く形で、中央放送番組審議会に入っていただくとよいのではないかと思う。ジェンダーバランスだけでなく、世代バランスも考慮してほしい。公共放送はすべからず全ての年代を対象にということだと思う。20代から40代ぐらいの若手の声も拾っていただけるような配慮をしてもらおうと、より広い世代から声を集められる中央放送番組審議会になるのではないかと思う。

(NHK側)

放送法では中央放送番組審議会の委員は学識経験を有する者から委嘱するとししか書かれていないが、実際には男女比率や、経済・産業、農業・漁業、文学・芸術、マスコミ、学術、教育・スポーツなど、いろいろな分野からそれぞれ審議委員を選出している。年代についても幅広い年齢構成となるよう努めている。現在、20代の方はいないが、そういうことを考慮のうえ了解していただいて中央放送番組審議委員になっていただいている。審議委員の選考を進め、理事会で審議し、経営委員会の決定を得て委嘱する形となっている。

- NHK経営委員の発言について指摘したい。男女共同参画はありえないという発言をしている方が経営委員になり、NHKの経営に影響を及ぼし、番組内容にも影響を及ぼすのではないかと懸念している。これに対し訂正なのか、反論なのかわからないが、きちんと意思表示をすべきではないかと思う。こうしたことにNHKがどういう姿勢を示すべきなのか、意見があるのならばきちんと説明したほうがよいと思う。
- 経営委員に対する話があったが、この会はいくまでも番組審議会なので、いかなる経営委員で経営委員会が構成されていようと、番組に現れた内容についてわれわれはきちんと厳格に審査する、注文をつけていくという姿勢を貫きたいと思う。個別の経営委員についてのコメントを求めることはあくまでも経営委員会の話であり、そこは峻別したい。ただ、この場での発言は自由であり、そういうことが経営委員会、経営委員1人ひとりに番組審議会のメンバーの意向として伝わることはよいと思うが、この場で経営委員についての発言を求めることは峻別しなければいけないと考える。

- 経営委員会と番組審議会は違うので峻別するべきだとは思う。一方で、経営がコンテンツにまったく影響を与えないかと考えるとそういうわけでもないと思う。私はNHKの番組、コンテンツが好きなので経営によって多少なりともバイアスのかかるような形のものにならないことを強く願っているということだけを表明させていただく。
- 経営委員の発言が番組審議会のメンバーとして気になるときは、それが番組に反映していないかという点は、われわれもいっそう注意深く見ていかなければいけないというのが正しい姿勢ではないかと考える。
- 審議会の在り方については、放送予定も入っているのでこれから先にどういうものを放送するのかが議論の対象になるかもしれないが、放送番組審議会なのであくまで放送された内容についてここで話し合うのがよいという意見に同意する。
- NHKだけでなく、メディアとして自社にマイナスのニュースが出たときに、どう対応をするべきなのかが問われていると思う。公共放送や国営放送には一般にそれぞれのイメージがあると思う。公共放送とは、BBCに代表されるような商業主義、政治的党派性と距離を置いたものがイメージされる。他方で、中国、北朝鮮の国営放送は権力、為政者の広報機関というイメージがある。公共放送、国営放送は相反する2つのイメージの中でせめぎ合っていると思うが、大事なことはどちらのほうの人々から信頼されるのかだと思う。当然BBCタイプのほうが信頼される。ビジネスマンが海外の出張先のホテルで世界で何が起きているかとテレビを見るときにBBCでなく、CCTVを見る人はまずいない。それは党派性、商業主義からの距離を公共放送に求めるからだと思う。民主主義国であれ、そうでない国であれ、為政者、権力を持つ人たちが望むのはBBCのようなイメージを持ち、中身はCCTVみたいなものだろうが、そうはなかなかいかない。せめぎ合いの中で現場の人たちも必死で働いていると思う。経営委員の発言は個人的な発言であり、ルール上はクリアできるのかもしれないが、党派性を丸出しにした経営委員がいるとみんなが知った時点で、その放送局の信頼度がどれだけ損ねられるのかを考えないといけないと思う。しかし、起きてしまったわけで、どう対応するのがよいのかというと、すごく難しく、骨が折れることでもあるが、そのこと自体を報道することだと思う。自分にかかわることであれ、少なくとも事実については報道することが公共放送の信頼度の要ではないかと思う。自分にかかわる問題について話題になり、一定程度の議論の対象になった場合は扱うようにするのが信頼度につながると思う。
- 報道機関がいろいろな問題点を指摘されたときにどこまで自分のメディアで伝え

るのかというのはすごく難しい問題だ。伝えたほうがよいというが、それはなかなか難しいと思う。新聞でいえば一記者の不祥事、スキャンダルは逮捕されれば報道せざるを得ないし、それはNHKでも同じだ。経営主体とか、影響力を持った組織の人たちが週刊誌に書かれたり、可罰的違法性があるわけではなく何らかの社会的非難を受けたりしたときに、どこまで率直に報道機関として報じ、コメントするかはすごく難しい問題だ。答えにくいと思うが、物事の考え方は整理しておく必要があると思う。

(NHK側)

NHKに不祥事があったときは自らニュースにしている。今回も全部をニュースにしているわけではないが、たとえば国会で質疑があったときは、いくつかニュースにしているところもある。そもそも国会中継をしているケースはニュースにするまでもなくそのまま放送になっている。どこまで放送するかはケース・バイ・ケースで考えざるを得ないところがある。まったく伝えないということではなく、公の席、国会、いろいろな記者会見などがあったときは必要に応じて伝えなければいけないと思っている。どこまで伝えるのかは考えながら行うしかなく、ここまでは放送するが、ここまではしないと今の段階で明確に言えるところはない。ニュースとして伝えたほうがよいということがあれば、今回も伝えているし、これからも伝えるときがあるのではないかと思う。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年1月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

1月のNHK中央放送番組審議会は、20日(月)、NHK放送センターにおいて、15人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成26年度国内放送番組編集の基本計画」に基づき各波の番組改定の要点や新設番組の概要などをまとめた「平成26年度国内放送番組編成計画」について報告があった。

続いて、経営計画における「達成状況の評価・管理」（25年度第3四半期・10～12月）について報告があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、2月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

- | | |
|------|---|
| 委員長 | 福井 俊彦（元日本銀行総裁） |
| 副委員長 | 北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役） |
| 委員 | 秋池 玲子（ボストン コンサルティング グループ パートナー&マネージング・ディレクター） |
| | 大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹） |
| | 小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長） |
| | 倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員） |
| | 小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官） |
| | 駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事） |
| | 紫 舟（書家） |
| | 平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長） |
| | 龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長） |
| | 田中ウヰェ京（（株）ポリゴン代表取締役、メンタルトレーナー） |
| | 東儀 秀樹（雅楽師） |
| | 谷口 肇（全国農業協同組合中央会常務理事） |
| | 若月 壽子（主婦連合会事務局） |

（主な発言）

<平成26年度国内放送番組編成計画について>

- 視聴者層の年代別データは以前も議論をしたことがある。若年層を獲得したいという意向も聞いているが、具体的な目標を定めているのか。また、NHKが民放と同じような方向性となることで、NHKらしさはどうなのかという議論があったと思うが、それはどうなったのか。

(NHK側)

若年層の獲得について特に数値目標として定めているものはない。現状の視聴者層は高齢者層に片寄ったかなりいびつな形となっており、そんな中、特に30代、40代の視聴者をこれからの中核層として引き上げたいと努力しているところだ。接触者率は、テレビ4波全体で70%ぐらいに持っていきたいと思っている。そのためには若年層が上がらないとこれ以上数値が上がらない。NHKは高齢者層の接触者率は高く、全体の数値を上げようとするれば、どうしても30代、40代の年層で接触者率を上げていかざるを得ない。そういう意識を持っている。民放と同じような方向性を目指しているのではないかということについては、いろいろなところで指摘を受けるが、われわれとしては視聴者のニーズ、起床在宅率などを十分に踏まえ、「くつろげる・リラックスできる」「生活に役立つ情報やヒントが得られる」ことを重点に、番組編成の議論、内容について詰めているところだ。どうしてもリラックスした雰囲気を出すために柔らかい出演者を起用したいということはあるが、そのことが民放に内容が似てしまうということだとは考えていない。

「連続テレビ小説」の昨今の何作かと、その後にかけて放送している「あさイチ」は、今までの視聴者層よりも幅広い視聴者に受け入れられてきている。夜は「ドラマ10」が平成22年度から始まっているが、今までにない視聴者層を開拓している。こうした成果の上がっているものと、いろいろ工夫をしてもすぐに成果が出てこないものもあるが、毎年、番組改定で具体化している。

平成25年度の番組改定では総合テレビの土曜日に家族、親子で見られる番組を定時番組化している。10歳未満ぐらいの子どもを持つ30代、40代の方に、土日は家族で番組を見て

ほしいと思っている。まだ十分な成果が出ているとは言えないが、多少若い世代の人が親子で見ている傾向が出てきている。このような試みは継続していかないと定着しないので、少し続けて定着化を図ることで、視聴者層の片寄りなどNHKの課題を多少なりとも解消できないかということ編成の上では考えている。

- ニーズ調査を丁寧にやっていると知り、よく調査していると感心した。結果を見ると、常日ごろわれわれが思っていることとそれほど大きな差はないと感じる。週間接触者率でテレビ総計が20年間変わらないにもかかわらず、NHKの4波計では10ポイント近く落ちているということは、相対的に民放が伸びているということなのか。そうであるならば、どうしたらよいかということだ。若い人をターゲットにし、若い人たちが家に帰ってくる夜8時以降を何とかしないといけないという問題意識で模索をされているのだと思う。その時間帯に民放で見られているものはバラエティーだ。民放はNHKに望まれている番組とは違った番組で視聴率を取っている。NHKはNHKとして毅然と、質の高いよい番組を発信すればよい。若い人の視聴率にかかわらず、取り組んでいくという姿勢があってもよいのでないか。逆に言えば、高齢者層が強い支持者となっている番組を、違った形で手直しすると高齢者が離れていくこともあると思う。今のまま民放にとらわれず、NHKとして質の高い水準を維持する番組を続けてほしい。

- 若年世代として、NHK離れについて意見を言わせてもらおうと、NHK離れという問題設定が本当に合っているのかと疑問に感じる。テレビの総世帯視聴率は1997(平成9)年～2013(平成25)年に全局で下がっているという結果が出ている。1997年上期は71.2%だが、2013年上期は63%に下がっている。つまり、テレビ自体を徐々に見なくなっていると言えるのではないか。ゴールデンタイムの視聴率推移はNHKが2005(平成17)年に12.7%だったのが10.5%に下がっているが、他局も軒並み下がっている。NHKの調査資料で若者層を含めた全世代において、どのようにテレビ視聴が変化しているのかがウェブに掲載されている。テレビの見方が変わっているということで調査をしているものだ。これによると、従来のリアルタイム視聴とEPGなどによる録画カスタマイズ視聴の2種類がある。日常的にカスタマイズ視聴する60代は25%、16～29歳は62%で、テレビの前で番組表を新聞で見、それに従ってテレビを見る視聴行動がもはや時代遅れになりつつあるということではないかと思う。テレビの視聴方法が変わってきている時代において、コンテンツをどうにかしようというところに比重を置いた議論は有効なのだろうか。NHKの番組が民放のような内容になったとしても、テレビそのものを見なくなることから逃れら

れないのではないかと思います。30年後にテレビはあるのかという視点から考え直したほうがよいのではないかと。新聞が20年後にあるかは疑問だと思います。アメリカではすでに新聞が高齢者のメディアであり、世帯年収の高い人たちのメディアになりつつある。テレビはしばらく持つだろうが、30年というタイムスパンで見ればまったく違うものになるのではないかと。テレビではないものになっていく変化のあり方について議論した方がより生産的になるのではないかと思います。

(NHK側)

視聴率はリアルタイム視聴の数字だが、接触者率はカスタマイズ視聴が入っても同じ傾向である。

- カスタマイズ視聴を入れたとしてもこれだけ下がっているということになる。欠かせないメディアは何かという問いかけに対し、70歳以上でテレビと答えている人の割合が男性は70%、16～29歳は23%だ。4分の1しかテレビは必要だと思っていない状況だとするならば、NHKのコンテンツに魅力がないという話もあるのかもしれないが、テレビそのものよりもネットで友達とやりとりするほうが楽しいと感じているということだ。楽しい番組を作ろうという方向でもよいのだが、テレビというコンテンツをいかに日常生活に溶け込ませるかということのほうが問われていると思う。プロジェクトなどで、15年後、30年後のテレビのあり方を現場の若手と視聴者の若者とともに考えていくような場をつくってはどうか。

(NHK側)

NHKを見ない人たちを集めたグループインタビューを行い、課題を取り上げるという試みも行っている。NHKを見ない人たちにとって、「NHKらしい番組とは、すなわち見る必要がない番組」という結果になっている。NHKらしいということが優等生のようなとか、堅苦しいといったイメージとリンクしているためだ。そうではない新たな、民放に近づくのとは違う意味での“NHKらしさ”をどうやって作っていくかだ。NHKらしくないが“NHKらしい”というものをどうやって作るかを研究しなければいけないと思っている。そのために開発番組をさまざま制作し試している。

<経営計画における「達成状況の評価・管理」

(25年度第3四半期・10～12月)について>

- 全般的に評価の中身、水準に際立った変化はないという報告だった。質的に高い評価を得ている部分がたくさんあり、それは維持されているようなので、引き続き質の高さを追い求める方向で番組審議会も協力したいと思う。

<放送番組一般について>

- 1月12日(日)のNHKスペシャル シリーズ“ジャパン ブランド”第2回「“日本式”生活インフラを輸出せよ」(総合 後 9:00～9:58)は、個々の事例としてはおもしろいケースを挙げていたと思うが、現実に日本のインフラビジネスは世界でどれぐらい競争上不利な立場にあるのか、遅れているのかというあたりのメッセージが弱かった。日本もがんばっていて、これからまだいけるといようなメッセージで終わっていたが、現実はそんなに甘くはない。ぼやけてしまい、危機感をあおるところが足りなかった気がする。
- 12月28日(土)の解説スタジオスペシャル「2014 どうする日本」(総合 前 0:00～4:00)の4時間をかけた解説委員の白熱した議論を見たが、とてもよかった。テーマ分けも適切で、1分ルールが小気味よく、ハラハラドキドキしながら4時間がとても短く感じた。今後もいろいろな意見が出るような、多角的で自由な意見を容認するとともに、解説委員の体制として農業部門をもっと育てて増やすことも含めて、お互いに切磋琢磨(せつさたくま)し、さまざまな角度から視聴者に良質な解説を提供してほしい。
- 解説スタジオスペシャル「2014 どうする日本」は、残念ながら見続けるのがつらかった。どこかで聞いた意見をずっと話していた。解説委員は当事者でもなく、評論家でもないわけで、どのようなスタンスで言っているのか根拠がない。前々回の解説スタジオのように、賛成と反対に回って無理な討論をするよりはよかったが、それでも見続けるのはつらかった。プレゼンテーションのときにAとBの意見があり、それぞれについてどういう問題点とどういう限界があり、どういう議論のしかたが求められているのかなど、解説委員としてのスタンスの発言がほしかった。どこかで聞いた意見が続き、煮詰まらずに終わってしまった。そこを期待して見たのだが、番組の課題が浮き彫りになったのではないかと思う。

- 1月9日(木)の地球イチバン「地球でイチバン新しい国～南スーダン～」は興味深かった。南スーダンのような戦乱や内戦の話が多い国だと、政府勢力と反政府勢力の対立がどうなっているかなどという話になりがちだが、女子高校生がミスコンテストに出る姿など、家を追われている普通の人たちの生活を見ることができる貴重な番組だった。それでも映像や彼女たちの意見からは、その背後にある緊張、不安などがにじみ出ている感じがした。偶然だと思うが、現地で番組を収録した後に内戦が始まり、その後を追いかけており、印象深い番組だった。

- 1月14日(火)のEテレ・ハートネットTV シリーズ ソチパラリンピック(2)「攻めてつかめ!まだ見ぬ“金”～アルペンスキー 鈴木猛史～」はとてもすばらしかったが、何か違和感を覚え「ハートネットTV」のホームページを見た。「『生きづらさ』を抱える全ての人に向けた新しいスタイルの福祉番組」と書いてあった。「2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて」でよいのではないか。福祉番組でパラリンピック選手の話題を扱うのはおかしいのではないかと思う。これまでの長い経過を考えれば、日本ではこの番組枠であっても、パラリンピック関連の番組が放送されるだけでもすばらしいことだと思う。しかし、パラリンピックの選手たちは生きづらい時期もあったかもしれないが、オリンピック選手と違ったメンタルの強さ、しなやかさを持っており、学ぶべきところがたくさんあると思うので、福祉番組以外の番組でも紹介してもらいたい。また選手へのインタビューを女性タレントが行っていたが、当たり前のことを質問し、その先のことを聞いていなかった。ビジネスマンにも参考になるようなコメントをアナウンサーなら聞き出せると思うのもったいないと思った。

- 1月17日(金)のスペースシップアースの未来 第3回「“客室維持装置”に異変あり」(BS1 後9:00～9:50)では、地球温暖化の問題を取り上げていた。二酸化炭素の排出で気温が上がるという話はよく聞くが、海水温が上がることによってメタンハイドレートが溶け出して、放出されたメタンガスによる温暖化の影響が大きいことや、グリーンランドでは氷中の藻が活発化し、氷を黒くしたことで太陽熱の吸収が進み、氷が溶け出していることなど、温暖化の問題を上手に取り上げていた。最近では地球温暖化の議論が少なくなってきたので、もう少しわかりやすくして総合テレビでも放送したらよいと思う。地球温暖化の問題は原子力発電とも関係する。直接結びつけるのは難しいかもしれないが、そういう傾向もあるので、もう少し取り上げたほうがよいのではないかと思う。

- 「英雄たちの選択」を見ている。徳川家康、明智光秀や東郷平八郎などが大きな意思決定をしたときにどういう選択肢があり、それぞれによいところと悪いところがあ

るが、どうしてそういう判断をしたのか、そして結果的にどうなったのかということ
をさまざまな角度から議論をする番組だ。よいと感じたことは、それぞれ全部に○が
つく選択肢はなく、△や×が入り交じる中でどう考えたのかを冷静に議論しているこ
とだ。われわれがいろいろなことを考えるときや、いろいろな選択をしなければいけ
ないときに、社会的なことも含め、参考になる考え方だ。番組が少し変わるとしても
その点は生きていくとよいと思う。

- 認知症の番組についてだが、NHKオンラインを見ると認知症のキャンペーンを
行っている。さまざまな認知症の番組を放送し、NHK厚生文化事業団が出版もして
いる。このキャンペーンはなかなか表には出てきていないと思う。番組編集の基本計
画など放送の方針を議論することはあるが、具体的にいくつかの番組を組み合わせて
キャンペーンを行うことについて番組審議会で議論したことはほとんどないと感じ
る。行う必要があるのかどうかも含め、NHKがそうした方針で番組をこれから作る
ということがあり、それが来年度の目玉の1つということがあるならば、番組審議会
で議論するなど、企画段階から意見を言える機会があれば、キャンペーンというコン
セプトについてももう少し議論があってもよいのではないかと思う。今いくつ展開して
いるのかもよくわからない。キャンペーンについても番組審議会に取りあげてほしい
と思う。
- 視聴行動は変わってきている。私の職場には10名のスタッフがいるが、20代、
30代の独身で新聞を購読している人はひとりだけだ。何曜日にどのような番組を放
送しているかよくわからないが、何となく水曜日のNHKはおもしろいという印象は
残っている。それはおそらく「ためしてガッテン」と「クローズアップ現代」がある
からだと思う。新聞やウェブなどで番組表を見ない人でも録画しやすいような印象を
残すために、曜日ごとに色をつけることもひとつの手ではないかと思う。総視聴時間
は低下している。ひとりが見るテレビの時間が低下しているのであれば、当たり前
のように番組の時間も短くする必要があるのではないかと思う。最近おもしろいと思
う番組は、5分間の「考えるカラス～科学の考え方～」、過去に制作された学校放送番組
を再編集した10分間の「10min. ボックス」、10分間の「ふしぎがいっぱい」
だ。このような短い番組が、視聴時間の低下という時代に合っているのではないかと
思う。
- 前回の審議会で特定秘密保護法をめぐる報道について意見をした。さまざまな論点
をどう確保するかという問題で、何と何をバランスさせるのかということだと思
う。総理大臣の記者会見はニュースの素材であり、ニュース素材を反対意見と並立させる
ことでバランスをとっているということだが、私は、総理大臣の政策決定から実行過

程がニュースの素材ではないかと思う。それに関し、どのような意味があるのか、必要なことなのかという解説を抜きに反対派、批判派のコメントだけを持ってきている。これには一部の人にさうとう違和感があると思う。ニュースの素材に対し、こういう必要がある一方で批判もあるということを行うことが公平なバランスだと思う。オスプレイが山口県の岩国基地から沖縄に配備される際には、NHKのニュースで映像が出て、その後に沖縄県民の声を拾って、「危ない」とか「うるさい」という声だけが放送された。ニュースの時間が短いという面があるならば、素材だけを放送するということもある。NHKの報道すべてがバランスが取れていないと言うわけではなく、たとえば年末の安倍総理の靖国参拝に関しては、12月26日(木)の「ニュースウォッチ9」では、安倍総理の参拝という素材があり、それに対する賛成の声と反対の声があり、識者が2人出てきて賛成か反対かよりもそれぞれ中立の立場から解説をしていた。バランスが取れていたと思う。特定秘密保護法やオスプレイ配備の報道については少し偏りがあるのでないかという印象をもたざるを得ないということだ。これが難しいのは、素材、識者のコメント、街の声は明確には仕分けができない部分もあるということだ。沖縄の反対集会は1つの素材であるが、配備反対の意見でもあるわけで、素材として扱えるのか難しい部分がある。素材の選択によっては公平でないという意見も出てくる。放送法や受信料で経営しているNHKが左右から批判されるのはNHKの一種の宿命で、センシティブな問題ではあるが、放送法で言えば第4条第1項第4号の解釈の問題をNHK内部でも議論すべきかと思う。

(NHK側)

素材という言葉の解釈に齟齬(そご)があるのかもしれないが、オスプレイ配備の報道の際には、安倍総理、菅官房長官の話も出ているし、自民党の議員、防衛省の話も出ており、もちろん反対の人の話も出ている。安倍総理の靖国参拝については、安倍総理がなぜこの段階で靖国を訪問したのかという安倍総理自身のことを、会見も含め、かなり詳細に伝えないことにはこの問題の是非を論じられないところがあった。靖国参拝については、安倍総理の会見部分が長く、賛成意見と反対意見もいろいろあり、外国からの反応は、中国、韓国、アメリカ、ロシア、EUで批判的な声が出ていたので、それらは伝えなければいけないということがあった。1月19日(日)の日曜討論「2014年 政治はどう動く」では各党党首全員にインタビューをした。安倍総理は内閣総理大臣であり自民党総裁という立場で話をしており、また自民党は議席数が多いので、長めの時間を取って話を聞いている。次いで民主党が長くなっている。自

民党の時間が長すぎるのではないかということも視聴者の声の中にはあるが、そこは総理の発言の重み、議席に差があるのでそうした形で放送することが公平・公正ではないかということで放送している。また、たとえば、番組で米軍普天間基地のことを取り上げれば、かなり過去にさかのぼった事実関係も含め、それぞれの意見を伺うことになる。毎正時の短いニュースではそれができないが、「NHKニュース7」や「ニュースウオッチ9」などある程度時間が取れるところではそれぞれの意見を取り上げることになる。公平・公正についてはいろいろな立場からの意見があるので考えたい。

たいへん難しいところがあると思うが、放送法に忠実に公平・公正、中立のバランスを取るという努力をしている。いろいろな意見があることも事実だ。世の中の人にはNHKをどう見ているのだろうかということもきちんと把握し、そういうシステムを作って、PDCAを回している。これを繰り返しやることで磨き上げていくということではないかと思っている。

特定秘密保護法案の報道に対する意見が前回あったが、賛成意見も当然取り上げている。時間の取れるときは賛成意見と反対意見をともに紹介し、多様な論点を紹介する方針が当然と思っている。多角的に意見を紹介し、視聴者の判断に資する立場に立って伝えていきたい。素材の後に賛成意見と反対意見を必ずつけるというのは1つの図式としてあると思うが、例えば官房長官が法案を成立させる必要があると細かく説明しているときに、時間の関係もあり、それに賛成と反対の両方の意見を付けることができないときもある。政府与党の言うことはすべて素材で、常に賛成意見と反対意見をつけなければ公平でないというものでもない。政府与党が法案成立の必要性について明確に述べている場合には、必ずしも賛成意見と反対意見を付けなければならないということでもないのではないかと判断している。

- ニュースの後に、時間が無いためにバランスを取れないのであれば、素材だけ伝えるという手もある。ニュースの後に反対意見のコメントだけが出てくるから違和

感がある。「ニュースウォッチ9」のように時間が取れて多様な意見を出していれば問題はない。

(NHK側)

政党の発言や動きだけでなく、NPO法人や市民団体など、いろいろな人の動きもある。それを総理が発言したときのようによく取り上げることはないが、そのような活動についても、朝、昼、夜などのニュース枠で、多様な意見として伝えていくことが必要だと考えている。この国のあり方として、政府、役所などもあるが、市民団体、NPO、個人がいろいろな形で活動していることも伝える必要がある。

- 動きをとらえることも素材であり、素材も党派性があるから難しい。いろいろなとらえ方があるということだ。党派性のある素材もあるため、そのバランスをどう考えるかということで、何と何をバランスさせるかという議論がNHKの中で足りていないのではないかと感じている。
- 素材を選ぶこと自体がニュース価値を判断し、価値観報道をしていることだと思う。歴史は選択的にひとつの状況をいつも作り出しているわけなので、何を選び、どういうところを強調し、どれだけ報道するかによってひとつの価値観が含まれていると思う。素材論という言い方は一概には言えないのではないと思う。政治権力が決めたことや方向性に対し、その強制性、実現性を考えた場合、そのことによって起こる少数者、弱者の立場からある程度のコメントをより多めに報道することのほうがバランスは取れていると思う。ただそれは10対0ではなく、7対3ぐらいかと思う。7は政治権力に対する1つの問題点を指摘すること、3は政治権力の正当性についてコメントすること、そのぐらいのバランスがあってもよいのではないかと思う。
- 素材という言葉はあいまいだと思う。わたしは独裁政権国や非民主的な国で取材することが多かったが、そういうところのテレビは素材だらけで、大統領がどこへ行った、大統領が何を言ったといったことばかりだった。そういうものを相対化する視点をどうやって編み出すかが報道ではないかと思う。それぞれに批判的か、支持するか、どちらの場合もあるが、起きていることを相対化する視点があるかどうかのポイントではないかと思う。
- 普天間基地の問題、尖閣諸島の問題、電力、原子力の問題、オスプレイの問題などいろいろある。日本の中での議論についてはかなり報道しているが、それが海外から

どう見えているのかはなかなか出てこない。国民はいろいろな角度からものを見る必要があり、全体像をつかむことによって自分なりの意見、判断の根拠を得ることができる。情報に関する視点は国内の賛否だけでなく、海外ではどういう情報に基づいて見ているのかということも付け加えるともっと大きい像で見えてくると思う。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年12月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

12月のNHK中央放送番組審議会は、16日(月)、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成26年度国内放送番組編集の基本計画（案）」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、NHKスペシャル “認知症800万人” 時代「“助けて”と言えない 孤立する認知症高齢者」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長	北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委員	秋池 玲子（ボストン コンサルティング グループ パートナー&マネージング・ディレクター）
	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
	小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	東儀 秀樹（雅楽師）
	谷口 肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

<平成26年度国内放送番組編集の基本計画（案）について ～諮問～>

- NHKは想定される首都直下地震や南海トラフ巨大地震などに対し、どのようにして公共放送としての役割を果たすかが重要だと思っている。大規模災害への対応を

「国内放送番組編集の基本計画（案）」の最優先事項に掲げたことを評価したい。NHKとしてこの点にしっかり取り組んでいくと掲げたことによって、組織として1つの秩序ができる気がする。「国内放送番組編集の基本計画」がどのように実現されているかについて、これまで検証の部分が入っていなかったことが不思議だ。今回、より具体的に明記されたので、検証した結果を聞く機会があればよいと思う。また、東日本大震災の報道体制についての検証は行われているのか。「国内放送番組編集の基本計画（案）」で緊急報道・制作体制の充実をうたったのはよいが、東日本大震災という大きな体験を踏まえて、新たに重要視するという段取りであればさらによくなると思う。東日本大震災のときの検証結果はニュアンスとして盛り込まれているのか。

（NHK側）

東日本大震災については、その報道だけでなく、NHKが取り組むべきすべての課題について、この2年半の間に各セクションで相当な議論を行ってきた。担当や職員が替わっても常に引き継いでいけるように、どういう放送をしたのか、どこをさらに強化すべきだったのかについて検証を行い、大部分を文書にしている。そのうえで現経営計画や今年度の「国内放送番組編集の基本計画」、また平成26年度の「国内放送番組編集の基本計画(案)」についても、その検証を十分に踏まえ書かれたものと受け取ってもらってよいと考えている。

平成23年10月のPBI（国際公共放送会議）のシンガポール総会で、東日本大震災の緊急報道について話をしたところ、NHKの体制について評価を受けた。今年度のPBIでは、その後のNHKの対応について、「東日本大震災後のNHKにおける災害対策の強化」をテーマに講演を行った。NHKの取り組みを分析し、国民の生命・財産を守るために、絶対に放送を止めないという観点から何が必要かを検証し、放送機能や体制の強化を行ってきた。また、人の命を救うためにソフトの面でも見直しを行い、若干命令口調にはなるが、津波報道の際のアナウンサーのコメントも「すぐに逃げてください」に変えた。ラジオの重要性も再認識した。PBIではそういう話をしたが、その後のNHKの考え方、行動もともに評価された。これらのことが「国内放送番組編集の基本計画(案)」に投影されている。

- 今の話は大事だと思う。今日の連続テレビ小説「ごちそうさん」の中で関東大震災が起き、大阪の若い2人が慌てている姿があったが、現在ではかなり違う状況になると思う。今年に関東大震災から90年にあたるが、放送機能や報道体制の強化に引き続き取り組んでいてもらいたい。東京電力福島第一原子力発電所に関する報道については、活力ある東北の未来につなぐ観点から、トラブルに関してだけ伝えるのではなく、うまくいっていること、一生懸命に取り組んでいる人のことを放送するのも忘れないでほしい。「国内放送番組編集の基本計画(案)」の内容は素晴らしいと思う。
- とてもよくまとめていると思う。「国内放送番組編集の基本計画(案)」が適切に実行されたかどうかについて、多角的な評価指標を用いて評価管理を行うというのは必要なことだと思う。多角的な指標に関しては、「国内放送番組編集の基本計画(案)」の9つの項目についてNHKが1年間を通してよくできていたかを調査すれば、視聴者から見てどの項目は実現できていて、どの項目は不十分だったのか、いろいろな評価をもらえると思う。内部での指標も大事だが、視聴者が満足したのかどうか、どのように評価したのかを調査したほうが翌年の改善に結びつくと思う。
- 審議会でも毎月、放送番組モニターや視聴者意向の紹介をしているが、これらの聞き方の工夫もあるかもしれない。
- 統計的なデータがよいと思う。こういった意見があったというのではなく、数値で10点満点のうち何点だったのかを明確にしたほうが対策を取りやすいと思う。数値として把握できないものを改善に結びつけるのは難しいので、定性的な意見もあるだろうが、定量的な数値も出したほうがよいと思う。

(NHK側)

定量的な数値については、放送に関する10の指標への評価として、四半期に1回のアンケート調査で、できるだけ継続して、同じ質問で取っている。重点事項は今回1つ増やし9つとした。重点事項は年ごとに数も内容も、そのときどきの課題で変わるので、それによって質問が変わると前の期と比べられなくなる。放送の10指標の中に重点事項はだいたい含まれているので、3ヶ月ごとに検証し、視聴者の定量的な評価を仰ぐというシステムをとっている。それに日々の視聴者の声、各番組審議会での各委員の意見を合わせ、評価として四半期ごとに公表している。今後もそういう形で行っていかうと思っている。

- 継続性のため、従来からの指標で評価の変化を見ていくことも必要だが、重点事項を9つ決めたらその9つはどうだったのかを直接聞かないと、今年1年がどうだったかという振り返りが難しいと思う。いろいろな情報を集め、9項目が実現できたのかを判断する方法もあると思うが、明確に9つの重点事項に対して視聴者は満足したのかどうかを聞いたほうが、9項目がどれだけ達成できたのかがわかると思う。

(NHK側)

これまで直接的に「国内放送番組編集の基本計画」の項目についてアンケート調査をしたことがない。多角的な評価のしかたの中の1つに新しいツールとして加えられるかもしれないので検討したい。

- それでは前回の審議と併せ、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申したい。

(NHK側)

番組審議会の答申をいただいたので、この後「平成26年度国内放送番組編集の基本計画」を経営委員会に提出する。経営委員会の議決を経た後に、来年度の具体的な番組編成を決定し、番組時刻表を含めた編成計画について、次回1月の番組審議会で報告する。

<NHKスペシャル “認知症800万人”時代

「“助けて”と言えない孤立する認知症高齢者」

(総合 11月24日(日)放送)について>

- 自分の問題として妻と2人で見た。番組を見終わって解決策は何もないと感じたが、視聴者に自分の将来についてそれぞれ考えてもらいたいというのが趣旨だとすれば納得できると思った。医療の進歩により人々を長生きにしても、最後は認知症で徘徊するのであれば、何のために長生きするのかがわからない。いずれ人間は死を迎えるにしても、つらい時代に入ったと感じた。
- ひと事ではないというのが実感だった。番組としては1つの問題提起になっていたと思う。各地域でも同様だと思うが、地域包括支援センターの人が献身的に、仕事という以上に社会的使命で取り組んでいる。この体制が社会保障の見直しも含め、持続可能になっていくのかは、かなり深刻な問題だと思う。地域包括支援センターの対象

は高齢者に限らず、就労支援の問題もある中で、どのような仕組みが必要となるのだろうか。支援については申請主義のため、措置義務がない一方で、見守りなどの住民組織、NPOもあるが、最後は行政が責任を持たなければいけないところがある。そこについての施策や、場合によって予算も含めた必要なケアなど、担当している側からの訴えを取りあげてほしい。

(NHK側)

取材した地域包括支援センターでは、4人の職員が高齢者だけで7,000人を担当している。高齢者の自覚を促すだけでなく、人材も含め、在宅医療、在宅介護の制度設計そのものも正していかなければいけないと思う。在宅医療と在宅介護の重なっている部分に無駄があるとか、NPOも含めたもともと地域社会にあるものをうまく生かし切れていないとか、地域を定点で見ていくといろいろな課題が見えてくる。これから先高齢者の独り暮らしは、最盛期にはおよそ750万人に達すると言われている。働く世代が激減し、世界に類を見ないスピードで日本は支え手が減り、支えられる側が増えることになる。世界に発信する日本の医療、介護の事例となるように、取り組みも紹介できるように取材を深めていきたい。

- ロンドンで初の認知症サミットが行われたタイミングで時宜を得たよい企画だと思う。11月23日(土)のNHKスペシャル「認知症800万人」時代「母と息子3000日の介護記録」(総合 後9:00~10:13)や、12月14日(土)の「週刊 ニュース深読み」でも認知症を取りあげており、とても啓発力があつたのではないかと思う。厚生労働省の発表では高齢者の4分の1が何らかの障害を持つと言われている。認知症の問題は、家族、医療、介護関係者レベルから国家レベルの問題に上がってきている感じがする。解決に向けては、地域社会の取り組みも必要だが、新薬を開発するような企業、研究機関などとの国家レベルでの連携が今後とも必要になると思う。農村の高齢化が進む中、わたしが勤務する団体でも、助け合い組織やホームヘルパーの育成、デイサービスも1,000か所以上作って対応してきたが、経営的に難しい問題がある。国家レベルでの要支援の方の早期診断等の対応も必要だと思う。総動員体制でやらなければいけないレベルの問題かもしれないと考えさせられた番組だった。
- 説得力があり、厳しさがよく伝わる番組で食い入るように見た。取材対象の人たちが、どんなに説得しても自分のことがわかっていないため、病院や施設に行くことに否定的であるということはわかったのだが、反対に同じような症状であっても進んで

病院や施設に行く人たちもいるのだと思う。そういう人たちを取材することで、病院や施設に行くことを拒んでいた人が番組を見て、触発されるようになれば、テレビが与える影響としてよりよいものになるのではないかと思う。番組の中でカメラの映像が横になっている場面があった。今どきのテレビの作り方ではそのような場面はカットするのだろうが、そのまま生かしたのはとてもリアルで本当の報道だと感じた。

(NHK側)

支援拒否については、番組ではなかなか紹介しにくかったが、最初は認知症を自覚しているから拒否することがあるようで、自分が認知症だと認めたくないためにがんばってしまう人がとても多いそうだ。認知症は怖い病気ではなく、早い段階で介護や治療にかかるとそのままの症状を長く維持できる。病気のこともしっかりと伝えていかなければいけないと感じた。

- 見逃されがちなケースに焦点を当てたNHKならではの番組で、重く受け止めたとともに、興味深いテーマの番組だった。自分自身の将来に準備として何ができるのかということをも自分の問題として考えた。具体的な取り組みを行っているケース等も紹介すると、自分がこれからしなければいけないことのヒントになると思った。行政だけでなく、社会で作るべきセーフティーネットとしてNPOやコミュニティもあるが、民間業者も含めた視点もあるのではないか。番組で紹介されていた資産運用を誤ってしまったケースについては、金融機関が特別なサービスを行えるのではないかなど、いろいろな問題を提起していると思う。民間でも何ができるのか、社会のセーフティーネットの作り方を考えるきっかけになればよいと思う。NHKスペシャル“認知症800万人”時代「母と息子 3000日の介護記録」では、何ができ、何ができなかったのか、こういうアイデアもあったのではないかとこのところまで議論があり参考になった。
- 重い課題を投げかけながらも、見やすい、優れた番組でとても啓発された。高齢者の方、地域包括支援センターの方、解説者の方がそれぞれの立場で語っていたが、ここから何を読み取ればいいのか、自分なりに読み取るものはあるが、読み取った先に何がありうるのかという補足はあってもよい気がした。定量データなども含め、全体状況の中で、今回はどのような人を取り上げているのかなど、今回はこの部分の話であるといった解説があればさらによいと思った。まだ認知症になっていない、将来なるかもしれない人たちが、偏りのない気持ちで認知症高齢者の問題を受け入れていくことによって、将来このような問題が減ることにつながると思う。今後の番組にも期待する。

- NHKオンラインで「認知症」という言葉を検索すると番組がたくさん出てくる。「認知症」の字が躍らない日はないぐらいの感じがする。ホームページにも考えるきっかけになってほしいということが記載されていたが、きっかけ以上に、自分か家族のどちらが先に認知症になるのだろうかと思暗たんたる思いをした。番組では何人かを取り上げており、ある人には了解を得て放送することにしたというコメントがあったが、古新聞を家の内外に積み重ねていた方の場合は、番組内でのコメントがなかった。認知症の人からどのようにして了解を取るのかと疑問に感じた。また、支援を拒否していた女性はようやく病院に行ったところ想像以上に症状が重く、そのまま施設に入った。地域包括支援センターの人は支援を受けるよう必死に説得していたが、それでも家に踏み込んだりはできないと話していた。その後、その女性の部屋はきれいに片付けられた状態が映っていたが、行政が入ったということなのだろうと推測した。短い時間で説明することは難しいと思うが、飛躍がありすぎてついていけなかった部分だった。

(NHK側)

今回出演された人については、本人に話をして了解を得ている。本人の判断は認知症が前提になっているので、診断を受けている人は、主治医と地域包括支援センターを通じて親族がいる場合は6親等以内の親族すべてに許可を取るという手続きを行った。関係する方は親族だけではないので、本人との関係者すべてに了解を取っている。そのうえで最終的に地域包括支援センターの担当者と「放送上のメリット」と「本人にとってのデメリットはないこと」を確認し、放送後のフォローアップも行っている。特に独り暮らしの人から同じように暗たんたる思いに駆られ、どうしてこのような番組を放送するのかという意見をもらったが、まず、この現実をしっかりと知ってほしかった。知らずに備えがないということではなく、知って備えてほしいし、考えてほしかった。これで終わりではなく、また高齢者介護の問題については取材を続けていく。

- “認知症800万人”時代という問題はとても大きなテーマだと思う。シリーズとして続けるのと思うが、このテーマの中で今回放送した切り口はどのレベルの話なのか、出演した3人はどのレベルの認知症なのか、全体の中での位置づけ、解説がほしかった。もっと深刻な状態もあるし、軽度の状態もあると思う。病院に行けた人と行けなかった人がいたが、もっと夢の持てるよううまくいった事例も取り上げていけば対比ができてよかったと思う。今回は助けてと言えなくなる前に言いなさい

ということを教えられたので、納得できる部分もあるが、今回は全体の中のどの部分について取り上げたのかという説明があればより理解が深まると思う。

- かなり重いテーマだと思って見た。認知症を扱った番組はたくさんあるということだが、この番組だけを見た場合には、どの部分の論点を今回示しているのかがわかるとよかったと思う。墨田区の例では、行政で高齢者 7,000 人に対し担当者 4 人で見ているということだが、実際に巡回するにしても何か月に 1 回となってしまう。特に危ない人には頻繁に行くのかもしれないが、行政が追いついているのか、いないのかという実態もあると思う。介護サービスを拒む例があったが、実際の介護サービスとはどういうもので、認知症の人にどのような効果をもたらすのか、介護サービスを受けることによって認知症を遅らせることができるのか、改善することができるのかなどの論点もあると思う。治療方法についても、認知症にはどういう治療法があり、これから先どう改善されていくのかといった論点の広がりもあると思う。すでにそういうフォローをしている番組はあると思うが、その中で今回はこういうテーマで取り上げたという趣旨の話があればさらにわかりやすかったと思う。今の段階での問題提起としてはとてもよい番組だった。

(NHK側)

今回は認知症でも自由に歩ける、自由に生活できるが認知症の症状が現れている人が取材対象だった。7,000 人の高齢者に対し 4 人の支援センターの職員が担当している状況で、なぜあの人たちに気づくことができたのかというと近所からの通報があるからだ。あの家は夫婦げんかをして激しく口論をしているから危ないのではないとか、あそこの家は新聞紙がたまって火事になるかもしれないから見回ってくれとか、異臭がするとか、そういう通報のあるところを見回っている。7,000 人のうちの 1,000 人もカバーし切れていないのが実情ではないかと思う。取材をした感覚ではそれ以下しか見守り切れておらず、まったく目が届いていない。偶然にも地域住民からセンターに通報があり、何とかサービスにつなげようとしているが、番組では、既に認知症が進行し、本人がかたくなに拒否の姿勢を取っている事例を紹介した。少しの間、支援センターにいても、電話が鳴りやまないほど通報が増えているが、発覚したのはほんの一握りだ。支援センターのようなところにつながらずドアの向こうで認知症高齢者が孤立するケースが多々あるのではないかと思う。

- とても重い内容だが、きわめて多くのことを考えさせるすぐれた番組だった。映像を撮るうえで細心の注意を払っていたようだし、カメラの威力は大きかったと思う。妻の介護に疲れ夫が涙を流した場面や、その妻が徘徊（はいかい）で急になくなった場面など、そうした瞬間をしっかりと映像でとらえていたのには感心した。番組に対する反響はどのくらいあり、どういう意見が多かったのか。

（NHK側）

視聴者からの反響では、認知症の介護をしている子どもの立場の人、認知症の症状が現れ始めて自分が認知症でないかと不安を感じている独り暮らしの人からのものが多かった。周囲のサポートを得られなかったり、どこに行けばどういう支援が受けられるのかがわからずに家族介護で苦しんでいたりするなど、ひとりで不安を抱えている多くの人がこの番組を見てくれたと感じた。そういう人たちにどうすればよいのか、どういう取り組みがあるのかということも伝えていかなければいけないと強く感じた。

- 番組を見て、こういう事例はうまくいっているとか、こういう介護サービスは効果がある程度期待できるとか、そういうことがわかると番組の重さがもう少し客観的に理解できる気がした。
- すばらしい番組だった。番組としては完成しているかと思うし、学びが多かった。7,000人の高齢者を4人の職員で見るというのは現実的でない人員配置だと思う。地域包括支援センターでは全国的にこのような人員配置なのか、たまたま墨田区が平均値より少ないのか、またはそうした統計自体が取られていないのか、などどのような状況になっているのかを知りたいと思った。また、認知症に対する諸外国の対応策もあると思う。最適な手法があるとしたら希望になりうるのではないかと思う。ほかの地域での事例として、たとえば民間のNPOなどを巻き込んで見回りを行うことで地域包括支援センターの負荷分散ができていような国内外の事例はないのだろうか。

（NHK側）

決定的な解決策は国も、自治体もまだ見出し切れていないと思う。ただ、墨田区でも行っていることだが、先進的に自治体で行っていることがある。それは、まだ介護の必要がない元気な高齢者に地域包括支援センターに来てもらい、その人たちに見守ってもらうということだ。自分も元気がなくなって支えが

必要になったら頼るのだが、元気なうちは自分が見守る側になってもらうという市民ボランティアを育成しているところが多くある。墨田区では週2回そうしたことを行っている。地域包括支援センターの職員が訪ねることを嫌がる高齢者でも、同じ高齢者に見守られることは受け入れる人が増えていて、早期発見につながるのではないかと期待され始めている。センターの職員を増やすことが現実的でない中、地域の人材を掘り起こすことに目をつけて、さまざまな取り組みを始めている自治体はたくさんあるが、日本では独り暮らしの高齢者の増えるスピードが速すぎて対応がなかなか追いつかないのが現状だ。海外でもいろいろな先進事例はあるが、人口構造的に日本では支えの必要な高齢者が増えすぎていて、海外の事例を日本に当てはめてみても参考になる事例は少ない。日本が自分たちで取り組みを進めていく中で、世界にその好例を発信しなければならない役割を担っていると厚生労働省も考え、自治体と連携した大規模な実験的な試みを始めている。解決策と言わないまでも、解決へ向けた芽が見え始めているものを今後もしっかりと取材し、発信していかなければいけないと考えている。

- 以前、ヨーロッパで認知症の人たちが、施設というイメージではなく、自分たちの住んでいた環境と同じような環境に暮らす例を報道していた。施設という入りたくないという人たちも、報道されたような環境であれば入ってもよいと思うこともある。海外の例も含めて、そういうことを番組で伝えていくと参考になると思う。

<放送番組一般について>

- 12月1日(日)のNHKスペシャル「汚染水～福島第一原発 危機の真相～」は、ロボットが格納容器の周囲の水漏れの状況を撮影し、それについて専門家が議論し、何が起きているのかについて掘り下げていた。水漏れの状況が映像で見られたのは衝撃的で、それが生々しく捉えられたこと自体がすごいことだが、もう1つ衝撃を受けたのは画像に出てくる膨大な量の放射線の点滅だ。番組では、これは放射線のノイズだと片づけられていたが、画像の持つ発信力について、制作者はもう少し敏感になってほしい。この画像が何を物語っているのか、水漏れだけでなく作業の困難さ、機器に与える影響を画像そのものが伝えていることにもう少し触れてほしかった。汚染水の問題はとてつもないうえ、目に見えない問題なので、これからはっきり

取り上げてほしい。

- NHKスペシャル「汚染水」はよいドキュメントだった。福島第一原発の問題は、21世紀の日本において、コストや時間、克服しなければいけない困難さという点でも、いちばん巨大で、途方もないプロジェクトではないかと思う。終わっても何かができ上がるわけではないが、絶対に目を離すわけにいかないことであり、どんな困難に直面し、どう克服しようとしているのかを随時知らせないといけない重要な問題だと思う。オリンピックのように関心を引きやすいものではないが、福島第一原発については、汚染水はその一部であって、もっとほかに困難な問題が山積している場所だ。継続して伝えていってもらいたい。
- 11月30日(土)の週刊 ニュース深読み「減反廃止へ どうなる？ 日本のお米」は、出演者のバランスもよく、わかりやすい模型なども設置し、説明も工夫されていた。一方で、討論の最後は、公的な生産調整をやめ、農家それぞれが自由に売り先を考えていくことが、強い農業をつくるのではというまとめだったと思うが、これには疑問が残った。この場合は政策当事者を在席させたうえで、発言するのが穏当だったのではないかと思う。
- 11月30日(土)のETV特集「三池を抱きしめる女たち～戦後最大の炭鉱事故から50年～」は、50年前に500人近くの人が亡くなった爆発事故の被害者たちのその後を追った企画だった。女性が、事故で一酸化炭素中毒となりどうにも動けなかった夫を背負い、たくましく生き抜いてきたことを、3、4人の主人公を通じてうまく編集しており感激した。うまくいかなかった家庭もあったと思われるが、そういう負の部分も付け加えると明暗がわかってよりよかったと思う。
- 夜9時から総合テレビで「ニュースウォッチ9」、BS1で「ワールドWaveトゥナイト」、「ワールドスポーツ11」と3時間連続で3つの報道番組がある。世界的な大きな出来事や日本人が活躍したスポーツイベントなどを選んで見ることができる3時間のよい編成となっており、とても評価している。特に「ワールドWaveトゥナイト」は3人のキャスターの連携もよくなり、質も向上している。世界のニュースは、いろいろ取材をし現場に行き行って撮影することも大事だが、日本には駐日大使館があり、各国の駐日大使をもう少し上手に使ってはどうかと思う。わが国との関係を改善する、あるいは相手の国に日本がどういう報道をしているのかも含めて伝える意義もあると思う。場合によってはNHKの国際的な存在感をその国に伝える役目を果たすかもしれない。「ワールドWaveトゥナイト」でも、駐日大使館を上手に使ったらよいと思う。

(NHK側)

「ワールドWaveトゥナイト」は、新年度に向け、さらに強化、充実したいと考えている。海外ニュースの日本とのかかわり合いをもう少し深く追求するような視点を持たせたらどうかと考えている。駐日大使館の大使の話の話を随時入れることも考えたいと思う。単に国際的なニュースを紹介するだけでなく、日本の経済、政治とのかかわりをもっと深く追求する番組構成を考えていきたい。

- BS1の2つのチャンネルで同じ番組を放送していることがあるのだが、もっとチャンネルの有効的な活用方法もあるのではないか。

(NHK側)

チャンネルでいうと通常はBS101chとBS102chで、1つのBS1として放送している。マルチ編成時には波を分割して、それぞれのチャンネルで別のスポーツなどを放送している。BS1の101chと102chで同じものが流れているのは、マルチ編成をしていなければ波を分割しているわけではなく、画質も落ちているわけではない。

- 特定秘密保護法案で国会審議状況についても報道したということだが、参考人質疑など国会の質疑の中継はしているか。

(NHK側)

参考人質疑は中継していない。すべてではないが、安倍首相が出て討議するものは中継している。国会中継は、所信表明、代表質問、予算委員会の基本的質疑、特別委員会で重要法案を扱う場合など、首相が出席して質疑するものを中継するケースが多い。

- 特定秘密保護法の成立について、いろいろ報道された。今回の法律については、事実の報道だけでなく、解説放送、一種のオピニオン報道がNHKでも必要だったのではないかと思っている。「時論公論」などの番組で放送していたが少なかったという印象だ。今回はとても大きな国論の対立があったが、それだけ大きな問題であったということだ。報道機関としてのNHKのスタンスも問われたと思う。今回はあまりにも短期間で物事が進んでしまい、じっくり考えるような報道ができなかったと思うが、

他のいろいろな問題と同様に、視聴者参加の番組で、政府側と反対側の両方の識者の意見を聞いて、問題点を詰めていくようなことをすれば、法案自体が通らなくなったこともありうるような微妙なバランスのもとでこの問題が進んだと認識している。NHKのオピニオンの解説が少なかったことは残念だ。

○ 放送は有限の公共の電波を用いて行われる事業なので影響も大きく、認定を受けた事業者が免許を受けて放送していることなので中立性の確保は当然だと思う。放送法で政治的な公平、意見が対立している問題はできるだけ多くの角度から論点を明らかにすることが義務づけられている。その点でいえば、今回NHKのニュース番組においてコメントをする識者の選択は、反対派の人が多く、賛成論はおろか、必要論を話す識者も出てこなかったという印象がある。日本の安全保障を危険に陥れるような情報を公務員が漏えいしては困るというのが立法趣旨であり、国家安全保障戦略を立案するうえでも特定秘密保護法制が重要という趣旨のことは紹介すべきだったと思う。以前、特定秘密保護法の報道には知る権利などの人権論の枠組みだけでは語れない部分があり幅広い論点があるが、NHKのそれまでの報道にはそれが無いという話をした。国家安全保障会議を機能させるうえで特定秘密保護法制のあり方はどうなのかという点、国会議員が情報をどのように共有すべきなのか、秘密を管理し、将来原則公開するための仕組みはどうあるべきか、日米同盟とのかかわりがどうなのか、このあたりは論点の1つになりうると思うが、それらに関する取り上げがないという指摘をした。その後も幅広さがなかったという気がする。NHKは商業新聞とは異なり、受信料で運営されているからこそ、視聴者だけでなく、誰にもおもねずに公平中立な報道ができることになっている。NHKの世論調査でも、今回の法律を評価する人は33%、評価しない人は58%だ。一色ではないということだと思う。1つ1つ切り取った生のニュースの中でバランスのない例が散見されるのは問題だと思う。

○ 今回の法律の問題については、TPP（環太平洋パートナーシップ協定）、原発、消費税などのときのように、両論取り上げているから中立だというのは性格が異なり、放送のあり方の根幹にかかわることだ。重要な論点がいくつかあったにもかかわらず、議論が封印され、強行されたという現実がある。立場としての公正中立という問題と、実際に起きている事象に対し良識のある報道機関として何が言えるのかということでは、もう少し言える立場にあったのではないかと思う。物事の賛成と反対については各人で意見は違うと思うが、そうでなく、報道機関として今の動きについて何が言えるのかということであればもっと言えることがあったと思う。論点の中間を取ることが公正中立ではないということを確認してほしい。

(NHK側)

放送の不偏不党、公平公正、多様な意見を伝えることは放送法の中で定められているので、NHKとしてはその法案に賛成、反対という立場で伝えることはできない。事実関係に基づいてそれぞれの立場の意見を伝えるということだ。NHKも加盟している新聞協会が、この法案についてはいろいろ懸念があると表明している。また、安倍首相の記者会見を中継するなど、政府としての考え方を伝えている。放送全体を通じ、賛成・反対双方の立場の意見をどれだけ伝えられたかということだ。それに対しそれぞれの立場から不十分だという批判はあるだろうが、NHKとしてはそういう立場で取り組まざるを得ない。毎正時の短い「ニュース」枠の中で賛成、反対の両方の意見を伝えることは時間的にもなかなか難しいこともあるが、「NHKニュース7」「ニュースウオッチ9」などでは各党の意見や立場を伝え、公平・公正に報道している。これだけ世の中で意見が対立した問題になれば、いろいろな形で賛成、反対の立場から批判があるのは理解できることだ。この問題はその後施行まで約1年あるので、国会や政府の中でもいろいろな意見がこれからも出てくると思う。そういう報道もこれから引き続き行っていく。

- NHKオンデマンドが5周年ということだが、NHKオンデマンドとNHKオンラインの「NEWS WEB」が連携していないことがもったいないと思う。たとえば認知症サミットについてのニュース記事があるが、もっと興味がある人はNHKオンデマンドの認知症特集にという導線を引ければさらに理解が深まる。NHKはドキュメンタリーなどの番組で課題を掘り下げていることが多くあり、アーカイブがすでにある。ニュースという“点”ではなく、そこからさまざまなコンテンツにつなげる“線”にすることでより視聴者のニーズにこたえ、かつ大きな学びにつながるのではないかと思う。また、NHKオンデマンドはよいアーカイブになっているが、倍速再生ができる形にするとさらによいと思う。スマートフォンなどの携帯端末では語学系のアプリで映画を1.5倍、2倍で見ることができる。視聴者行動が変わりつつあると思う。30分の番組を家のテレビの前で見るとというのが動画に接するあり方だったが、今はネット上でさまざまなコンテンツを見ることができ、その時間は数分単位だ。若い年代の視聴者はドラマも倍速化させて見る視聴行動になっている。倍速化を取り入れると音でフォローできなくなるので、テロップを充実させる必要がある。番組内ではテロップを出しているところと出していないところがある。テロップが煩わしいという

人もいると思うが、テロップの充実によって倍速に対応し、ネットで見ているもつらさを感じない。ネット視聴とテレビの視聴では動画の感じ方は変わるので、そこを踏まえた形でNHKオンデマンドに機能追加されるとよいのではないかと思う。

(NHK側)

NHKオンデマンドは活用方法が広がる可能性を十分に秘めている。ただ、ホームページなどとの連携をしっかりとしたものにするには、システムの改修が必要となる。今のところNHKオンデマンドは放送したものをストリーミングで見せるサービスというかなり限定されている状態だ。可能性としてはエンドユーザーに使い勝手のよい、便利なものになる可能性はあるが、現状では法制度も含めていろいろな制約がある。いただいた提案のような機能がオンデマンドの世界で出てくる可能性はあると思う。

- 「NEWS WEB」にNHKオンデマンドへのリンクを張ることは簡単にできるので、ほとんど経費はかからない。大手検索ポータルサイトでも、関連するコンテンツへのリンクは簡単な入力作業だけということだ。大きな投資にならない形でプログラムを組むことは今のインターネット技術で実現できる。すでに膨大なすばらしいアーカイブを持っているので、それを寝かせておくのではなく、きちんと折に触れニュースごとに再利用し、積み重なる“線”を作ることが望ましいと思う。
- NHKオンデマンドは見たい番組を探すときにリストを全部見ないとわからないような状態になっている。もっと使いやすい検索エンジンで、どういう内容の番組なのかがわかるように、使用する側にとって使いやすい形にできないものか。
- 検索エンジンからNHKオンデマンドの個々のコンテンツが見られないが、タグをつければできるようになる。そうなればNHKオンデマンドに入るかという人も増えると思う。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年11月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

11月のNHK中央放送番組審議会は、18日（月）、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、放送番組の種別と放送実績について説明があった。

続いて、平成26年度国内放送番組編集の基本計画（案）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、12月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長	北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委員	秋池 玲子（ボストン コンサルティング グループ パートナー&マネージング・ディレクター）
	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
	小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰヱ京（（株）ポリゴン代表取締役、メンタルトレーナー）
	谷口 肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<平成26年度国内放送番組編集の基本計画（案）について>

- 「編集の重点事項」にあるとおり、引き続き地域の再生、地域の活性化へ貢献する番組づくりを期待する。公共放送として全国津々浦々の地域の暮らし、人、自然、文化に焦点を当て、その多様性に注目してもらいたい。2014（平成26）年は国連が定めた国際家族農業年だ。家族農家はそこに住むために農業を営んでおり、農業を

しながら生物、森、水利システムをはじめ、自然環境、暮らし、文化など、住人が協力し合うことで地域が守られている。NHKが放送開始90周年を迎えるということで、その映像の蓄積から、日本の食生活や農業の変化、将来の日本人の体や健康、自然にかなった食生活の方向などを掘り下げてもらいたいと思う。世界遺産に登録される見込みの和食の食材は、日本で育まれた農林水産品だということを、国民がしっかり理解できるような放送をしてもらいたい。

フランス、アメリカ、中国、スペイン、イタリアは年5,000万～8,000万人の外国人訪問者があるそうだが、日本へは833万人で33位だそうだ。海外へ行くと、ホテル等でもNHKを視聴できないことがあるが、海外でのNHKの存在感を高め、日本の魅力を発信することで、外国人旅行者が増え、観光大国になればと思う。

来年度は東日本大震災から4年目になるが、情報の風化が懸念されている。引き続き、営農基盤も含めた被災地支援の番組制作をお願いしたい。

総合テレビの編集方針について、昨年あった“家族の絆”、“地域の絆を見つめ直し”という表現が消えているが、引き続き必要ではないかと思う。お茶の間のテレビの前に家族が集まり、会話が弾むような番組制作をお願いできればと思う。

- 昨年度の「基本計画」について、結果的にどう実現したのかを検証する仕組みがあると思うが、それはどういう形で行われるのか。去年の基本方針に対し、結果はどうかを教えてください。NHKに求められる価値はいろいろあると思うが、東日本大震災を経験した今、「1. 国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道」が「編集の重点事項」の第一項目に来ており、位置づけとして素晴らしいと思う。国民が最も求めているものだという感じがする。首都直下地震、南海トラフ巨大地震は、いろいろなデータを総合するとこれから10年、50年で必ず起きるとみたほうがよい。その際に皆が慌てて右往左往しないように、迅速な情報を継続的に報道していくための、NHKの体制強化について、具体的な内容を示してもらえるとありがたい。基本計画の中に記載しなくてもかまわないが、相当な準備をしているのだと思う。その準備の内容について、報道番組、あるいは特集番組などで視聴者に少しずつ伝えていくことによって、いざ災害が起きたときの心の準備を視聴者にしてもらおうとか、どのように行動すべきかを事前に学習するといった段階に入りつつあると思う。NHKのこの部分に大きく期待すると同時に、大規模災害に備えた放送設備と体制の強化に努めてもらいたい。

(NHK側)

「国内放送番組編集の基本計画」に沿った形で取材体制、制作体制を作り、具体的な「編成計画」に反映させている。
25年度はまだ進行中なので、四半期ごとに報告している質

や量の指標などにより、目標を達成できているかを順次検証しており、1年が終わったところで全体総括をすることになる。放送設備と体制の強化については、経営計画にも記してあるように、本部のバックアップ機能を整備するため大阪放送局の機能を強化しているほか、本部が被災した場合もさいたま放送局を取材基地にできるように新しい建物を建設した。津放送局や高知放送局など、津波の際に浸水する恐れのある放送局ではサブステーションを造るなど、ハード面の強化は経営計画に沿って一步一步着実に進めている。また普段からきちんと訓練しておくことが大事であり、放送センターでは毎晩訓練を行い、非常災害時に備えている。9月1日の防災の日前後に防災関連の番組を放送し、NHKとしての取り組みを放送の中で紹介した。9月と3月には震災、防災関連の番組を集中的に編成している。また、「NHKスペシャル」では月に1回、東日本大震災を扱うようにしている。来年3月は東日本大震災から3年目となるが、「NHKスペシャル」のほか、地元からの中継を交え、課題などをきちんと伝える番組を放送したいと考えている。

委員のご意見に関しては、「国内放送番組編集の基本計画」の中にも意識して盛り込んでおり、実現するように努めていきたい。昨年の基本計画にあった“家族の絆”、“地域の絆を見つめ直し”という表現を加えた方がよいという意見については、全体の流れの中で検討する。

- 地域については、雇用、福祉、活性化が強調され、よいと思う。欠けているのは国際的な視点だと思う。実際の番組では、アジアに限らず各地を紹介する番組があるが、世界から見た日本という視点が必要だと思う。NHKの国際競争力の強化、世界に通用するというのはNHKの話であって、番組の中で世界から見た日本という視点を盛り込む必要があるのではないかと思う。そういう視点を大胆に打ち出したほうが今後の発展につながるのではないかと思う。
- 今回のフィリピンの台風を見ると、巨大災害の時代、気候災害の時代が来たという感じがする。今回のNHKの報道をほかのテレビ局と比べると、視点が大きくは違ってない。危機、大災害が近隣諸国で起こったときに、NHKの機動力、情報収集力がどれほどのレベルかということ、民放のレベルと大きな差があるようには思えない。フィリピンで起きたことは日本でも起こり得ることで、国民の安全を守る

ことが報道の重要な使命だとすれば、国民に警鐘を鳴らす意味で、国内だけでなく、国外にも目を向けなければならない。国際展開の機動力、情報収集力をさらに強化するという部分が基本方針では見えず、やや内向きな感じがする。そういう部分は「1. 国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道」の中や、「4. 世界に通用する質の高い番組」の中に入るのかもしれないが、国際的な危機や課題、特に緊急事態に対する情報収集力、あるいはそれらを伝えていく力を強化していくという事項を入れてもらえると、今後につながるのではないかと思う。

- グローバルな視点がもう少しあったほうがよい。原案の中にも世界ということばは出ており、このことばを敷衍して番組を作っていけばよいと思う。「日本経済の再生」ということばが「編集の重点事項」の中にあるが、経済を日本だけで考えることは今やできなくなっている時代だ。いろいろな問題をグローバルな流れの中で考えることはNHKだけでなく、他の報道機関においても必要なことだが、足りていない部分だと思う。グローバルな視点という発想を意識して伝えた方がよいと思う。

(NHK側)

国際的な視点が弱いのではないかという意見については検討する。今回のフィリピンの台風災害については、NHKはマニラに支局があり、バンコク、東京からもかなりの人間が取材に入った。現地の状況はかなり悪く、宿泊施設もないためテントで過ごしながら取材を行っている。各地から中継で伝えたが、全てを報道できたかどうかという部分はあると思う。フィリピンの台風災害については、今夜の「クローズアップ現代」でこれまでの取材をまとめ、被害、実態、課題について放送する予定だ。地震に限らず、世界中にいろいろな形で災害、異常気象が広がっている。これらについて、時間をかけ、取材を深めた形で来年度にまとめた番組を作ればと考えている。

- 「編集の重点事項」の「4. 世界に通用する質の高い番組」は文章としてきれいに書かれているが、「NHKコンテンツの国際競争力を強化し」というのは何を競争しようとしているのか。国際放送として何を目指し、価値を高めようとしているのか、どのようにそれを図るのかというあたりが漠然としている。そこがはっきりしないとどういう視点で番組を作るのか、日本独自のコンテンツの国際競争力というものが絞りきれないと思う。ここに記していなくても、すでにそういう議論がさ

れているのであれば教えてもらいたい。

「8. “人にやさしい” 放送・サービスの拡充」について、日本の字幕放送は、海外の放送と比べるとかなり少ないと思う。字幕放送は必ずしも障害のある方だけに向けたものではなく、何かをしながら番組を見る場合にも字幕放送は有効だと思う。長期計画はすでにできているのか、あるいはこれから作られるものなのか、教えてもらいたい。

(NHK側)

NHKの国際放送については「国際放送の番組編集の基本計画」を別に作っている。ここに記載している「国際競争力を強化し」というのは、世界の放送市場で売れるような番組を制作していくこと、また、NHKだけで制作するのではなく、BBCなどの世界的な放送局と全世界でも見てもらえるような放送コンテンツを作っていくという意味で、編集の重点事項に記載している。

字幕放送については、毎年対象番組を増やして取り組んでおり、現在、一部の生放送番組を除いて字幕を付けている。また、災害時のニュースにも可能な限り字幕を付けるよう努めているが、東日本大震災のように、災害報道が長期化した場合にどのように対応していくかは課題となっている。

字幕放送に関して、平成19年に長期計画に関する総務省の行政指針が出ており、平成29年度までに字幕付与可能なすべての番組に字幕を付与することが目標となっている。複数の人が入り組んで話をするような生放送の番組は除くことになっている。字幕付与の目標は、平成24年度までに総合テレビでは74%となっているが、実績値は83.5%となっており、計画より先に進んでいる状況だ。海外の字幕放送の割合については、アメリカは100パーセント、イギリスは97%となっている。日本語と違って表音文字で、漢字変換などがなく、条件面での違いもあると思う。これから生放送の字幕を中心に増やしていくが、平成29年度までに原則100パーセントという目標があるので、これに向け取り組んでいく。

○ 「編集の基本方針」の冒頭に、「豊かで安心、たしかな未来へ」という3か年の

経営計画の文言が記載されているが、この文言に違和感がある。自然災害が多い日本において、日本人は異常な状況のときにもそれを乗り越え、いかに対処してきたかという前向きな強さがあることを、世界に訴えていけると思う。日本は安心ではないし、不確実性をこれから考えていかなければならない状況にある中で、誰がたしかな未来や、安心を提供してくれるのか。そもそも提供してくれると思うこと自体が日本はよくない状況にあることを指していると思う。「豊かで安心、たしかな未来へ」は日本人の受動性をつくる気がしてならず、もっと日本人の強さを感じるような文言が経営計画の中に出せればよいと思う。

○ 「感動できる番組」という表記について、そのような番組を作りたいという気持ちはわかるし、実際に見ていて感動する番組もあるが、感動できる番組を作るというスタンスが、そのようにもっていき、作り込むといったようなあざとさを感じてしまうので、少し変えたほうがよいのではないかと思う。

○ 基本的な内容はよいと思う。この方針で実際の放送を行った際に、本当に視聴者がそれを評価するのかどうかということが重要だ。5ページに「多角的な評価指標を用いた評価・管理を行います」と書いてあるが、NHKにしかできない報道とか、NHKでしか見られない番組が作られていると視聴者が評価しているかという評価指標がないと思う。総合テレビではこのような部門別の編成比率で放送すると書いてあるが、ここをもっと充実してほしいという視聴者の意向を調査する必要があるのではないか。NHKの番組はNHKに期待されているものを放送しているのかという点を調べなければ、総合的にNHKらしいと言っても、何を評価してよいのか、何が不十分かわからない。また、ここに記してあることを実現できたかどうかを評価する仕組みを考えてもらわないと、翌年度NHKにしかできない報道の強化がされたのかどうかは判断できないのではないかと思う。正確・迅速、公平・公正といった側面では調査しているが、NHKに期待するものが作られているのかどうかの評価の指標が必要ではないかと思う。

「編集の基本方針」の2段落目に、経済の再生や財政の立て直し、少子高齢化への対応の記載があるが、「編集の重点事項」のどの部分で取り上げて行くのか。経済が発展するために必要な情報を国民に伝える、財政再建の課題を伝える、少子高齢化の問題を伝えるなどのことがどこかに入ってもよいのではと思う。

○ NHKに対する視聴者の本当の意向が把握できているかは、NHKからどう問いかけるかとも関連する。特別なアンケートをするのではなく、今までの枠組みの中でも工夫の余地があるのかどうかという点も含め、検討が必要だと思う。視聴者のいろいろな意向を収集していることはよくわかるが、NHK自身が、NHKに対して

ここだけはしっかりやってくれという視聴者意向がつかめているかということがポイントだと思う。

(NHK側)

NHKに何が求められているかは、視聴者の声などいろいろな意向集約によりある程度集約できている。正確・迅速、公平・公正といった部分はもちろん、偏りがいいこと、バランスが取れていることなどポイントはいくつかあるが、NHKとしては基本計画に記していることを理念として、価値化して番組を制作している。そのため、現経営計画では部外の評価指標を取り入れ、継続的に視聴者の評価を調査している。現在、実際に質問していることとそれに対する答えは、経営評価に対するものと放送に対する評価の2つがあり、それらの結果を合わせて視聴者の評価として把握し、正しく受け止めた上で、それをPDCAのサイクルに乗せていくというのが今のやり方だ。また、NHKらしいというのはどういうことを求めているのか、そのこと自体を調査することは評価の仕組みの中でありうると思う。視聴者の評価を把握していく方法については、今後継続して検討していく必要があると思う。

- たとえば「NHKスペシャル」について視聴者がどう評価し、こういう番組を増やしてほしいと考えているのかとか、連続テレビ小説「あまちゃん」や「ごちそうさん」はどうか、「ニュースウオッチ9」などの報道についてNHKらしいと見ていて、それをもっと強化してほしいと考えているのかなど、サンプルの番組を出して、こういうものを強化してほしいかと聞かなければ、一括りに全体としてNHKらしいかと質問しても、何をもってNHKらしいと感じるかは違いがあり、把握するのが難しいと思う。視聴者の年代別、性別といった層ごとに、NHKらしい放送を行っている人评价している人は何パーセントなのかといった数値がないと、今年と来年を比較しても、NHKらしい番組が作られたのかどうかの相対的な比較ができない。ある程度は数値で把握したほうがよいのではないかと思う。

(NHK側)

「NHKスペシャル」や連続テレビ小説「あまちゃん」「ごちそうさん」など、番組ごとの質的評価を調査しているが、

これらはいずれも質的評価が高い。人によってイメージがいろいろとあるため、現状では、質的評価が高いとか、どういう番組を求めているかを聞くことによって、視聴者の求めているものを把握しようとしている。“NHKらしさ”というストレートな聞き方が適切かどうか、調査のしかたとしてどういう形がよいのかは研究する必要があるため今後検討していきたい。

番組ジャンルごとに、視聴者の男女別、年層別にどういうジャンルの番組を求めているのかという調査を行った。これで見ると報道・解説番組は全年層でNHKに取り組んでほしいという回答がかなり高い。スポーツ番組は男性が女性よりも高くなっている。科学・自然番組は男性と女性の高年齢層から要望が強い。エンターテインメント、映画、アニメは男性10代と女性の高年齢層が高くなっている。すべての年齢層から要望があるのは報道・解説番組だが、男女の年層別に見ると、求められる番組ジャンルはかなりばらけた形となっている。こうした多様な要望に応じていくため、それぞれの年齢層が求めているジャンルの番組を、各年齢層の方が在宅している時間帯、見やすい時間帯に合わせて編成している。半年に1回ぐらいこの調査を行えば、このジャンルはこの年層で必要と考える人が減っているとか、継続して追うことはできる。そのような形で検証しながら行っていくことは可能だと思う。

<放送番組一般について>

- 10月13日(日)のNHKスペシャル「中国激動“さまよえる”人民のこころ」は、日中双方の人民の間でお互いに不信感が募っている今、一部の人の話であったとしてもこういう報道がいろいろな形でされることは、相互理解のためによいのではないかと思う。民放ではできない番組なので、こういう番組に取り組んでもらいたい。
- 11月3日(日)のNHKスペシャル「至高のバイオリン ストラディヴァリウスの謎」は、私は音楽に興味があるので、NHKならいよいよあの謎を解くのかと期待して見た。どうして300年以上前に作られた楽器が美しい音がして、いまだにだ

れも凌駕（りょうが）できないのかは大きな謎で、最後まで興味深く見たが、かなり不満が残る内容だった。ストラディヴァリウスの謎やミステリー、あるいはバイオリンとは何かみたいな部分に時間が割かれており、ストラディヴァリウスだけがどうしてそんなによい音がするのか、あるいはよい音がするとみんなが感じるのかという分析がそれほど多くなかった。音響の専門家が響く方向性などのデータを出す場面はあったが、消化不良の感があった。NHKは音響の専門家がたくさんいるだろうし、ノウハウの蓄積もすさまじいと思う。それをもってすれば、今までわれわれがわからなかったことが少しわかるようになるのかと期待したが、そこまではいかなかった。「平成26年度国内放送番組編集の基本計画」（案）の中にも「NHKにしかできない番組」と記述されているが、そういう期待からすると少し残念だった。

- 11月4日(月)の解説スタジオ「あなたの働き方が変わる？どうなる雇用」（総合 前 11:00～11:54）を見て、問題があると思ったことがある。議論に当たっては、現状の法制度や、それがどう変わろうとしているかという基本的な情報の認識が共有され、そのうえで議論が行われるのが当然だと思うが、残念ながら今回の番組では、現状の説明が正しく伝えられていなかった。普通解雇と一般解雇の区別もされておらず、判例と法律の区別も行われていなかった。基礎情報が正しく共有されていないまま、意見がぶつかり合っており、何が焦点なのかわからない議論になっていた。解説委員は自分の意見を熱く燃え上がらせるのではなく、議論の論点を冷静に解きほぐすことが重要だと思う。年末に解説スタジオの放送があるようだが、今回はこのような点を意識した番組づくりに期待したい。

（NHK側）

「解説スタジオ」では、そのときどきに関心のあるテーマを、多角的にわかりやすく伝えていきたいと考えている。偏った内容ではなく、正確に、わかりやすく伝えることを目指している。いただいたご意見を踏まえ、12月に予定している番組ではできる限り丁寧に伝えていきたいと思う。討論を通してでも情報をきちんと組み入れ、冷静に考えることができる材料を視聴者に提供したいと思う。

- 11月4日(月)の解説スタジオ「あなたの働き方が変わる？どうなる雇用」は、大きな視点からの日本への影響と、雇用への直接的な影響が混同して一緒に議論されていた。見ている側にとっては、それがきちんと整理されないとなんが問題かが把握できず、いろいろな意見が錯綜していて混乱した。それぞれの意見に対し、所々

で解説があったほうがわかりやすいと思う。

- 「ファミリーヒストリー」は芸人や著名なタレントの家族の歴史を映像でたどっていく番組だが、一民間人の過去の歴史について、あそこまで係累にたどっていくのはさすがの取材力だと思う。NHKには過去の映像がふんだんにあるが、それをうまくつないで興味深い番組になっていると思う。3代前までさかのぼると、戦争体験の話となるので戦争の場面が出てくる。あの戦争でどんな目にあったのかということが、くしくも映像で伝えられ、若い人にもそれを伝えることができる。教育的な要素も持っているよい番組だと思う。
- 「大河ドラマ」について、例年今ぐらいの時期になるとまだ放送していたのかとを感じる。1年間同一のテーマで続けることが難しい時代に入ったのかとを感じる。1人の一生を描く視点から、たとえば時代や地域をテーマにして上半期と下半期で主人公が変わるといったことも、今後考えていかなければいけないような時代に入っているのかとを感じる。
- 「SWITCHインタビュー達人達(たち)」は、互いに違う専門性を持った方々が、極めていくプロセスを共有し合う番組だと理解している。10月12日(土)の「是枝裕和×姜尚中～家族のかたち 命のかたち」では、番組中の2人のキーワードは“喪失”だったと思う。姜尚中さんは26歳の息子を突然亡くし、そのことについて「心」という著書で書いており、是枝監督はあらゆる面での喪失について「そして父になる」という映画で表現している。何らかの喪失感を持った人間であれば、この番組を見たときに共感という意味でなく、すごく元気になることができると感じた。人は喪失感の中でどうあるべきかということに焦点を置いているような内容だった。喪失を経験したことがない人も、番組を見れば、人間はこんなに弱いのかということも、是枝監督の映画の表現、姜尚中さん自身の表現から感じるができるのではないかと思った。2人の仕事に対する姿勢、大人の本物の仕事の仕方のすごさを感じ、たいへん見ごたえのある感動的な内容で、1時間という時間が短く感じられるようなすばらしい番組だった。
- 11月3日(日)のころの時代～宗教・人生～アンコール「幸せの形と向き合う」(Eテレ 前2:09～3:09)はおもしろかった。日本では、おとぎ話の「わらしべ長者」のように、小さなものからどんどん大きくなって最終的にすごいものを手に入れることを幸せだと思うが、ブータンでは逆で、こんなにすばらしいものを最初に手に入れたが、最終的に全部なくなって幸せだという物事の考え方をするということがあった。今の時代の働き方、生き方、物事の判断の仕方を見ると、このような内

容の番組は若い人たちに向けて伝わるような表現方法で作るということもあると思う。

- 「日曜美術館」は子どものころからずっと見ている番組だが、過去の偉大な芸術家について取り上げることが多く、故人の業績を紹介する番組だとずっと思っていた。東京オリンピック・パラリンピックを控え、文化の厚みはとても重要になると思う。そういう意味でも、現在活躍している人を取り上げることは大切なことだと思う。生きている人を取り上げることは自分たちで自分たちの文化を支えることになり、守り育てることにつながると思う。
- 「日曜美術館」は昔から放送している番組で、NHKらしい番組だと思う。新旧、評価の定まっている人、まだ定まっていない人、洋の東西をうまく織り交ぜて取り上げていると思う。素人でも比較的入りやすく、また詳しい人でもある程度満足できる作りになっていると思う。生活の中にインターネットが入り、情報を簡単に得られるようになって、自分で取りに行く情報はわからないと取りにいけないわけで、番組でも、むしろ1回見たぐらいではわからないかもしれないが、世の中にはこんなに深い世界があるのだというものを見せてもよいかと思う。教養、文化に関連する番組の中で、その分野に詳しくない人に向けた内容や、詳しい方がより深く理解するための内容に作り分けているのだと思うが、長年続いている「日曜美術館」のような番組でも、そういう踏み込みがあって、美術に詳しくない人にも、もっと知りたいと思わせるような投げかけがあってもよいと思う。
- 最近スマートフォンのアプリで、Eテレで子ども向けに放送されている「おかあさんといっしょ」と「みいつけた！」の歌を楽しみながら遊べる「おやこでリズムあそび」が公開された。Eテレの人気キャラが歌う歌をいつでも聴かせられるという知育アプリだ。こういうチャレンジはすばらしいと思う。
- 10月20日(日)の為末大が読み解く！勝利へのセオリー「荒井直樹 前橋育英高等学校 野球部監督」では荒井監督の戦術を紹介していた。私は野球が好きなので目を凝らして見たが、高校野球では生徒の成長に先生や監督の指導力がとても重要であるということを再認識した。高校から野球を始めた子どもたちも指導し、全国優勝に導く指導力のすごさは人並みではないと思う。攻撃型のチームづくりを変え、守備力を重視したチームづくりを進め、守備でエラーした選手を怒らずに、そのエラーを次に生かすという教えをしていた。決勝戦で点を取られても3点で済んだのではないかと考える姿から、こうした気持ちの切り替え、あきらめない気持ちを持たせる指導力が陰にあったことがわかり、とてもしつかりした番組で感動した内

容だった。

- 最近、「Biz+サンデー」がおもしろい。特に11月3日(日)の放送では、地域の防災や医療などさまざまに利活用されているICT(情報通信技術)の現状を取り上げていた。将来性を感じる内容だったので、あらためて取材を進めて利活用の広がりなどを伝えてもらえればと思う。また、10月27日(日)の放送では住宅事情を取り上げていた。少子高齢化で限界集落ならぬ“限界住宅”の話に触れていたが、農村部でも、都市部でもこのような不安は強いのだろうと思う。住みよい暮らしづくりに寄与するITやソフトパワーなどについて、今後も引き続き伝えてもらいたいと思う。
- 東北楽天ゴールデンイーグルスが日本シリーズで日本一になったことはドラマだったと思う。初めての優勝、24勝した田中将大投手、被災地とのかかわりもあったため、特集番組を期待していたが放送が無かった。11月17日(日)にBS1で「東北楽天 被災地に誓った初優勝」(BS1 後0:00~1:10)の放送があったが、総合テレビでも東北楽天ゴールデンイーグルスのいろいろなドラマを取り上げた特集をやってもらいたい。仙台放送局で制作した番組を見たが、被災地とのかかわり等もありそれ自体はよかったが、さらにいろいろなドラマがあると思う。今年のスポーツ界では感動を呼ぶ最大のイベントだったと思うので、よろしく願いたい。

(NHK側)

東北楽天ゴールデンイーグルスがリーグ優勝を決めた際には、直後の10月2日(水)にNHKスペシャル「東北楽天 被災地に誓った初優勝」を放送した。日本シリーズで日本一になった際には、もう一度新たに構成する素材が少なく、「NHKスペシャル」としては見合わせた。年末の「スポーツハイライト」等で扱っていくことになると思う。

NHKスペシャル以外では、アスリートの魂「日本一への3419球 楽天 田中将大」を総合テレビとBS1で放送している。

- 特定秘密保護法案について、ニュース等での報道は見ているが、中立公平な伝え方だった。わたしはこの法案は非常に大きな問題があると考えている。NHKで態度表明する必要はないと思うが、この件について扱った番組や企画は放送しているか。こ

の問題に対しては、民放のほうが識者のコメントを入れるなどして、扱っている印象を持っている。

(NHK側)

10月23日(水)の「時論公論」で扱ったほか、11月3日(日)の「日曜討論」で各党の意見を反映している。NHKとしての表明はないが、NHKも加入している日本新聞協会が懸念を表明している。

- 特定秘密保護法案については、放送局の場合、立場を鮮明にすることは新聞社と多少違うかもしれないが、多角的にどういう課題をはらんでいるかを提示してもよいと思う。問題の大きさに比べ取り上げる時間の割き方がやや少なめという印象を持っている。
- 特定秘密保護法案は特に重要な局面になっている。NHKは巨大な報道機関なので、報道機関がこの法律とのかかわりあいにおいてどういうことになるのかは、もっと多角的に取り上げてもらいたい。扱っている番組も少なく、意識的に抑えているのかという印象を受ける。むしろそういう印象はあまりよくないと思うので、客観、公平にもっと時間をかけ、丁寧に報道してもらえればありがたい。
- 特定秘密保護法案の審議に関し、10月23日(水)の時論公論「NSC設置法案と特定秘密保護法案」で解説していた。この問題は知る権利とか、人権論の枠組みだけでは語れない部分もあり、バランスは取れている内容だったが、論点の広がりがない感じがした。これは閣法なので立法府のことに触れていないが、立法府はどう対応するのかなど、解説できると思うので、広がりを持つような論点をもう少し挙げてもらいたいと思った。
- 東京オリンピック招致のプレゼンテーションのときに、安倍首相から東京電力福島第一原発の汚染水漏れについて、「状況はコントロールされている (The situation is under control)」という発言があった。辞書を見ると成功裏に対処されつつあるという意味もあり、要するに状況を把握していると捉えられる。その誤解を広げているのは新聞もちろんあるが、NHKの放送にもあったと思う。安倍首相のその発言の数日後、9月11日(水)の「時論公論」のタイトルは「“コントロールされている”のか 原発汚染水」となっている。「“状況は”コントロールされている」から“原発汚染水は”にことばがすり替わっている。それはアンフェアとまでは言わないが、乱暴な議論だ。「時論公論」の中

でも汚染水がコントロールされているのかという疑問の投げ方、論の進め方をしており、そこはいかなものかと感じた。

(NHK側)

特定秘密保護法案については、今週も「時論公論」で扱う予定になっている。汚染水に関する「時論公論」のご指摘は、そのように感じるところもあると思うが、番組中では状況、全体としてのバランスも取りつつ、注意しながら伝えているつもりだ。今後も誤解がないように丁寧に解説していく。

- 私は「らじる★らじる」で「ラジオ深夜便」を聞きながら就寝することが多い。「ラジオ深夜便」の中で、午前4時台に「明日へのことば」のコーナーがあるが、10月15日(火)の放送では、書家の金澤泰子さんがダウン症の娘・翔子さんと一生懸命に生きてきた話や、今の自身の心境を語っていた。この放送を聞いて、頑張らなくてはいけないと勇気もらった。明日へのことばでなく、今日へのことばでないかと思うほど感動した内容だった。
- 世界の人たちから「フクシマはどうなのか」「放射能はどうなのか」と聞かれることが多い。本当によくわからないのだが、わからないということはあるえないことだと思う。「日本は大丈夫。きっと」という答えではなく、東京オリンピック・パラリンピックを迎えるにあたり、私たちも認識していかないといけないと思う。天気、花粉、紫外線の予報、地震、津波の情報のほか、PM2.5分布予測が出るのであれば、放射能の状況や風向きによる影響など、国民の生命を守るためにヒントとなるような情報と本気で立ち向かう姿勢、影響力のあるNHKがそういう姿勢を示してくれたらよいと思う。放送してほしいと思う番組に、黒澤明監督の「夢」という8話からなるオムニバス映画がある。日本だとほとんど放送されていないと思うが、原発の爆発をテーマにした話も入っている。願わくは、福島第一原発が事故を起した今、黒澤明監督の「夢」の続きをNHKに作ってほしいと思う。
- 前回、「NHKニュース おはよう日本」でニュース項目をもう少し長めに表示してほしいという話をしたが、その後改善され、わかりやすくなった。感謝する。
- 台風26号による東京都・伊豆大島の災害について、朝早い時間帯に、NHKだけでなく、民放のニュースでも大島町で3棟の家が倒壊しているという情報を伝えていた。3棟の倒壊では済まないと思われる映像が出ていたが、ニュースでは3棟の倒壊と伝えていた。おそらくその時点では地元の警察がそういう発表をしたのだ

と思う。NHKだけではないが、警察の発表をそのままストレートに報道することに疑問を感じた。

- NHKの経営委員人事についてNHKはどのように報じるのか興味をもっている。NHKは公的報道の使命を背負った重要な機関だ。その機関の長を間接的に決めることになる経営委員会人事はたいへんなニュースで、人事が決まったこととその意味づけ、位置づけについて、外部の識者にコメントをもらい、少なくとも今こういうことが決まりつつあるということについては手広く報道してもらいたい。過去の例に基づいてぎりぎりのところまで報道するという形でもよい。極めて重要な人事なので、BBCがどのように報道しているかも参考にしながら、もっと踏み込んだ報道をしてもらいたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年10月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

10月のNHK中央放送番組審議会は、10日（木）、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（25年度第2四半期・7～9月）について説明があった。続いて、E TV特集「トラウマからの解放」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、11月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長	北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委員	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
	小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（（株）ポリゴン代表取締役、メンタルトレーナー）
	谷口 肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

<経営計画における「達成状況の評価・管理」

（25年度第2四半期・7～9月）について>

- 連続テレビ小説「あまちゃん」の放送が終わり、寂しさを感じている視聴者がいる。今後、「あまちゃん」のような幅広い視聴者層からの支持を得られる番組をいかに作っていくかが大きな課題だと思う。「あまちゃん」が成功したいちばん大き

な原因は何であったと分析しているのか。

(NHK側)

1つは脚本が優れていたことがある。主人公は1人だが、実際には世代の違う3人の女性が主人公のようになっており、それが幅広い層に支持された。番組の中では1980年代や現代が舞台となっており、幅広い層が共感できるストーリーになっていた。番組で流れる音楽や、全体として東北支援という意味合いもあり、広く共感を得られたのではないかと思う。視聴率を比べると、「あまちゃん」が20.6%、「梅ちゃん先生」が20.7%で、「梅ちゃん先生」のほうが少し高かったのだが、「あまちゃん」は途中からネットや新聞、雑誌などを含めたいろいろな形で反響が広がり、社会現象のような盛り上がりを見せた点が、これまでにない展開だったと思う。

「あまちゃん」の後の「連続テレビ小説」は大阪放送局制作の「ごちそうさん」を放送開始しているが、「あまちゃん」の視聴率が高かったこともあり、現在視聴率は20%以上を維持している。視聴者の支持を得ていることもあるが、視聴習慣が継続している面もあると思う。総合テレビの朝8時とBSプレミアムの朝7時半からの視聴率はともに高いが、BSプレミアムの夜11時からの再放送の視聴率は「あまちゃん」の半分ぐらいとなっている。「あまちゃん」は、10代から30代の人にもよく見られており、家に戻って夜11時からの放送を見ていた視聴者も多かったのだと思う。「ごちそうさん」が同じような展開になるのか、もう少し様子を見たいと思う。

「あまちゃん」は今までの「連続テレビ小説」にはまったくなかったタイプのドラマだった。そのため、今まで「連続テレビ小説」になじみのなかった人たちも、おもしろいと思って番組を見てくれるようになった。一步間違えばこれまで番組を見てくれていた視聴者に背を向けられる可能性がある作り方にあえてチャレンジした。「大河ドラマ」も含め、長期間続けている枠組みは、新たなチャレンジをしていくことによって、新しいものに対する理解を得られるようになるのではないかと思う。「あまちゃん」はその点がとてもうまくいっ

た例だと考えている。

“あまロス”（あまちゃんロス症候群）になってしまったと言う声に対しては、主演の能年玲奈さんが被災地へ行き、地元の小学生と触れ合ったり、住民の人と一緒に体操をしたシーンをスポットにしてこれから放送する予定だ。また、10月19日（土）の「突撃 アッとホーム」では、「幸せサプライズ」のコーナーで三陸鉄道の社員の人たちが地元の人たちに感謝の気持ちを表すために「あまちゃん」の中で出ていたダンスを披露するのだが、その人たちをさらにサプライズさせるために能年玲奈さんが飛び入りで一緒に踊るという演出も加えている。どれだけ“あまロス”解消につながるかはわからないが、このような形で年内ぐらいまではときどき関連した番組を放送していきたいと思っている。

- 東日本大震災の場面はどのように描くのかと関心を持っていたが、結果的にとてもうまい描き方をしたと思う。
- 「あまちゃん」に関しては、脚本のほかにテーマ音楽がよかったという声も聞く。視聴率が後半に行くほど上がったのは、テーマ音楽を聴かないと朝が始まらないという人がだんだん増えてきたからという話も聞いている。
- NHKが「3か年の基本方針」を示し、数値をもってその達成状況を評価していることはよいことだと思う。ただ、この資料にはいろいろな番組の結果が総合的に入っており、視聴者がNHKに期待している番組が作られているのかを見る資料としてはわかりにくい。時間帯をいくつかに分け、放送しているジャンルの中の代表的な番組を示した方が、質問された人が理解しやすく、また視聴者がどのような番組を求めているかをつかめるのではないか。今のNHKの番組編成方針が視聴者にとって十分に好ましい組み合わせなのか、視聴者はNHKにもっとこういうところを期待していて、こういう部分は少なくてよいのではないかなど、いろいろな声があると思う。視聴者の声が編成方針にある程度反映できるような情報が取れる調査であってほしい。
- 5年ほど日本を離れていて帰国し、総合テレビのニュースを見て感じたのだが、世界で何が起きているのかがわからない。短いニュースとしては報道されているが、全体の流れとして世の中、世界がどこを向いているのかが伝わってこない。海

外で何が起きているのかが、特別番組ではなく通常のニュース番組でももう少しわかるような報道をしてほしい。外から見ると、日本のメディアだけでなく、日本人が内向きのことばかりを見ているような気がして不安感を抱く。確かに視聴者の期待値はあると思うが、必ずしも視聴者の望むものだけが必要な番組、質の向上ではない。NHKの役割を考えると、国民が何に目を向ける必要があるのかという視点も必要ではないかと感じた。

- 日本人が、世界の動きを先取りしどのように積極的に動いているか、逆に世界の動きが先行しているときに十分に対応しているのか、ということを考えさせるような放送内容になっているかどうかということだと思う。われわれは世界に対し十分に情報発信しているのかという点は、国際放送のことになるのかもしれないが、国内放送番組審議会と国際放送番組審議会が別々にあり、両方のコミュニケーションが欠けているという感じをずっと持っている。根本的な問題であるが、今後の課題として受け止めてもらえればと思う。

(NHK側)

われわれの中でも国際案件を増やすべきでないかという議論をずっと続けている。状況に応じて国際案件を増やしているが、一方でもっと国内案件を扱ってほしいという意見もあり、日々悩みながらバランスを取るようにしている。その中で、BS1では、月曜日から土曜日の朝7時から「ワールドWave モーニング」と、月曜日から金曜日の夜10時から「ワールドWave トゥナイト」を放送していて、1時間程度国際案件を日本語で放送している。「クローズアップ現代」や「NHKスペシャル」でもかなりの本数の国際案件を特集として扱っている。国際放送は日本の情報を発信するために、毎正時に英語でのニュースの「NEWSLINE」を30分放送している。

- 今回の四半期業務報告では、質的に見て水準の高い部分は、今回も高いレベルが維持され評価されている。今回は変化のあった部分を中心に説明があったが、高い評価が維持されている部分も結構多い。この点も念頭に置きながら、次回につなげていただきたいと思う。

< E T V 特集「トラウマからの解放」(Eテレ 9月14日(土)放送)について >

- この番組を見て精神医療の進歩に感銘を受けた。私はトラウマを持つほどの過酷なことに遭ったことはなく、読書や音楽鑑賞、先輩や先生から話を聞いて自分を慰め、克服してきたと思うのだが、番組で紹介されたようなシビアなトラウマに対しては、精神医療が必要だ。EMDR（眼球運動による脱感作と再処理法）というのは Eye Movement Desensitization and Reprocessing のことで、目の前でライトを動かしたり、医者が手を動かしたりと、催眠術を行っているような印象を受けた。よい形で使うのならいいのだが、悪事に利用する人がでてくると怖いと感じた。難解な英単語なので、EMDR という頭文字の略語だけではなく、最初に出てくるときだけでも画面に文字を出してほしい。目を動かすことが治療につながっていることは英語を見ないとわからない。
- 本放送を見て印象深かったので、その後の再放送も何度か見た。最後の治療法の場面がとてもシンプルな方法だったので、これで治るのか、なぜそうなるのかと疑問に思った。EMDR の考案者であるアメリカの心理学者のコメントや、脳の状態の説明もあったが、なぜそうなるのかという疑問は残った。それを説明することは番組の主眼ではないし、ひと言で説明できないこともあると思うが、もう少し解説があれば腹に落ちたと思う。また、見かけには単純な治療法でも、そこには専門的な過程があると思う。「これは医療行為です」というテロップが出たが、もっと目立つように出したほうがよかったと感じた。

(NHK側)

EMDR をどこまで説明するかは悩んだポイントだ。どのようなメカニズムのもと、あの手法でトラウマが治るのかはまだ十分に解明されていない。寝ているときのレム睡眠時に、目は左右に自発的に動いているのだが、その際にも脳の記憶は処理されている。海馬を通して記憶が漠然としたものから言語化され、人間の記憶になるという作業がなされているようだ。それと同じようなことを脳の中で引き起こし、漠然とした、混とんとした状態にあるトラウマのような記憶が整理されていくのではないかとされている。脳のことはまだ解明されていないので、不確定な情報は出せないということで番組上では詳しく扱わなかったが、その点がどうしても疑問に残るところだとわかったので、次回に放送することがあれば考え直したいと思う。

- すばらしい番組だった。私にも小さい子どもがいるので、番組に出ていた3歳の娘を殺されてしまった熊本の父親の治療の様子は、自身に重ね合わせてしまい、涙なしには見られなかった。トラウマをいやす手法があったことを、子育て支援、子どもの権利を守る仕事をしていて知らなかったのも、とても勉強になった。実際に児童養護施設等で虐待を受けた子どもたちのヒアリング等をする中で、犯罪率、家庭の生活保護率がほかの子どもたちより顕著に高いというデータが出ている。それは番組にあったようなトラウマが意識機能に大きく影響してしまっているのではないか、逆に言えば児童養護施設等でしっかりとトラウマのケアをできる体制が日本全体で整えられれば大きな成果になり、施設等を出た後に人生を踏み外すような子どもたちを助けられるのではないかという希望も感じた。そして実際にそういうことを導入できるよう提言したいと思った。番組の中でEMDRを活用した治療に関しては医療保険の対象外であるということだった。通常精神科医のカウンセリングであれば診療報酬の対象になると思うが、この治療はなぜ対象ではないのか。対象にする動きが学会、厚生労働省の審議会などであるのか。それによって普及率が変わるし、トラウマのケアが社会的に進んでいくかどうかの分水嶺になると思う。そういう点に尽力したいという思いもあるので教えてほしい。

(NHK側)

精神科医が行うEMDRは保険の対象内となっているが、今の保険診療報酬の体系だと5分ほどで患者の診察をしないと病院経営の観点から見ると厳しいのが現実。実際にEMDRをするとなると最低でも1時間ぐらいのセッションが必要となるので、保険適用で医者が行ってくれるケースはきわめて少ないのが現状だ。保険が効かないことを覚悟して、臨床心理士のクリニックに通う、あるいは精神科医の治療や投薬を受けながら、平行して臨床心理士にEMDRを受けるという場合もあり、保険を使って治療している人は少ない。カウンセリング治療を保険適用にすることについては、これまでもさまざまな努力が積み重ねられている。もともと精神科医のカウンセリングは保険の対象で、特にEMDRのような方法は時間がかかるので、診察時間と診療報酬の関係を是正するため、平成22年に30分以上かけたカウンセリングの診療報酬を上げることが行われていたが、実際にEMDRを使って治療をしているのは臨床心理士が大多数となっている。臨床心理士のカウンセリングを保険の対象にするか、臨床心理士の資格を国家資格にするのかについて、当事者、利害関係

者の長い議論があり、決着がつかず今に至っている。子どもを守る、子どもをトラウマから解放する治療を日本で行うには、絶対に突破しなければならない大きな壁となっている。

- 臨床心理士は国家試験のある資格か。

(NHK側)

臨床心理士は学会がつくった財団法人が資格を認定している。心理学の大学院を出ている人や、臨床経験がある医師などが試験を受けているが、国家資格ではない。この資格に健康保険を使ってよいのかも含め、大きな議論になっている。

- トラウマに対する新しい治療法の現場取材した番組で、とても興味深い内容だった。EMDRの例は2件とも成功した例を挙げていたが、この治療法で本当にすべてが解決するのかがわからなかった。あまりにもうまくいったケースを紹介していたので、期待値としてこれを受ければすべて治るのでないかというような雰囲気伝わってきた。EMDRは不確定な部分が多いとのことなので、もっと深い掘り下げがあったほうがよかったのではないかと思う。
- 興味深い内容だったが、少し物足りなさも感じた。いくつかの手法のうちの1つということだったが、現状がどの辺りまで進んでいるのかについて客観的な説明が欲しかった。臨床心理士の治療に行き着くまでのさまざまなケアにはどのような問題があるのか。例えば子どもであればスクールカウンセラーもあるが、そのような社会的な仕組みはどうなっているのか、もう少し踏み込めたらと感じた。Eテレの番組なので治療のメカニズムに焦点を絞ったほうがよいのかもしれないが、社会的に問題を発見し解決する上での課題提起について、もっと深く掘り下げたほうが番組として深みがあったという印象を持った。
- 心の底深くに傷を抱えた人は、実際の大きな事件や、小説、ドラマの主人公にもなっていて、その人たちは克服するために七転八倒したり、波乱万丈の物語を展開したりする。それが目を左右に動かしながら話すだけでよかったとなると、これまで見ていたものはいったい何だったのだろうかと思いきやと驚きとともに番組を見た。本当にそれだけで済むのかすっきりと腹に落ちなかった部分もある。家庭の不安定化や核家族化、雇用の非正規化による経済的な問題、グローバル化の問題など、さまざまな問題から日本でもトラウマを抱えている子どもが増えているということが番組を作った動機としてあったようなので、番組自体はおもしろかったが、これらの問

題の面からの番組づくりにも期待したい。

- EMDR自体はもともと認知行動療法のアプローチであり、日本でもようやくわかりやすく説明する番組が必要になってきたということは、それを専門とする人間としてはありがたく感じた。わたし自身はEMDRの資格を持っていないが、実際にオリンピック選手やトップクラスの競技者だと自分でEMDRの状態を作ってしまう。左のほうで過去の自分のストレスを想像し、右になったときに新たな自分をつくり直すということも、平成2年ごろにEMDRがEMDと言われていたころから行っている。トップクラスの競技者が実践していたので、なぜそうなるのかというところから研究が進み、トラウマを抱えている人にもその動作を装置などを使って行わせることで応用したものがEMDRだ。最先端の事例だと思いテレビで初めて見た人もいるだろうし、ここから興味を持つ人や、あるいは疑問に思う人々が出てくればよいと思う。トラウマを抱えている人は多いので、社会の理解が必要だということだけでなく、誰にでもありうるという視点が必要だ。重要なポイントは、目の前の事実や過去の事実がストレスになっているのではなく、とらえ方によって悪いストレスにさせている人もいれば、同じ事実でもよいストレスとしてやる気に変えている人もいる点である。その点に踏み込んでいけば、メンタルが弱い人、強い人の区別はないというアピールができると思う。アメリカはもう一歩進んでおり、アメリカの心理学会ではトラウマやうつ病の治療をやめようと言っている。うつ、トラウマの治療は継続しないといけないのだが、もう1つ大事なこととして、人にとって何が幸せか、成功とは何かという“ポジティブサイコロジー”を科学的にアプローチしようとしていることがある。トラウマ治療や認知行動療法から進んで、そこまで論点を持っていけると、より広がりがあり、多くの人のためになると思った。
- 治療には時間もかかるし、臨床心理士による治療の場合は保険が効かないということで、治療費についてもおおよその雰囲気わかるような材料があればよかった。トラウマ療法としてずっと続いているものもあるわけで、EMDRは全体の中の1つの流れだ。トラウマ療法全体がどうなっているのかということもある程度輪郭が見えればよかったと思う。アメリカは進んでおり、子どものうちに治すというところが日本とは相当違う。本来そのほうがよいわけで、それを阻む日本国内の行政的、政治的な問題があるのであればそこに焦点を当ててもよかったのではないかと思った。これだけ具体的な事例について、プライバシーの問題もある中で、よくぞ踏み込んだという印象も受けた。
- 子どものころのトラウマによって10人に1人は体に不調が出る可能性がある

とのことで、幅広い問題であり、よく取材し、丁寧に説明していたと思う。まったく知らないテーマだったが、問題提起としてよい番組だったと思う。次に作るときはEテレではなく、総合テレビで放送して、もっと多くの人に見てほしい内容だった。番組の終わりで、治療を安心して受けられる社会をつくることが求められているとコメントされていたが、いちばん大事なところは文章にしてでも印象に残るようにしたほうがよい。これから何か新しいことをしなければいけないという問題提起になるのではないかと思う。

(NHK側)

社会的にこの問題をどういう文脈でとらえるか、この治療をどのように日本で広めていくのか、子どもをどうやって助けていくのか、そこが最も重要な点だと思っている。EMDRが物珍しく怪しい感じがして、今までテレビで紹介することをためらっていたが、今年にはDSM-5（精神障害の診断と統計の手引き）というアメリカの治療マニュアルがトラウマを重視する方向に改定され、WHO（世界保健機関）がEMDRを初めて認めたこともあり、放送した。これから次に展開していきたいと思う。

- 知らせるということに関しては、番組として目的を果たしたと思う。番組を見てこれで本当に治るのかと思っている人に、自分でもいろいろ調べてみようという刺激を与えたよい番組だった。目を動かす治療法の中で、右と左のひざをたたく治療があった。目を動かすこととひざをたたくことについて解説がなかったのですがどのような関連があるのか、また、どこまでこの方法が効くのかと疑問を持った。

(NHK側)

番組に出てきたフランシーン・シャピロ先生が発見したときは眼球運動だったが、目の見えない人はどのように治療をするのかという研究の中で、視覚だけでなく、触覚でもよいことがわかってきた。ひざを軽くたたいたり、バイブレーターを握ったりすることで左右の手に交互に刺激を送る治療法もあり、医療現場でよく使われている。ボストンマラソンの爆発事件や東日本大震災の津波のようにトラウマを背負う人がたくさん出てくる事案がある。そのような時にはEMDRの専門家が現場に駆けつけるが、そのときに使うのが“バタフライハグ”という方法だ。こうした現場でトラウマを背負う

人が現れるのを回避できたという実績もある。左右の刺激であれば何でもよく、音も左右交互に出す。番組内ではヘッドフォンをして目を動かしていたが、あれは音が左右に出ている、目も動かしている。

- 解離という現象を生々しくテレビで見たことにいちばん驚いた。こういうことはあるのだろうとは思っていたが、生々しく人間の心の奥底をカメラが映し出しているのを見たのは初めてだったので、とてもショックを受けた。EMDRという治療法ももちろん大事なのだが、人間の心の問題、脳の関係、さまざまな経験がどのように人間を形づくっているのか、もう少し掘り下げてほしかった。人類の抱えている共通の問題だと思った。

(NHK側)

今回の番組で伝えきれなかったことが明確になったので、次につなげていきたい。この問題は社会全体を救う可能性があると思っている。たとえば芸能人が自殺する、ドラッグの使用が止まらないというケースでは単に表層だけが報じられるが、そこには必ず子ども時代があり、本人がどうしようもできなかった過去がある。そこを救わなければならず、そういう人たちを救う視点を日本社会が持たなければ自殺も減らないし、違法な薬の使用もなくならないと思う。子どもたちを救うということもあるが、社会の問題行動の背後にあるトラウマからいかに人を救うかは社会全体を大きく変える可能性があると思う。

どのぐらいの効果があるのかという点に関しては、担当者によると、学会としてはそういう集計をしていないので答えられないということだが、取材をした医師の場合では、相談に来た方でトラウマを抱えていると判明した人にはほとんど効果があるということだ。もともとトラウマが原因ではなく、統合失調症などで悩んでいる人の場合は違うということだが、トラウマと判明した場合はかなり高い割合で効果があると聞いている。

<放送番組一般について>

- 9月21日(土)、22日(日)のNHKスペシャル「神の数式」(総合 後 9:00～9:58)は、物理の知識が無い人にとっては話が難しく、十分に理解できなかったのではないかと感じた。総合テレビで放送するには一般的に難しすぎたのではないかと感じた。

(NHK側)

「神の数式」は「NHKスペシャル」で放送するかどうか、ぎりぎりのテーマだと思っていた。過去に数学の難問を「NHKスペシャル」で2回放送している。「ポアンカレ予想」と「リーマン予想」についてだったが、難問に挑む数学者たちの人生をドラマとして、難問そのものにも触れながら放送したところ、「わかったとは言えないがおもしろかった」という意見をたくさんもらった。その延長線上で、数学からさらに難しい物理の世界に挑戦した。昨年ヒッグス粒子の発見という大きなニュースがあり、さまざまなニュースや番組で伝えたが、本質的に意味するところがあまり伝わっていないのではないかとということもあり、そこに至る物理学者たちの100年近くにわたる葛藤を描くことは番組になるのではないかと考え、2回のシリーズで放送した。まったくわからなかった、難しかったという意見もたくさんもらったが、さすがという意見もあった。専門的で高度な内容だと思っても、これまでの経験から、視聴者の知りたいという気持ち、期待はあるのではないかと思っている。結果としてわからなかった、難しかったという意見があり、期待に届いていないことも認識している。より視聴者に納得してもらえる内容にしていくよう努力をしていく必要があると考えている。

- NHKスペシャル「神の数式」を、興味を持って見た。前出の数学の番組も、超天才数学者の話であり、数学者が行方不明になるなど、それ自体が人生ドラマとしてとてもおもしろい内容だった。今回の番組はそれとは違い、数式そのものに挑んでいて、数式自体が1つの人類の作った知の塊で、そこには人々の汗と涙が全部こもっている。人類の作り上げた知的財産として最も美しいもののひとつだ。制作者が物理の素養をどれだけ持っていたのかはわからないが、この難しいテーマに真正面から挑んだチャレンジ精神を高く評価する。よくわからない部分もあるが、研究者による知の営みに人々に関心があり、知的好奇心の向上という点では大きな意義

があったと思う。

- 10月6日(日)のNHKスペシャル「中国激動 “さまよえる” 人民のこころ」は、重慶での農民移住を描いていて、おもしろかった。農村の住民を都市の住民にするなど、中国社会の激動はよく語られているし、頭ではわかっているが、実際の農民の暮らしを見ることで、何となく無理やりに、アメとムチのように移住させられるのはどういうことなのか、リアルに伝わる感じが優れたドキュメントだった。

- 「NHKスペシャル」についてはいつも好意的な評価が多いのだが、10月5日(土)の「ドキュメント消費増税 安倍政権 2か月の攻防」は、なぜこのタイミングで急いで番組を作ったのか疑問に思った。消費増税導入は決まっている話で、組織を割るとか、政治生命を賭すようなものではない論点であるにもかかわらず、追いかける感じが表面的な感じがした。通常の「NHKスペシャル」ならば3か月、半年おいて、財務省を含め、報じられたことの舞台裏を取り上げる。今回の番組では、カメラが入って潜入ルポの形になっているが、認められた範囲の潜入であり、政権側から招き入れられた範囲ともとれる。カメラに向かって堂々と話すわけだが、政府の広報番組になる危険性があると感じた。ここまで食い込む取材力があるので、もっと違う角度で取り上げることが可能だったのでないかという印象を持った。

(NHK側)

NHKスペシャル「ドキュメント消費増税 安倍政権 2か月の攻防」は、消費税導入が決まった直後の放送だった。制作の意図としては、国民の関心が高く国民生活に直接的な影響のある消費税率引き上げがどのような過程で決まったのか、それに伴う経済政策についてもいろいろな考え方がある中で、どのように決まったのかということ視聴者の関心の高いときに伝えたいということでこのタイミングになった。重要な政策が今の政権の中でどのような手順で、どういう人たちの中で決まるのかを日ごろ取材している政治部の記者が小型カメラを持ち込む形で本音に迫りたいという意図だった。

- 10月7日(月)のNHKスペシャル「原発テロ～日本が直面する新たなリスク～」(総合 後9:00～9:49)で扱ったテーマは大事なことだと思った。東京電力福島第一原発事故の後、原発は電源を断つだけでよいとテロリストが残念ながら学んでしまったということは、とても重要なことで、もっと注目されなければいけないの

だが、日本のメディアでもそれほど伝えられていないので、こういうことに注目することはよいと思う。単にテロというだけではなく、核物質の盗難は東欧などでよく起きていたことで、新聞も記事にはするがほとんど注目されず見過ごされていた。アメリカの核物質の保管施設・Y-12に高度な警備体制があるにもかかわらず、いとも簡単に老人3人が侵入するという衝撃的な事実もあり興味深かった。核関連のテロや核物質の盗難は深刻であり、単に警備が行き届いているかどうかというだけではなく、平和利用の原則と原子力そのものとの相克から始まって、国家そのものの弱体化、崩壊を意味する。警備をどうするかという程度の話では済まない深刻な問題だ。警備に200人動員されているとか、サブマシンガンを所持しているとか、線量に気をつけないといけないという話が出ていたが、実際的な対策の課題であることには違いなく、重要な問題ではあるものの、ここでの問いに対する答えとしては次元が違う感じがして、やや消化不良な感じがした。原発テロや原発の持つリスク、犯罪の持つリスクは何なのかということをもっと前面に出したほうが有益だったと思う。

- 9月1日(日)のいつか来る日のために「証言記録スペシャル リーダーの決断」(総合 後3:05~3:54)は、東日本大震災におけるさまざまな場面で、いろいろな人がそれぞれのリーダーシップを発揮したことで、物事をまとめたり、助かったりしたことを掘り下げ、伝えていた。そういう観点はこれからも役に立つし、大事な視点だと思った。
- 9月29日(日)の小さな旅「雨降りの山で~神奈川県大山~」は、神奈川県の中にある大山を紹介していた。日本人が水を頼りにして、大切にしてきたことが伝わる素晴らしい番組だった。現在も驚くほど遠くから信心深い人が大山講で訪れるということはよく耳にしているが、農家だけではなく、さまざまな職種の人が講に加わっているのを紹介していた。水を大事にするということは日本全体に共通しているのかもしれないが、大山に詣でて地元で雨を降らすことを請うことの信心深さがよく表現されている番組だと思った。
- 10月8日(火)の「首都圏ネットワーク」では、子どもが熱を出したり、風邪をひいたりしたときに保育園に代わって預かる病児保育の特集をしていた。保育の世界では目立たない領域なので、取り上げてもらったことはよかった。丁寧に取材をしていたが、番組の趣旨としては、病児保育への補助金が少なく、赤字経営になり施設が増えていかないという流れだった。10年前からこういう報道はされているが、補助金は上がっていない。病児保育の施設がたとえば今の2倍に増えたとしても、定員数としてはたかが1万人になるにすぎず、ニーズからかけ離れている。そ

もそも小児科医しか病児保育の施設が造れないという机上の空論に基づいて作った制度そのものを批判し、あるべき社会インフラはどのようなものか考えさせる報道でなければ社会を前に進めることは難しいのではないかと思う。補助金が少なく、困っている病児保育の施設があるが、たとえ上げたとしても病児施設は増えず、多少増えたとしてもニーズに応じるだけの社会インフラはできない。そもそも今の仕組みは正しいのかというところに思考を一步進め、報道することがジャーナリズムの信義にかなうのではないかと思う。

(NHK側)

この問題に関し、問題は根深く、制度上の問題があるとの指摘があったので、今後そういう観点から取り上げられないか検討したいと思う。

- 連続テレビ小説「あまちゃん」をずっと見ていたので、引き続き「あさいち」も見ていた。好感のもてる番組であるが、番組が始まった当初から、どこかネットのようだと感じるどころがあり、それはなぜかと番組を見ながら考えていた。視聴者が番組内での些細な言い間違いや気に入らない態度についてEメールやファクスで投稿し、投稿されたものを番組内でアナウンサーが読んで謝るが、視聴者が番組に参加するというのはいかようなことなのかと疑問に思っている。ささいな過ちをわざわざアナウンサーが生放送で時間を取って謝る必要があるのか、だれが気持ちよいのだろうかと思う。ささいなことは視聴者の声として電話で受け取るぐらいの対応のほうが朝の時間を気持ちよく過ごせると思う。「あまちゃん」がうまくいった1つの要因に、テンションを上げるテーマ音楽や、朝から気持ちよくすてきな1日を過ごそうという気持ちにしてくれるという部分があるように、朝の番組はそういうところが必要ではないかと思う。

(NHK側)

確かにささいな指摘もあるが、どれを取り上げるかについては、制作現場の責任者が必要だと判断したものについて対応するようにしている。その基準がささいなほうに偏っているのであれば、議論しようと思う。

- NHKプレマップで「エコチャンネル」を取り上げていた。小学校の屋上での菜園にエコチャンネルを活用し、実践している子どもたちの事例や、どのような授業でエコチャンネルを生かせるのかという教育活用ガイドも紹介されていた。全国の先生に役立ててもらえるような内容を紹介していたのはよかったと思う。

- 「NHKニュース おはよう日本」は、冒頭でその日のニュースのラインアップを7つほど画面に出しているが、時間が短くて全てを追い切れない。興味のあるニュースはしっかりと見たいので、途中でどのニュースまで伝えたかわかるように、ラインアップの出し方をもう少し工夫してほしい。ニュース番組の作り手は、昼も夜も同じように放送を出していると思うが、朝のニュース番組の決定的な違いは、視聴者が朝の支度をしながら見ていることだ。朝はずっとテレビの画面を見ているとは限らないので、その点を考慮してほしい。
- 「NHKニュース おはよう日本」は朝6時半からニュース項目を出している。何回か出てくるので、制作側としては時間をあまり長く取らないようにと考えているかもしれないが、確かに、朝の忙しい中で番組全部を見ている人は少ないので、伝えた項目は色を変えるとか、この項目は何時ごろに伝えるという工夫ができないか検討していきたい。ニュース項目を出していながら消化不良になるのは逆効果だと思うので、そのような工夫も考えていきたい。
- 9月16日(月・祝)～19日(木)の名作選ハイビジョン特集「アフリカ縦断114日の旅」(BSプレミアム 16日(月・祝)前9:00～11:05、17日(火)前9:00～11:00、18日(水)前9:00～11:05、19日(木)前9:00～11:00)は、映像でなければ表現できないもので見ごたえのある番組だった。平成20年の番組なので5年がたっている。40人ぐらいの旅人の中の日本人3人を中心に描いていて、とてもよかった。過去の映像を流すだけでなく、5年後に旅人たちが今どうなっているのかについて、フォローする映像があればよりよかったと思う。
- 9月29日(日)の「ザ・ベストテレビ2013 第1部」(BSプレミアム 後0:30～4:50)は、民放、NHKの選り抜かれたドキュメンタリーを3本紹介していた。ドキュメンタリーの力をあらためて実感した。地方の放送局や、小さな民放局が制作したよい番組はなかなか見る機会がないので、公共放送であるNHKが独自の基準で選び、どこかで定期的に見せてくれる場があるとテレビの価値が上がるのではないかと感じた。
- 9月26日(木)に新潟県知事が柏崎刈羽原発について安全申請を条件付きで承認するというニュースがあった。知事には実際に承認できるという法的な権限はないということを伝えるべきではないかと思う。フィルターベントの運用によっては承認を取り消すということまで言っているが、安全協定を盾に取って知事が出てきているものの、原発の手続きは国が責任を持って行うことで、実際には法的拘束力がない安全協定に基づいての発言だという指摘があってもよかったのではないかと

思った。

(NHK側)

原発については、安全審査の手順が法律でしっかり決まっ
ていて国が責任を持つこととなっている。一方、原発事故の
後、地元の感情としてどう受け入れるのか、再稼働をどうす
るのかということについて、地元自治体、地元住民の気持ち
がかなり大きな要素になっていることも事実だ。そうしたこ
とも勘案しつつ、同時に正式な手順はこういうものだという
ことも併せて伝えるようにしたいと思う。

- リニア中央新幹線最終案の発表については、民間企業が行っていることであり、科学の進展から見るとプラスのニュースと受け止めてよいと思うが、果たしてこんなに速いものが、しかも14年先の時代に必要なのか、地震列島にトンネルばかり走っている交通機関が本当に安全なのかと感じる。NHKの報道をすべて見たわけでないが、少し立ち止まって本当に必要なのか考えてみようという見地からのものがなかった印象を受けた。東海道新幹線は、十河信二国鉄総裁の英断で造った。当時8、9時間かかっていた東京～大阪を3時間にしたが、当時もそこまでする必要があるのかという反発がある中で決断された。今では当たり前のこととなっているが、そういう側面も新しいものができるときには背景として報道してもらえると全体像がわかるようになる。今回はよい面ばかりを報じたものが多かったのではないかと
いう印象がある。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年9月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

9月のNHK中央放送番組審議会は、9日(月)、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成25年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成26年度の番組改定と合わせて意見の交換を行った。

続いて、ハイブリッドキャスト（放送・通信連携サービス）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長	北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委員	秋池 玲子（ボストン コンサルティング グループ パートナー&マネージング・ディレクター）
	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	谷口 肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

<平成25年度後半期の国内放送番組の編成について>

- 各波の特徴、その波でしかできないものをより鮮明にしたほうがよいと思う。BS1の新番組「エキサイト・アジア」（月曜・午後5時）は、この時間帯にアジア駐在のビジネスマンの活躍の話が出てくるのは流れとして評価が難しい。時間帯との関連や波の特徴をどう意識したのか、どのような議論があったのかを教えてほしい

い。

(NHK側)

BS1の夕方5時台のラインアップについては、在宅している主婦層をメインターゲットにアジアの今、国際情報をわかりやすく伝えられないかという考えでいる。ほかの波、時間帯にも言えることだが、正確に視聴者層を捉えきれていないという問題意識がある。BSプレミアムの午後11時台も帰宅したOL層をターゲットにして番組をラインアップしているが、視聴者の嗜好（しこう）が多様化し、その層を捉えきれていない。BS1の夕方5時台は視聴者層の幅を少し広げ、アジアの今や多様な文化を伝える番組を意識して放送してきた。その中で月曜日については、日本人駐在員の日々からアジアの今を見つめるというねらいで、新番組の「エキサイト・アジア」を編成することにした。

<平成26年度の番組改定について>

- コンセプトが似た番組を各波にあてがうのではなく、ほかの波ではできないようなチャレンジや遊び、別のメディアとのコラボレーションなど、波の特徴を意識した新しい番組作りを計画段階から検討してほしい。
- 文化、美術に関する番組をこれまで以上に作ってもらいたい。海外に行くと、そこに生きる人々はこれからの時代を背負っていくと意気揚々としているのに、つまらなく感じてしまう国もある。そこに文化がないからではないか。文化の蓄積がないことはこんなにも人を退屈にさせるのかと思っている。美術の番組については、亡くなった人をテーマにした特集や、生きている人であれば、大家のアートを取り上げることが多い。昭和懐古でなく、時代、未来をしっかり見据え、これからの人も取り上げてもらいたい。まだだれも見ることがないようなことに取り組んでいる人もたくさんいるので、いろいろな制約を越えて取り上げてほしいと思う。
- 食糧自給率の低下、農業従事者の高齢化が進んでいる中で、「うまいッ！」のような、食を支える人々や地域を応援し、一次産業の価値を発信する番組を、さらに接触しやすい時間帯で放送し、新たな視聴者の間口を広げてもらいたい。

<ハイブリッドキャスト（放送・通信連携サービス）について>

- 受信料は新たに必要となるのか。

（NHK側）

このサービスの開始により新たにいただくということは考えていない。

- このようなニーズを新たに作るということか、それとも潜在的にニーズがあるということなのか。データ放送で天気予報やスポーツの結果を見ることはあるが、データ放送以上のニーズがあるのか。

（NHK側）

データ放送では電波の帯域に制限があるため、24時間いつでも見ることができるコンテンツに関しては限界がある。気象情報についても多くの情報を提供したいと考えているが、十全にはできない。例えば、河川の水位情報などは、帯域の限界がありすべてのデータを伝えることができない。ハイブリッドキャストでは、通信と連携することで、より豊富なコンテンツを提供できるようになる。また、双方向番組におけるハイブリッドキャストの可能性は大きいと思っている。例えば、クイズ番組などで視聴者が解答する際に活用するケースや、紀行番組で欲しい情報が簡単に手に入るケースが考えられる。今までと比べものにならない自由さで、スマートフォンやタブレットにまで関連情報を提供できるようになる。テレビが変わったと思ってもらえるサービスが提供できると考えている。

- テレビから離れてインターネットに行く人を引き止めたいということもあるのか。

（NHK側）

ハイブリッドキャストの最大の特徴は、電波の中に、インターネット経由で指定した情報を取得できるように制御する信号が組み込まれていることだ。インターネット単独でテレビやホームページを楽しむことも可能だが、通信を使って、放送局が意図したタイミングで番組がもっとおもしろくなる

ような情報を提供できるようになる。

- オールジャパンでの取り組みとのことだが、日本だけの仕様で、他の国と違ってしまうのではないかと心配だ。また、新しいテレビの機種を買わないといけないうのは考えものだと思う。日本国内向けにメーカーが作った機械は海外では売れないと思うので、もっと国際的な観点も必要だと思う。

(NHK側)

テレビをつけて、そのまま見て聞いて楽しむという楽しみ方から、手元のスマートフォンやパソコンを見ながらテレビを見るというスタイルは、若者を中心に広がってきている。新しい視聴スタイルが当たり前になっている方々に、テレビを見ている合間に別の情報をチェックしたいというニーズがある。これに対して準備をしないといけないう。テレビが半歩新しいものによっていく契機になるのではないかという意気込みで現場は取り組んでいる。

- これだけの技術が進んでいるのは日本だけだと思う。災害のときにテレビを見れば、地域別の情報など本当に必要な情報が得られるのか。2020年には相当普及していると思うが、オリンピックを見るときに多角的な楽しみ方があるのか。

(NHK側)

防災、安心、安全はハイブリッドキャストにおいてもいちばん大事なことで、気象コンテンツも優先的に入れている。先般あった大雨や竜巻などの警報は、ホーム画面に優先的に出るようにセットしている。通信のよいところはきめ細かく、それぞれの住まいの場所に即した情報が出せることだ。たとえば避難情報が出れば該当の地域向けに発信するなど、カスタマイズ、パーソナライズできるといった点がこれまでのテレビと違った特徴だ。オリンピックに関してはこれからになる。

スポーツについてはいろいろな制約があって実用化は先になるのではないか。たとえばサッカーの試合でボールを追うカメラと全体を見下ろすカメラを、一方は通信系で放送し、両方の画面を選択できるという楽しみ方も将来的には考えら

れる。ハイブリッドキャストは、広い意味でいうとインターネットテレビだ。各国で開発競争が進んでいて、BBCはスマートテレビと名付けているが、テレビの国際的な見本市に行くといろいろな試作品が競合している。国際競争で勝ち抜けないと携帯業界と同じように特定の企業に席けんされてしまう。NHKとしてはこれを世界に広めたい、国際競争力の強化という意味でも重要と考えている。

- ハイブリッドキャストはすごくよいと思う。ようやくこういうものを始めてくれたとたいへん期待している。毎週同じ時間にテレビの前において、それを見るというコンテンツの需要の形式がライフスタイルにまったく合っていないため、今の若い世代はテレビを見なくなった。スマートフォンやタブレット端末で見たいときに見るのがコンテンツであり、テレビの前にはいなければ見られないというのは厳しいと思う。それがインターネットによって、スマートフォンやタブレット端末で好きなときに見られるとか、テレビであっても、例えばサッカー日本代表を応援しようというときに、1人で中継を見るのではなく、みんなとつながり合って応援し、その瞬間をともに喜ぶという、その時にしか得られないコンテンツの楽しみ方ができるようになる。参加するおもしろさという需要の仕方によって変わってきている。これまではブロードキャストで、放送局が一方的に発信していたが、そうではなく、コンテンツを題材にみんなで参加して楽しむことにより、この時間で見ることの意味合いが生まれる時代になると思う。すばらしい挑戦なので、さらによくするために技術的なことを聞くが、NHKはサードパーティ（第三者）が付加的なサービスを作れるようにAPI（アプリケーションプログラミングインターフェース）を公開しているのか。

（NHK側）

ハイブリッドキャストという技術仕様は、サードパーティにも公開され、IPTVフォーラムに技術仕様を出して承認を受け、共通なものとしており、認定をした業者であれば自由に参入できることをベースにしている。

- こういうもので、NHKだけでやろうとしても、おもしろいものはなかなか作りづらいと思う。勝手にだれかが作って見たらおもしろかった、というようなものが次々と出てくるような土壌を作れるかどうか、主導権を握れるかどうかの分水嶺になると思う。NHKがこうした環境を意識的に作り出す戦略はあるのか。

(NHK側)

現在のデータ放送の場合はサードパーティが自由に入れる環境になかったが、ハイブリッドキャストはインターネットの世界なので、サードパーティが自由に参入することを最初から想定しており、インターネットで培った新しいビジネスモデルの上に乗っていることは確かだ。NHKがハイブリッドキャストのコンテンツを作るうえで、サードパーティにどう協力してもらうかについては、まだそのノウハウができていないため、まずは自らで作ろうとしている。民放など多数のプレーヤーが入ってくるので、自由に参入できる土俵であることは間違いない。民放も含めいろいろな組み合わせの試みが出てくるかもしれない。

- 携帯の世界で何を戦っているかといえば、どれだけサードパーティを引きつけ、魅力的なアプリを載せられるかということだ。端末の製造元が直接作るのではなく、APIが公開されれば、いろいろな人が参加する。そのためのマーケティングであり、参加すればメリットがあるという形で巻き込む戦略が必要だ。勝手に参加してくれるのを待とうという受け身だと参加者は出てこない。このようなノウハウは、インターネットの十数年間である種の勝ちパターンがある程度蓄積されているので、ネット業界から人を確保するなど民放に先駆けて環境を作るぐらい積極的に取り組まなければ国際競争力の強化という話にはできないと思う。

(NHK側)

そこがいちばん難しいところだ。民放がインターネットテレビに消極的なのはテレビ局がグリップを握れなくなるのではないかという不安感があるからだと思う。同様にNHKとしても放送内容、通信で送る情報には責任をもって対応しないといけない。提供した情報はすべてNHKが責任をもつ形になる一方で、インターネット世界の新しい、自由に出入りできるような状況にどう向き合うか、その兼ね合い、制御と開放など、これからの課題として考えていきたい。

- 情報を受け取る側は家の中にいるというのは、われわれの年代の基本形だが、必ずしも家の中にいるわけではない現状もある。すべてが変わるわけではなく、波の性格によっても位置づけが変わるのか。発信側と受け手とのメディアの関係についての将来像はあるのか。

(NHK側)

現場には新しいテレビを作りたいという思いがあるが、視聴者の意見などを踏まえたうえで、作り手の勝手な思いや都合でなく、受け手としてどういうものが必要かということについて、放送と通信の連携のありようを時代も見据えて考えていかなければならない。NHKでも議論を重ねたうえで、今後、新しいサービスを作り上げていくことになる。

- 手元にあるスマートフォンやタブレット端末で、場所や時間を選ばずコンテンツを楽しむことと比べて、テレビの前にいなくてはならないという制約があるが、そのメリットとはなにか。

(NHK側)

さまざまな世代、嗜好の方々がいるが、まだ1日の中でテレビの前にいる時間は長いのではないか。放送局であるため、テレビの前にいるという環境に対し、新たなサービスを提供したいという思いがある。テレビというふだん慣れ親しんだ端末とともに楽しむサービスを進化させたいという思いが強い。スマートフォンやタブレット端末でもさまざまなサービスを得られることは理解している。その中で、テレビを軸に、テレビの周りで新しいものが得られるというサービス像を描くことができると考えている。

<放送番組一般について>

- 8月14日(水)のNHKスペシャル「従軍作家たちの戦争」(総合 後 10:00～10:49)は、芥川賞作家の著名な人々が日中戦争、太平洋戦争下で軍報道部の期待に合わせ、日本兵の美しさ、大東亜の夢、神話を語り、総力戦に歩調を合わせていたことに残念さと言論の脆弱さを感じた。53歳で命を絶った従軍作家・火野葦平が実は言論はどうあるべきだったのかを私たちに託したと教えてくれたようで、学ぶものが多い番組だった。
- 「NHKスペシャル」をよく見るがいずれもすばらしい番組だと思う。8月17日(土)のNHKスペシャル「緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で」(総合 後

9:00～10:29)では、緒方さんが自ら決断し、ルールが違ってても人を救うという価値観を示したすばらしい活躍を伝えていた。“国境を越えていない難民は救わない”というのが難民救済のルールであるにもかかわらず、「私が決めなければ誰が決めるのか。人の命を救うためには国境を越えていなくても難民として救わなければいけない、それを決められるのは自分だ」ということで、ルールにないことを決め、問題を解決するところは印象深かった。

- 8月23日(金)のNHKスペシャル 東日本大震災「亡き人との“再会”～被災地 三度目の夏に～」(総合 後 10:00～10:49)は、被災した人たちが亡くなった人たちと出会うという超常現象的な不思議な体験について語る番組だった。ボランティアのお坊さんが、科学的に説明すればこのように説明できるという話をしていましたが、それでは具合が悪いと思う。そう感じている人、そう思っている人が話してくれることに意味があるのであり、超常現象や亡くなった人と出会ったということについての説明をお坊さんから聞こうとは思っていないので、科学的になりすぎる場所も意味がなく問題だと思った。
- 8月25日(日)のNHKスペシャル「僕はなぜ止められなかったのか?～いじめ自殺・元同級生の告白～」は、亡くなった人の親友、家族の証言がつづられている番組だった。今、NHKではいじめに関する番組をたくさん放送しているが、よい番組が多い。いじめは中学生、高校生だけの問題でなく、大人社会でも存在し、生きていく中で心の病を抱える人がこれからもさらに増えるのではと思う。心は人が傷つけるのではなく、自分が感じて傷つくものなので、今回のようにたくさんのいじめに関する番組を作り、これから先、折れない心はどうしたら育まれるのか、どんな訓練、鍛錬をしたらいいのか、心を開くのにはどうしたらいいのか、そういうことを取り上げてもらいたい。一人の死、一人の残した言葉が、その人の死によってたくさんの重いものを、生きている人に残すのだと強く感じた。この番組では自殺した少年が親友に残した言葉によって親友は重たいものを背負いながら生きることになった。死に対する宗教的なものでなく、一人の死がどれだけの影響を与えるのかという視点でも番組を作ってもらいたい。
- NHKスペシャル「僕はなぜ止められなかったのか?」はとてもよい番組だった。ふだんから「NHKスペシャル」は感心することも多く、CGを駆使したものに圧倒されることもよくあるが、今回の番組は、映像自体は地味で、演出が凝らしてあるわけでもなく、亡くなった人の中学生のときの親友が、自分は傍観者だったのではないかとずっと悩んでいる姿を追いかけていた。月命日に亡くなった友人の家にクラスメートと一緒に泊まりに行くのは意外な展開で驚かされた。番組の中で一人

一人紹介されていたわけではないが、一緒に泊まりにいった友達の心の中にもそうとう苦悩があったのだろうと思えた。両親がリーダー的な高校生を1人呼び出して話をする場面があったが、あのようなことがテレビカメラの前で行われるのは驚きだった。カメラがあるから起きたというわけではなく、涙を流して語っている様子も、自分の心情を吐露しているようだった。カメラがあってもあのような展開になるのは、番組を作る趣旨を丁寧に説明しているだけでなく、この番組がどうしても必要なのかを作り手側が確信を持ち、それを遺族と共有できるレベルになっているからだ后感心した。

○ NHKスペシャル「僕はなぜ止められなかったのか？」はすばらしい番組だったが、「止められなかったのか」という問いがなぜ親と同級生たちに収れんされてしまうのか。教育委員会や学校側をお決まりのパターンで取り上げ責めることは必要ないと思うが、学校社会についてのある種の管理責任を問われる人たちや、目配りをして問題を深刻に受け止めなければいけない人たちがまったく登場していなかった。そのような人たちに出演を引き受けてもらうのは辛いことと思うが、社会的課題として広げる、共有するという視点をもっと出してほしかった。どうしたら気持ちを伝えられる人を見つけられるかは最低限のことだが、そこからもう一歩先へ行く勇気をどうやって出すかは番組の中でもメッセージを出せたのではないかと思った。

○ いじめの話聞いて思ったことは、ある調査で日本の高校生たちは自己肯定感が少ないとのことだった。自分は価値がある人間だと思っている高校生が7.5%ぐらいしかおらず、まあまあ価値があると思っている高校生が30%弱。自分に価値があると思っている高校生が4割いないという結果だった。アメリカでは57%の子どもが自分は価値がある人間だと思っており、まあまあ価値があると思っている子どもが32%と9割ぐらいが自分は価値がある人間だと思っている。自分は価値がある人間だと思っている子どもたちがそれぞれのよさを生かして生きていくわけだが、日本では否定的な人が多く、こうしたことがいろいろな問題を引き起こしているのではないかと思える。なぜ日本の高校生はこうなるのか。日本で自分が優秀だと思う子どもは4%、まあまあ優秀と合わせて15%ぐらいだ。アメリカは9割ぐらいが自分は優秀だと思っている。なぜ日本は15%の子どもしか優秀と思わない教育になってしまい、アメリカでは9割の子どもたちが自分は優秀、価値のある人間だと思っているという教育になるのか。このあたりにいじめとか、日本の初等中等教育の問題の原因があるような気がする。こういうことを調べて番組を作ってもらおうと、教育にとってもよい影響があるのでないかと思った。

- セルフエスティーム(自尊心)というか、自分は価値がある人間だと思わなくなったということについて、日本の文化についてももう少し取り上げ、自信をもたせる必要があるとの意見があったが、まったくその通りだ。宗教が教育から離れてしまったことはしかたのないことだと思うが、日本人が今まで培ってきた宗教観のようなものを、「こころの時代～宗教・人生～」だけでなく、もっと一般の番組の中でもいろいろなコメントを入れないといけないと思った。
- 9月8日(日)のNHKスペシャル 震災ビッグデータ F i l e . 2「復興の壁 未来への鍵」(総合 後9:00～9:58)など、NHKの果たしている役割はとて大きいので今後も継続してもらいたい。
- 8月3日(土)の週刊ニュース深読み「あなたの“終活”は大丈夫? どう迎える? “人生の最期”」は、いろいろなパターンを出して話をしていたが、息子2人に残したものが家とネコで、どう分けるかという話があった。ゲスト解説者が「ネコはぶった切るわけにはいきませんし」と発言したことに驚いた。NHKの発言ではなく、事前のコントロールは難しかったと思うが、気になった。
- 8月11日(日)の「解説スタジオスペシャル」(総合 前0:05～2:00)は、解説委員が消費税、原発再稼働などいろいろなテーマで議論する討論番組だった。それぞれの問題に対して中立を装うのではなく、意見表明をきちんとして議論に入るのはおもしろかったが、聞いたことのある議論の再生産で終わってしまっているきらいがあったのは残念だった。ある意見に対する不十分さや論点の出し方に対する批評など、ワンクッション置いて議論するスタイルを解説委員であれば作れるはずなので、そういう議論の展開に今後期待したい。世間の風潮がAかBかという単純な議論にいきがちだが、そうではない問題提起にも期待する。
- 8月18日(日)の「7年ごとの記録 28歳になりました」(総合 前0:05～1:35)は、日本の子どもたちの成長を何歳まで見届けられるのか分からないが、これから先も楽しみにしている。その後海外のものもあり、もともとイギリスの企画だったことがわかり、なるほどと思った。8月30日(金)の7年ごとの記録 「イギリス56歳になりました」(前編)(Eテレ 後11:00～11:54)では、中には番組のことを批判している人もおり、出自や社会の背景など、出演している人が自分の本当の姿を映しているわけでないと言っていたが、その部分が見えてくるものもあり印象的だった。これから先も7年ごとに放送されるのが楽しみだ。
- 8月24日(土)の時論公論「宇宙の謎 解明の切り札 “加速器”建設の是非」

は、巨大な“加速器”という実験装置、国際リニアコライダーの誘致が必要かどうかという内容だった。学術会議ではあまりプラス方向の意見は出ないが、人類として、日本としてこういうことに頑張って取り組むべきではないかということ了新大陸“発見”とつなげて話しており、科学への夢の話をわかりやすく伝えておりよかったと思う。

- 8月26日(月)のクローズアップ現代「世界の小型衛星市場をつかめ～新型ロケット イプシロンの挑戦～」は、イプシロン打ち上げ前日に解説していた。今までのロケットとイプシロンの違いや、日本の優れた技術を、発想を変えて開発費を抑えて世界に出すことについて、とてもわかりやすく説明した番組だった。打ち上げは延期になったが、このような難しい取り組みは必ずしも1回で成功するわけではないので、今回のことは失敗ととらえずに、こういう試行錯誤をオープンに放送したことを評価したい。一般的に、課題は進行中のときに提示されることがよくあるが、成功や失敗の後で振り返るような番組があってもよいのではと思う。日本がいろいろ難しい状況にある中では、全部がよいという選択肢は少なくなっている。全てトレードオフがあり、あちらを立てればこちらが立たずというものがあるので、より国民が議論できるような社会であればよいと思う。
- 8月31日(土)のMEGAQUAKEⅢ 巨大地震「よみがえる関東大震災～首都壊滅・90年目の警告～」(総合 後7:30～8:43)は、90歳を過ぎた関東大震災の経験者がインタビューに出ていた。生きている人がいる今しかできないことで、貴重な映像をたくさん集め、資料を残しておくことは次の世代のためにも意義のある番組だったと思う。燃えている所を見ている人たちがたくさんいて、火事は自分の方にまだ来ないからと見物をしていた結果、逃げ遅れる人が出てしまったことを伝えていた。こういうことは経験をしなければわからないことだ。そのほかにも避難経路のあり方などさまざまなことが映像で出ており多くのことを学んだ。地震学者が新しい研究成果をいろいろ発表している。あの映像を見ると関東大震災がすぐに来るのではないか、駿河湾の東あたりはまだひずみがたまっているのではないか、東南海地震も起きる可能性があるなど、いろいろリスクがあることを示していた。地震学者は多様なことを研究していて、1つ1つは成果が出なくても、中には本当に役に立つことがあるかもしれないということで真摯に取り組んでいる姿を伝えていたのがよかった。
- 8月31日(土)の宮崎局発地域ドラマ「命のあしあと」(総合 後4:00～4:59)は、多くの家畜を殺さないといけなかったということ、東京ではどちらかというひとと事のように聞いていたが、家畜を育てていた人たちの心の痛みを地方から発信し

ており、とてもよいドラマだった。

- 8月3日(土)のE T V特集「人を動かす絵 田中泯 画家ベーコンを踊る」は、田中泯さんがダンサーであるとは認識していたものの、ダンサーとして見る機会はなかったため、田中さんがベーコンの絵を前に踊る場面がとても印象的だった。
- 「にっぽんの芸能」は、歌舞伎以外にも、舞踊などなかなか見る機会のないものも取り上げており、うれしく思う。8月23日(金)の「話題の公演から 日本舞踊とオーケストラの出会い」では、もともとの「ボレロ」とは違う野村萬斎さんの「ボレロ」を紹介しており、とても感動的だった。
- 8月13日(火)の「プロジェクト112 知られざる米軍化学兵器開発」(BS1 後 10:00~10:49)では、核に代わる毒ガス兵器開発を当時のソビエトと争うアメリカが、1960年代に自国の数多くの兵士を使って人体実験を行っていた事実が放映されていた。そのことで今なお死の淵で苦しむ元兵士の存在や、沖縄の知花弾薬庫でサリン漏れ事故を起こしたこと、1億人分の致死量のサリンがあったことも驚きだった。こうしなければならぬのかという苦しい余韻と、現在シリア内戦で死傷者が出ている現実の狭間で、人体実験で苦しみ、おう吐する兵士の映像が脳裏に焼き付いた番組だった。
- ドキュメンタリーは説明することと同時に感じさせるという重要な使命をもつ番組だと思う。

8月16日(金)のBS世界のドキュメンタリー「ヒトラー・チルドレン～ナチスの罪を背負って～」は、ナチスの重要人物ゲーリング、ヒムラー、ヘスの子孫がどう思いながら今を生きているのかをドイツの放送局とイスラエルの放送局が一緒に作ったドキュメンタリーだった。ヘスの孫はヘスとそっくりの顔をしていて、そのことを本人もとてもつらいと話していた。生き残りの子孫たちとアウシュヴィッツに出かけ、そこでイスラエルから修学旅行で来ているユダヤ人の高校生たちとディスカッションし、最終的に生き残ったユダヤ人がたまたま1人いて、「あなたが悪いわけではない」とヘスの子孫に言うシーンが印象的だった。1人にフォーカスを当てるのではなく、広い意味でいろいろなことを感じさせ、見た人がその後ずっと何かを抱えるようなドキュメンタリーが本当にすごいドキュメンタリーだと思った。
- BSプレミアムで月曜から土曜の朝7時から放送している「ニッポンの里山 ふるさとの絶景に出会う旅」は、小学生に給食前の10分間に見てもらいたい番組だ。

映像で心もいやされ落ち着くし、消化もよくなるのではないかと思う。自然と人とのかわり、先人への感謝など、食のありがたさにも通じる番組だと思う。

- 8月29日(木)の「ニッポンの里山 もうひとつの世界遺産に行く」(BSプレミアム 後 8:00~8:59)は、世界文化遺産に登録された富士山と時を同じくし、国連FAO(食糧農業機関)が認定している世界農業遺産が、今年新たに3か所認定されたことも含め、世界の25のうち日本に5つあることを紹介しており、時宜を得たものだったと思う。自然と調和した里山の暮らしが見事な映像でつづられていると思う。日本の地形を災害から守っている棚田の例が出ていたが、科学的な解説のほか、佐賀県唐津市の蕨野の棚田で10メートルを超える石垣にへばりつき、崩落防止のための草刈りをする女性の姿に圧倒され、言葉を失った。日本人がどれほど大切に大地を守ってきたのかを番組で知り、日本人としての誇りさえ共有できる内容だと感じた。

- 第23回参議院議員通常選挙の報道は、速さと正確さの意味でNHKはよい放送を行ったと思う。視聴率は意識せずに、従来どおりのスタイルを貫いてほしい。

(NHK側)

選挙報道は、正確、迅速にきちんと伝えるという基本的な姿勢でこれからも伝えていく。

- 防災関係のニュースをNHKは最近意識して伝えていると思う。ニュース速報の入れ方や、気象情報をニュースの冒頭での詳しい分析や、画面での見せ方にも気を遣っているのがよく分かり、最近の防災・気象の報道はよいと思う。

(NHK側)

気象については、これまでの災害があってから被害を伝えるという災害報道から、早めにきめ細かくこれから起こりそうなことをきちんと伝える、災害を少しでも少なくする姿勢で報道する、そういう方針で進めていくよう取り組んでいる。

- 8月5日(月)の沖縄米軍ヘリコプターの墜落について、NHKの報道は墜落した後の沖縄の人の反応で終始していた。沖縄国際大学に墜落したヘリコプターの映像を使いながら、その事故調査が終わらないうちに訓練を再開したことには批判的な意見があるというスタンスで報道していた。墜落したHH60は、東日本大震災のときの救難ヘリコプターでもあり、飲料水や救援物資を運んでいる。日本のために

活動しているところもあり、そういう点も幅広く報道することが必要だと思う。事故調査が終わらない中での訓練再開について批判しているが、今回米軍は沖縄にかなり配慮している。オスプレイの配備を少し遅らせたのはかなりの配慮で、他の国に対するものと今回の沖縄への配慮は違うという見方があってもよいと思うが、そのあたりの報道はほとんどされていない。どのような姿勢で取材、報道するかだと思う。新聞の場合は、哀悼の意を表すると書いたところや、痛ましい事故だったという書き方をしたところもある。米軍は危ない存在というだけの紋切り型になっているのでないかと気になった。

(NHK側)

沖縄のヘリコプター墜落の報道については、ご指摘のことは1つずつきちんと受け止めたい。オスプレイの配備についても沖縄の人たちの気持ちと同時に日米の安全保障の問題、米軍の若い兵士の気持ち、さまざまな見方、考え方、視点があるので、そういうものを多角的に伝える姿勢でこれからも伝えていきたい。

- 東京にオリンピックが招致できた理由の1つとしてクリーンであること、モラルが高いことがポイントであったと聞いている。日本の良さが長く維持されるような、真正面から向き合う番組が今後もあってよいと思う。
- フランスのニースに行った時に、NHKの番組がなかなか見られなかった。今度ミャンマーで大河ドラマ「篤姫」と、連続テレビ小説「カーネーション」を放送すると聞いている。企業の協賛を受けてのことだと思うが、BBCなどはすでに海外のいろいろなところでコマーシャルを入れて放送している。日本の文化、日本の価値観を示すような番組をいろいろなところで放送できるようにすると、ひいては日本の企業がビジネスを展開するうえでも役に立つ。韓流ドラマが韓国のイメージを高めている部分もある。NHKは素晴らしいコンテンツをたくさん持っているので、国際放送以外でも、海外で見られるようにしてもらおうと、日本企業、日本経済の支援になるのでないかと思う。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年7月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

7月のNHK中央放送番組審議会は、11日(木)、NHK放送センターにおいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（25年度第1四半期・4～6月）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、8月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<経営計画における「達成状況の評価・管理」（25年度第1四半期・4～6月）について>

- 放送関係の進捗状況の説明で、これをどう読み取ればいいのか理解しかねるところがある。バランスよく評価されているという説明があったが、これはすべての指標についてバランスよく評価されることを目指すということなのか。

また個人的には、公共性、公平性も含め、ドキュメンタリーや討論番組がNHKらしさの1つだと思っている。ジャンル別で見れば大型企画ということになるのだろうが、それらの世帯視聴率が低下しているということは、私が期待しているジャンルについて視聴率が低下傾向にあると読み取ってよいのか。

(NHK側)

総合テレビについては、質的指標の「わくわく・ドキドキする」「くつろげる・リラックスできる」の評価をもう少し高くしたいという気持ちがある。編集方針の中でも、「心豊かに暮らせる番組をバランスよく編成する」としており、評価が伸びていないところがあるので、その部分は一時的に高くなるようにしたいと考えている。

ドキュメンタリー、ニュースは極端に下がっているわけではないが、「NHKニュース7」「ニュースウオッチ9」「クローズアップ現代」は前回に比べると1～2%ぐらい下がっている日が多くなっており、この3か月でニュースの視聴率が低くなっている傾向はある。これが本質的な問題なのか、一時的なものなのかは分析が必要だと考えている。以前は「NHKニュース7」の直前の気象情報やニュースの冒頭を見ることで、その日の出来事等をつかむことができるという理由から視聴率も高かった。最近、30代、40代の方の中にはネットでニュースを確認している方も多く、そういうことが影響している可能性もある。テレビのニュースはネットにはない、付加価値のようなことを考えていく必要もあるかもしれない。大型企画は「NHKスペシャル」などがあるが、テーマによって視聴率に差があるため、もう少し長い目で見ていきたいと考えている。

- 今後の努力目標として、それぞれの要素が同じように評価されるとはならないまでも、評価の低い部分を1ポイントでも戻すということが番組制作上の短期的目標になるということか。

(NHK側)

実際には1つ1つの番組について、カルテを作って分析している。「わくわく・ドキドキする」「くつろげる・リラックスできる」という要素については、連続テレビ小説「あまちゃん」が高い。このような番組をいくつか作りたいと考えている。25年度改定では家族で見てもらえる番組として「伝えてピカッチ」などを土曜夜間に新設した。視聴率的には少し低調だが、まだ認知度が低いので、プロモーションも含め、

番組のブラッシュアップを考えていきたい。

- 「わくわく・ドキドキする」に関しては、結構評価があると見ることもできる。他の要素と比べて評価が低いとするのではなく、その要素の中では結構評価されているという見方もできる。その辺りの評価基準を精査してもらえたらと思う。

(NHK側)

10点満点で、7点となると及第点という印象があるが、5点台、6点台は視聴者が満足していないのではないかとと思う。

- 波ごとに重点項目があるが、総合テレビなら総合テレビ全体の構成の中でも特に重要な部分と、そうでない部分があるのではないか。そこそこ評価されたら、波としては相当評価されたことになる部分もあるのではないか。重点項目の中でも、その重要性に濃淡があるのではないかとと思う。

(NHK側)

NHKの役割からすれば「丁寧に取材・制作されている」「正確な情報を迅速に伝えている」はきわめて重要な要素だと思う。それに比べれば「わくわく・ドキドキする」「くつろげる・リラックスできる」は重要度は低いかもしれない。ただ、NHKの番組には報道番組もあれば、ドラマやクイズなどの家族の方にリラックスしてもらおう番組もある。とりわけ総合テレビについては、編集方針の重点事項にも掲げている多彩な番組を編成していくためにも、「わくわく・ドキドキする」「くつろげる・リラックスできる」という評価もある程度結果を出したいと考えている。Eテレについては、「丁寧に取材・制作されている」はもちろんだが、「次世代の育成につながる」が大きな課題ではないかと思う。

各指標について、評価の高いほうから順番に並べると半円形のグラフになる。総合テレビの「丁寧に取材・制作されている」「正確な情報を迅速に伝えている」を右側に並べれば、右側が大きな丸となり、その部分は期待が大きいところであり重要な部分といえる。そのほかの部分は評価が低い、その程度あればよいという評価なのかもしれない、それが総合テ

レビの1つの形かもしれない。そのように並べてみると、総合テレビで求められているところが見えてくると感じている。

- 今回の発言はとても大事なところを突いていると思う。視聴者にとっては、期待値に対して結果との間に差があると不満であり、差がないと満足と感じられる。総合テレビの評価の低い部分を見ると、そこは期待値が低い部分なのかもしれない。期待しているがそれに応えていないのではなく、初めから視聴者が「わくわく・ドキドキする」を総合テレビに期待していないと読み取ることもできる。前期と比較すると、評価が有意に高まったものも、有意に低くなったものもない。つまり、安定的に質を維持できているという評価を得ているのであり、それは1つの達成と見てよいと思う。総合テレビでは「感動できる・心に残る」「わくわく・ドキドキする」「くつろげる・リラックスできる」が依然として低い、これは従来のイメージを打破していくべきなのか、期待されていないからこのままでよいのか、その解釈は分かれるところだと思う。

Eテレの4～12歳の週間リーチが上がっているということだが、これはEテレの役割として評価できると思う。

(NHK側)

Eテレは、4～12歳の週間リーチは上がっているが、13～19歳はあまり上がっていない。早朝の幼児向け番組が見られているが、中学生、高校生のティーン向けについては4～12歳ほど接触者率が伸びていない。今年度の番組改定の中で、中学生、高校生向けについては課題があるのではないかと議論している。

- その年層は、もともと伸びていない部分ではないのか。母親は小さな子どもには番組を見せるが、ハイティーンなど勉強しなくてはいけない人には「テレビを見るな」と言うのではないのか。

(NHK側)

4～12歳は男女合わせたデータだが、Eテレの接触者率が去年は61%、今年は73%と伸びている。一方で13～19歳は18%が16%に下がっている。もともとの層は低い、さらに下がっている。幼児向けの番組は改定後も評価されているが、中学生、高校生に向けた番組はなかなかうまくいっていない。Eテレの「次世代の育成につながる」と

いう役割からすれば課題だと思っている。

○ BSプレミアムはそれなりに評価されていると思う。総合テレビの「わくわく・ドキドキする」が極端に低いのは、指標の読み方で結果のとらえ方も違うと思う。総合テレビは幅広い視聴者に向けて多彩な放送を出していかなければならないため、「わくわく・ドキドキする」「くつろげる・リラックスできる」という要素もNHKとして努力するという事だと思いが、これらの評価が変わっていないのは、視聴者が期待しているものではないからではないか。社会的課題や世界をどのように見ていくかといった部分で総合テレビが期待されており、おもしろおかしい番組などは民放を見ればよいし、質の高いものはBSプレミアムで見ればよいのだと思う。総合テレビの評価の低い部分を、無理をして取り組んでいく必要があるのかという感じがする。それならば、BSの視聴者を増やす努力をしたほうが、全体としてバランスが取れてくるのではないかと感じた。

○ 視聴者が何を望んでいるのか、それに対し総合テレビとして適切に対応しているのかを見ればよいのであって、「ワクワク・ドキドキする」「くつろげる・リラックスできる」という要素に対しては、視聴者は期待をしていないかもしれない。どういことが期待されているか、それに対する満足度はどうかを別な観点で調べてもらった方がよいのではないか。

総合テレビの「エンタメ・音楽伝統芸能」のジャンル別世帯視聴率が5.6%でそれほど高くない。20時台に「エンタメ・音楽伝統芸能」が入っているとすればそこは期待されていないのかもしれない。総合テレビについて、午後8時台にどうい番組を提供することが、視聴者の期待しているものと合致するのかについて考えたらどうかと思う。

○ 何のためのデータなのかが伝わってこない。視聴率に支配されるテレビの世界があることは理解するがそれでもなく、数字の持つ意味がそれほど深刻に伝わってこない。質的指標に10指標あって、「わくわく・ドキドキする」など、公共放送としてどの程度の意味があるのかと思われるものも入っており、満遍なくやっいていこうとしすぎているように感じる。それらの指標を全部上げていかなければならないという観点から改善策を考えるのではなく、前回との比較など時系列で見ていくほうが大事だと思う。顕著な変化があったことについてどうなのかという議論をおこなったほうが生産的なような気がする。ジャンル別世帯視聴率で大型企画が落ちており、本来高いところが少し下がっている。これらをどのように分析しているのか。番組の内容は相変わらずよいと思うので、別の事情で落ちている理由があるのか。その分析があれば聞かせてもらいたい。

- 総合テレビの午後7～10時の世帯視聴率が落ちている理由は何かあるのか。11%台を取っていたのが4～6月は10.5%となっている。午後7～10時のどの部分が落ちているのか、理由があるのなら教えてほしい。

(NHK側)

「クローズアップ現代」の制作担当の分析だが、民放も含めた裏番組との関係が大きく、視聴率はその番組の魅力や求心力だけではなかなか測ることができない。最近の傾向では、BSとCSを含めた、地上波以外の視聴が非常に伸びている。「クローズアップ現代」の時間はBSでプロ野球、紀行番組などを放送している。かつて「クローズアップ現代」を見ていた人たちの一部は、プロ野球や紀行番組を見ることがあるのではないかと分析している。ニュースも下がっており、「NHKニュース7」から続けて「クローズアップ現代」を見る方が多いので、「NHKニュース7」が下がれば「クローズアップ現代」も下がる傾向がある。制作現場としては扱うネタが違うのではないかと、演出もパターン化しすぎているのではないかとといった議論もおこなっている。

質的指標と量的指標との兼ね合いについて、どれだけ広く人々に見てもらえるかというリーチの数字だけだと、NHKの番組が社会にとって、人々にとってどれぐらいの価値があるのかわからないのではないかとということで、質的指標の10指標を導入した。総合テレビの午後7～10時の視聴率は確かに落ちており、番組の視聴率が落ちていることは容易に判断できるが、「NHKニュース7」「ニュースウオッチ9」はNHKが本来持っている公平・公正、丁寧な取材などの部分で評価が高く、質的指標が高ければ継続していこうということになる。総合テレビの「丁寧に取材・制作されている」「正確な情報を迅速に伝えている」は期待値と実現度がきわめて高く、この評価は前の四半期とまったく変わっていない。量的指標も気にはするが、質的指標をジャンルごと、チャンネルごと、番組ごとにきちんと把握することで、今後の編成、番組のブラッシュアップに役立てていこうという考えで、両方の数字を見ている。それぞれに価値が高く、参考になるデー

夕だと考えている。

- 質的指標も時系列で見るとそれほど変化はないのか。

(NHK側)

今回のデータではほとんど変わっていない。

- この調査は5回目か。

(NHK側)

5回目だ。質的指標も維持されている。そんな中で「わくわく・ドキドキする」は上がっていない。

質的な形をいかに維持するか、高めるかが大事である。今回は維持されているというのが全体の評価だ。

- 質的指標を10点で採点するのはとてもたいへんで、この幅だと5点満点ぐらいでもよいのではないかと思う。こういうデータはどうやって統計を取るかによって出方もずいぶん変わってくる。極端な点数を除いて真ん中のところを取るということは考えにくいのか。10点で評価してもらうことが重要なのか。1～5でなく10の幅を持つことが差を出すのに必要ということか。

(NHK側)

1～10の評価がいちばん適当という認識だ。

質的指標の点数は絶対的な数ではない。総合テレビとBSプレミアムでは番組を見ている人の数もまったく違うため、一概に絶対数として比較することはできない。それぞれの項目は、時系列で見ることによって経年変化も含め、その数字の意味合いがわかると思う。量的指標の数値は統計値として現実感、リアリティを持って見ている。一方、質的指標の数値については、イメージによっている部分があるが、それでも大きくぶれるようなことはない。

- Eテレの13～19歳が18%から16%に下がったとのことだが、それはどういうパーセンテージと考えればよいのか。

(NHK側)

接触者率で、4～12歳は2012年が61%、2013年は73%である。13～19歳は18%が16%に下がっている。

- それは何が母数と考えればよいのか。

(NHK側)

調査対象の人の年代別の数が母数となっている。各年代で男女に分けて集計しているが、子どもについては幼児・小学生と中学・高校生などでは見る番組がまったく違うので、男女まとめて4～12歳、13～19歳と別に統計を取って出している。接触者率は4～12歳が73%で、13～19歳が16%なので相当差がある。今回の改定で4～12歳はさらに伸びたのだが、13～19歳はもともと低かったのがさらに下がっている傾向が見られるということだ。

- ハイティーンの視聴者はほかのチャンネルを見ているという意味なのか、ハイティーンがテレビを見なくなっているという意味なのか。

(NHK側)

この数値はビデオリサーチ社の視聴率調査の関東地区600世帯の中で、13～19歳の年層が100人いたら100人を分母としたパーセンテージである。13～19歳がテレビを見ているかどうかについては、結構見ていると言えるデータもある。この年代は出演タレントで見る番組を決めることもあり、民放を見ている人が多い。

- こういうデータを元に何回か議論をしてきたが、ポイントをそろえて議論しにくい感じが若干残る。視聴者が何を期待しているか、期待に対しどこまで届いているかという1つの尺度がある。また、視聴者の期待に応えるため、NHKがチャレンジした結果、視聴者の期待に応えることができたのかどうかという尺度もあり、この2つの尺度に対しどうだったのかという整理があるとより議論しやすいのかという気がする。全体として出てきた結果と見ると、本当はねらいを定めてやっていれば、その部分の評価が高まり、各指標の評価を表す円グラフはかなり鋭角的な円であってよいということになると思われるので、そういう議論の整理ができないか。

視聴者の意向調査などから視聴者の期待を浮き彫りにし、その期待に応えるために制作した番組がどうだったかを見ていくことが必要ではないか。放送関係の進捗状況の分析資料と対比する形で、この四半期で特に力を入れた番組を視聴して議論を行うなど、もうひと工夫あると意味のある議論に結びつきやすい気がする。

(NHK側)

次回に向けて検討させてもらいたい。

- 円グラフはミスリードする恐れがある。横の棒グラフを並べるだけでも見方が変わってくると思う。新しいことをやるのはたいへんなので、並べ方を変えるだけでも変わると思う。
- このデータを見る限り、そんなにひどく落ち込んでいるものはなく、むしろ積極的に評価されているところが多いと思う。ポイントの高いところをより高くするぐらいの意図で番組を作って、円グラフがいびつな形になったときこそNHKはここに力点を置いたと自信を持って言えるような材料にしてもらえればと思う。特に大きく評価が下がったときには理由をきちんと掘り下げないといけないと思うが、若干下がったぐらいではあまり気にしないほうがよいのではないかと思う。

<放送番組一般について>

○ 討論番組について、公平性にかなうということだけでなく、NHKらしきという意味でも重要な位置づけの番組だと思う。ただ、1つのスタイルとして確立の域に達していないというのが雑ばくな印象だ。6月29日(土)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「“観光革命”がニッポンを変える」(総合 後7:30~8:43)は外国人の日本の観光がテーマだった。意見が対立することはないのでそれほど気にならなかったが、エネルギー問題など意見が対立するテーマの場合、討論の参加者は1回の発言機会に全部話してしまおうするため、議論が深まることがない。司会者が「いろいろありますね」と締めるだけでは、討論番組という域には達していないと思う。

7月7日(日)の参院選特集「党首討論」(総合 前9:00~10:30)では政党の党首が9名参加し、多くて苦労したと思うが、コメンテーターが結構本質的な問題を投げかけ、いくつかやりとりはあったものの、議論のほとんどが付け足しに終わってしまい、残念に感じた。

4月28日(日)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「TPP交渉 どう攻める どう守る」(総合 後9:00~10:29)では、少人数の討論で比較のおもしろくな

る可能性があったが、このときはT P P担当大臣が出席したことで、結論ありきのように見え、残念に感じた。また、最近本数が減っているが、Eテレのシンポジウムはテンションとテンポの面で熟議に近い議論になっていると感じる。少なくとも2、3回のやりとりがあることで、当事者同士も、見る側も、こういう違いがあるのか、こういう論点があるのかという気づきがある。思わぬ方向に議論が行くことがあるかもしれないが、司会者が論点に沿った議論になるよう、議論の引き出し役を担う必要がある。訓練も必要だろうし、歴史的な経過や背景なども知っている必要もあり、解説委員などの専門家が論点を踏まえたうえで、より深い議論になるよう工夫していく必要がある。討論番組のスタイルは1種類では無いと思うが、もっと落ち着いた討論となるよう討論番組のスタイルを確立してもらいたい。

(NHK側)

「NHKスペシャル」で「シリーズ日本新生」という討論スタイルの番組を放送しており、「“観光革命”がニッポンを変える」も、「T P P交渉 どう攻める どう守る」もそうだが、討論番組として模索している段階だ。東日本大震災前までは「日本の、これから」という討論番組を制作していた。これは市民参加討論番組というスタイルだったが、それなりにテレビの新しい形を見せることができたと考えている。同じ形で何年か放送してきたが、言いつ放しで終わってしまい、議論が深まらず建設的な提言型の番組とまでは行き着かなかったことからスタイルを変えた。東日本大震災があったということも大きいですが、新しい日本の姿を模索するための討論という位置づけで「シリーズ日本新生」を始めた。出演者も専門家だけにしたり、市民も参加したりと、テーマに応じてさまざまにスタイルも変えている。また、具体的な提言をする方が番組に出演し、その提言をもとに議論するという形も模索している。最もよい形はテーマによってそれぞれ違うと思うので、毎回チャレンジをしている状況だ。

- 6月下旬と7月初旬の「NHKスペシャル」を見て、NHKの質の高さをあらためて感じさせられた。1つ目は6月30日(日)の「世界遺産 富士山～水めぐる神秘～」、2つ目は6月29日(土)のシリーズ日本新生「“観光革命”がニッポンを変える」、3つ目が7月6日(土)の「足元の小宇宙～生命を見つめる植物写真家～」だ。3つそれぞれ違うジャンルで特徴があってすばらしかった。「世界遺産 富士山」は、水の神秘ということで、地下水路や地下ダムにカメラが初めて入り、驚愕

の映像を見ることができ、あらためて富士山の奥行きのようなものを感じた。「“観光革命”がニッポンを変える」は討論番組だが、スローライフの観点や外国人の観点など、さまざまな観点から多様な議論がなされていたので参考になった。「足元の小宇宙」は、植物写真家のすばらしい映像の世界を見せていただき、人間の暮らしを考えるうえでよい番組だったと思う。この2週間の「NHKスペシャル」はとても充実していたと思う。

- 7月7日(日)のNHKスペシャル「あなたは未来をどこまで知りたいですか～運命の遺伝子～」は、遺伝子解析が進み、それによってがんのリスクを抑えることができたことや、腸に異常のある子どもを救うことができたことなど、よい成果が出ていることを伝えていた。一方で、中国では子どもの才能の遺伝子を調べ、子どもの進路や教育を決めている現状を伝えており、遺伝子解析の結果をどこまで生活の中で使ってよいのかという問題提起にもなっていたと思う。列車のCG映像を番組のトーク部分の演出として使っていたが、番組の本質に関係なく、もう少し淡々と事実を伝えた方が、問題をより理解できたのではないかと思う。
- 7月2日(火)のクローズアップ現代「腰痛2800万人時代～変わる“常識”～」は、日本には腰痛患者が2,800万人いるが、原因を特定できるのは15%ぐらいでほとんど心理的要因であることを伝えていた。その対策のためにアメリカで行われているチーム医療を取り上げており、大変興味深かった。腰痛の人がそれほど多いのであれば、「ためしてガッテン」など、もっと多くの人気が気軽に見ることができる番組で取り上げてほしいと思う。
- 「NHKニュース おはよう日本」でクラウドファンディングについて伝えていた。インターネット上で多くの人から資金を集め、事業に必要な資金を調達する手法だが、詐欺が起きる危険性があるなど、さまざまな問題もある。ベンチャー企業等が資金集めをする新たな手法は大事だと思うが、どういうことが問題となりうるのかを取り上げ、「クローズアップ現代」「NHKスペシャル」などで深く掘り下げて伝えてもらいたい。
- 総合テレビの夜9時から「ニュースウォッチ9」があり、衛星第1の夜10時から「ワールドWaveトゥナイト」、夜11時から「ワールドスポーツMLB」が放送される。ある意味で3時間ニュース番組のパッケージになっているというところもできる。それをパッケージとして見ると、非常に充実した3時間であり、総合ニュースと海外のニュース、スポーツ情報をパッケージで提供している放送局は世界でもほとんどないと思うので大事にしてもらいたい。パッケージとして考え

ると、総合テレビとBSは相互補完のような関係にあると思う。単にすみ分けを行うのではなく、相互補完していくことが重要だと思う。他局も含め、平日のスポーツ情報は野球中心で、試合が終わっていないケースなどもあり、充実したスポーツニュースとはなっていない。「ワールドスポーツMLB」は45分あるので、MLBやサッカー等の海外情報だけでなく、国内の情報も入れてもらえればと感じている。スポーツは1つの例として挙げたが、3つのニュースをパッケージとしてバランスを考えていくことなどで、総合とBSの連合体でよりよい放送が可能になるのではないかと思う。

○ 料理番組の「きょうの料理」は昔からある番組だが、内容は現代に合わせ、時代に追いついていると思う。「きょうの料理ビギナーズ」はアニメーションのキャラクターを立て、昔だったら説明しなかったような料理の基本についても説明しており、現代の人に料理に興味を持ってもらおうとしていると感じる。「ひるまえほっと」の中に料理コーナーがあるが、今どきのカフェめしのようなおしゃれな料理を紹介しており、現代に合わせて制作されていると思う。

○ Eテレは視聴率がいつも低いですが、私はすごく好きで、友達にもEテレはおもしろいと言う人がずいぶんいる。印象的な番組や興味深い番組がとても多いので、どうして視聴率が伸びないのかと思う。「バリバラ～障害者情報バラエティー～」は障害者のためとあるので、一般の方は見づらいと思うが、扱われているテーマは普遍的なところに通じるものが多い。障害と笑いというテーマで、ここまでやるのかと思うこともあるが、チャレンジ精神も感じられ、すごくがんばっていると思う。

○ 「にっぽんの芸能」はよく見ている番組だが、15分と45分に分けて作っていたが、4月からは1本になってよかったと思う。「古典芸能玉手箱」というコーナーでは、古典芸能に関するさまざまなことを紹介している。歌舞伎の定式幕は係りの人が簡単に引いているように見えるが、女性が引くにはたいへんであることなども紹介している。短い中にも新しい切り口が入っており、おもしろいと思う。「ナンノの着物ことはじめ」というコーナーは、確かにすてきな着物を着ていて見たいという声もあるのかと思うが、古典芸能には関係ないと思う。歌舞伎の衣装や背景にあるものを紹介してもらえれば、番組全体の中で関連した情報になると思う。

劇場中継は、劇場で2時間の芝居を見るのは大丈夫だが、テレビの前で座って見るのはつらく感じる。劇場のふかんの映像のほかに、寄った映像があるなど、自分で切り替えられるようになると楽しいのではないかと思う。そこまでは予算をかけられないかもしれないが、実際に劇場で見た人も、別の視点から楽しむことができると思う。そういう工夫をしていただけるとありがたい。

(NHK側)

NHKでは放送と通信が連携するサービスとしてハイブリッドキャストの開発に取り組んでいる。今年度から試行的に始めていくということで、鋭意検討を進めている。例えばスポーツ中継や歌謡番組などで、複数の異なるカメラの映像を送ってにおいて、視聴者がテレビやスマホ、タブレットで見たい視点の映像を選ぶという仕組みについて、放送技術研究所で研究開発をしており、将来的には、ご期待に沿うことができるかと思う。

- 「グレーテルのかまど」はお菓子を扱った番組で、見ただけで作れるかどうかはわからないが、お菓子の背景も紹介していて楽しい。7月5日(金)の「京女の“夏越(なご)し”の和菓子」では、京都の人たちが毎年6月30日に食べる「みなづき」を紹介しており、和菓子屋に並ぶ背景もわかった。かまどの声を担当しているキムラ緑子さんもよく、変わった料理番組としておもしろいと思う。
- 白熱教室海外版「ハリウッド白熱教室」は特別講座のようで、学生だけでなく一般の方も参加していて、聞いている人も多彩だった。映画の見方や制作過程が紹介されており、映画を見る側としても発見があって興味深かった。「白熱教室」もいろいろなものが取り上げられるようになり、おもしろいと思う。
- 7月2日(火)のハートネットTV シリーズ認知症“わたし”から始まる 第2回「在宅を支えるケアーオランダからの報告ー」は、オランダの認知症の在宅ケアの事例を紹介しており、たいへんよい番組だった。今後、日本でも認知症の問題は大きな問題になると思うので、どう解決していくか、海外の事例をこのように丁寧取材し紹介してもらえると、今後の日本の認知症対策に役立つのではないかと思う。どの程度の費用がかかっているのか、オランダの社会保障制度など、もう少し費用に関しても伝えてもらえれば、よりよかったと思う。
- 7月1日(月)のプレミアムシネマ「ホワイト・プラネット」は、外国の番組を購入して放送したものだと思うが、7月10日(水)深夜に再放送していたNHKスペシャル「大海原の決闘!クジラ対シャチ」と比べると、他局の制作した自然番組になくNHKの自然番組にあるのは理解の部分だと思う。映像の感動はあらゆる自然番組にあるが、「ホワイト・プラネット」を例にとると、鳥の名前や、何月から何月になぜこういう行動をするのかなど、わからない部分があった。NHKの自然番

組を見るとそうしたところも説明されている。映像の感動と同時に理解があり、そういう意味では科学番組としても成り立っている。視聴者の心にある知情意の中で、情の部分だけでなく、知の部分にも訴えかけているというのがNHKの自然番組の特徴だと思う。

- 7月4日(木)の「プレミアムアーカイブス」で放送していた地球に好奇心「巨大恐竜の化石をさがせ 化石ハンター スーの冒険」は、ティラノサウルスの化石を見つけたスーの運命がどのように変わっていったかを伝えていた。イタリアと日本の文化、アメリカの文化の両方を比較したような内容で、テレビを見て本を読んだときと同じようにいろいろなことを考えることができた。このようなことが今後とても重要だと思う。
- 7月10日(水)の旅のチカラ「ミケランジェロの街で仏を刻む～松本明慶・イタリア～」は、仏師がミケランジェロの生まれた場所に行き、阿弥陀仏を彫るという番組で感動的だった。ピエタを見たことがない人にバチカンでピエタと対面させ、どれほどの感動を受けるものかを見る者にきちんと伝えること、ミケランジェロの実際の作品を見た仏師が自分の作品をどう変えていくのかということなどを細かく丁寧に撮影していた。イタリアの彫刻家と日本の仏師の交流も描かれており、長年仕事をしてきた者同士の相互理解が人間にとって重要だと感じた。
- 特別養子縁組あっせん事業で調査へというニュースが放送された。全国に15ある特別養子縁組あっせん団体の中に100万円を超える多額の寄付金を受け取っているケースがあると報道していたが、これは問題がある言い回しだと考えている。現状認識として日本の子どもの虐待死が深刻化しているが、大体1週間に1人の子どもが殺されているぐらいの計算になる。そのうちの半分以上が0歳0か月0日で殺されている。しかしこれは発見されている数のみで氷山の一角だ。こうした悲劇に対する処方箋ということで、「赤ちゃん縁組」の仕組みが30年前に愛知で作られた。これは子どもを生み育てられない課題を抱えている妊婦の相談に乗って、出産と同時に養親とマッチングし、赤ちゃんが欲しい養親も、子どもを産み育てられない親も幸せになるというある種のセーフティネットだ。一方、厚生労働省は特別養子縁組に熱心ではなく、基本的に施設養護という形で乳児院、児童養護施設に入れる形をとってきた。日本の場合は9割が施設養護で、これは欧米とはまったく逆になっている。欧米では子どもたちは家庭で育てられるべきだという考えで9割が家庭養護になっている。厚生労働省は特別養子縁組に補助金を出すことなく、規制だけをしてきた。特別養子縁組を行うNPO、民間団体はどうやって職員を雇い、妊娠で課題を抱えている親のカウンセリングに乗るために、交通費などの必要経費を払う

のか。何度も話を聞き、出産のときは預かりに行き、何日か面倒を見て、養親とマッチングし、養親に研修を行うという丁寧な対応をしていかなければ特別養子縁組はできない。当然ボランティアだけでは成り立たない。こうしたことをきちんと賄うためには養親からそれなりにお金をいただかなくてはいけないわけで、私の試算で1件あたり150万円は必要だ。今回のNHKのニュースでは「100万円を超す多額の寄付を受け取っている」という形で、お金をもらうことが利益目的と受け取られかねない表現となっている。100万円が多額かどうかはきちんと実態を調査し、正当なのかどうかを踏まえたうえでないと書けないはずである。それをなぜ多額であると断定できるのか、はなはだ疑問だ。諸外国では特別養子縁組はきちんとセーフティネットとして位置づけられており、例えばアメリカの場合は、補助によって経済的負担が減るため、NPOにお金を払っても基本的にはただに近いお金で養子を迎えることができる。国の制度こそが批判されるべきであって、養子縁組団体が不当に高いお金をもらっているとする報道のあり方はこの業界の意欲をそぐことになる。特別養子縁組で救われる命があり、それを支えている民間の団体があり、その人たちの取り組みを勇気づける仕組みを欧米諸国のように成り立たせていかないといけない状況がある。NHKには実態を多方面から取材したうえで「クローズアップ現代」やそのほかの番組でこの問題をきちんと取り上げてほしい。社会的養護の問題はほとんどスポットライトが当たってこなかったゆえに予算も少なく、社会的インフラも脆弱だ。そのために子どもたちが死んでいる状況があり、この点に関してNHKは報道に努めてほしいと思う。

(NHK側)

特別養子縁組が社会的意義の大きい制度であることはわれわれも認識している。望まない妊娠が問題になる中で不妊に悩む方もいる。それをつなぐ制度、仕組みに対する意義は認識している。赤ちゃんを渡すまでにたくさんのコストがかかること、多くの団体が苦しい財政状況の中で一生懸命にやっていることもわかっている。今回のニュースは、厚生労働省が団体の実態調査を指示したというもので、厚生労働省としては、「赤ちゃんの引き渡しにかかる経費について実費として請求してほしい、寄付金という任意の形のものでなく、人件費も含めた必要経費を実費として請求してほしい」という問題意識がある。その実費が一律に決められている団体もあるのではないかとということで実態調査を指示したものだ。団体はどういう形態で行うことがよいのか、国の補助のあり方も含め、子どもを受け入れる夫婦、子どもを渡している夫婦

の双方に制度の面、あり方の面も含め、多角的に取材したいと思う。随時ニュースや企画で伝えていきたいと思う。

- 厚生労働省が動き始めた背景の1つには、養子縁組あっせん法案という試案を作って来年の通常国会に出そうとしていることがある。このあっせん法案は問題があるとされており、生後3か月間は縁組してはいけないという規定がある。これがあると生まれてすぐに養親に引き渡す赤ちゃん縁組が事実上できなくなる。3か月間赤ちゃんの面倒を誰がみるのかという話で、3か月間ほったらかしにされていた赤ちゃんが愛着を形成できず、反応性愛着障害という心の障害を持ってしまう可能性が高まると専門家は指摘している。このようなあっせん法案が出されようとしていて、特別養子縁組業界が壊滅しそうになっている状況がある。その中で今回のような「調査」が命じられ、実施されようとしているのは何を意味するか知ってもらいたいと思う。ナショナルスティックなイデオロギーをもとに作られようとしている法案が実際の子どもの視点、福祉の視点を持ち得ているのか、そういうところを多角的に検証する番組を作ってほしいと思う。
- この問題の1つにはニュースの文章が長すぎることもある。これから取材を行い、さまざまな背景に迫り、認識を持つとしても最終的に伝えるニュースの文章が適切でないと感じる取材の意図が伝わらないと思う。たとえばこのニュースの文章は句点が1つであり、そうしたことが事実と判断を混同させ、その判断は誰がしたのかという判断主体がわからなくなっていると思う。文章を短く区切って、ミスリードな印象を視聴者に与えない、1回句点で切ることによって視聴者が何だろうと考える報じ方が大事だと思う。ニュース全般に対して文章の長さが気になっている。データ放送のニュースの文章もまだ短く切れるのにと常日ごろから感じている。

(NHK側)

ニュース原稿はできるだけわかりやすく、正確に伝わるような文章で書こうとしている。今回の原稿だと1分30秒ぐらいの長さだが、例えば5分のニュースの中で3本ぐらいのニュース項目を入れるとなると、1本1分強の原稿となってしまう、結果1つの文章にいろいろなことを盛り込んでしまう傾向はある。できるだけ文章を短くし、見出しも短くして、わかりやすく伝えることを心がけたいと思う。貴重なご指摘だと思う。また、ネット上ではアナウンサーが読むものとは違うネットの文章があると思うので、そういう部分も工夫したい。

- 新聞に出ていたが、NHKは外国語使用が多すぎると提訴されたそうだが、こういうものにどのように対応するのか聞きたい。外国語使用全般についてどのようなスタンスをとっているのか。

(NHK側)

NHKは放送文化研究所で用語の問題を主に扱っている。用語委員会があって、ニュースや番組のコメントについて、問題があると思われる表現や長すぎて分かりにくい表現などについて調査、研究を行っている。今の社会は外来語が多く、外来語抜きで語ることは難しくなっている。ただ、過度に多用することや、普通の人分からないような新しい言葉は避けなければならないと思う。外来語が多すぎると思われる方がいることも分かるので、放送文化研究所の用語の専門家、アナウンス室などで研究させてもらいたいと思う。

NHKではガイドラインに則してことばの使い方のルールをまとめており、それに基づいて番組を制作している。次々と新しいことばが出てくる中で、一般的ではないが、それらを使わなければ状況がうまく表現できない場合や、日本語に置き換えられないようなケースでは、文字で解説を加えるなど、わかりやすい表現になるよう心がけている。外来語として一般的であるか、番組内で使用して問題が無いかなど、基準を設けて番組制作を行っている。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年6月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

6月のNHK中央放送番組審議会は、17日（月）、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、紀の国スペシャル「私たちがふるさとを守る～釜石で過ごした3日間～」について説明があり、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、7月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長 福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長 岸本 葉子（エッセイスト）
委員 青柳 正規（国立西洋美術館館長）
大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
北城 恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
紫 舟（書家）
龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
田中ウヰェ京（（株）MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<紀の国スペシャル「私たちがふるさとを守る～釜石で過ごした3日間～」

（総合・和歌山県域 2月9日（土）放送）について>

- 若い人は希望だと思った。和歌山県田辺市の高雄中学校の2年生たちが岩手県釜石市に行ったということだが、学校の規模からすると2年生が全員行ったと考えてよいのか。

（NHK側）

学校から希望者を募り、一部の17人が行った。

- 中学生は、津波の時は他人にかまわず一人でも逃げろという“津波てんでんこ”の考えを大切に感じている一方で、危険を冒してでも人を助けたいという思いも持っていた。そんな中で実際に釜石を訪れた際に、震災当時は中学生で防災委員のリーダーだった女子高校生から「助けたい気持ちを大切にすると同時に、やはり自分の命を守らないといけない」という話があったのが印象的だった。中学生たちが実際に釜石を訪ね、多くのことを学び、これから何かをやっていこうとしている姿勢には胸を打たれるものがあった。

番組の最後に、女子中学生が「最初は津波が来ると聞いても怖いと思うだけで逃げようとか何も考えていなかったが、ここまで考えられるようになったのはすごい成長だと思う」という言葉にも感動するものがあった。これからいろいろなことに取り組んでくれるのではないかと思う。今後、震災を風化させないためにも、1年、2年たったときに中学生たちがどうなっていくのかをぜひ見せてほしい。

- 非常にすばらしい番組だった。和歌山放送局が制作した番組ということだが、このような番組をこれからもどんどん発信してほしい。中学生の防災教育や、防災意識を高めるルポルタージュとして淡々と伝えていたが、中学生たちが気づいていく真摯な姿は感動的でした。

自分の命を守りながら弱い立場の人の命も助けられるかという疑問から、みんなが助かる避難方法を考えるべきだとステップアップし、最後は、自分ひとりで逃げられる力を地域みんなが持てるようにしたいと答えがだんだん進化していた。

釜石の女子高校生が、階段をあと2段のぼれなくて死んでしまったお年寄りがいたという話をしていたが、それに対して女子中学生が目をカッと見開いて、非常に真剣に聞いていた表情に感動した。中学生たちが感じたことが伝わってくる番組だった。これからもさまざまな観点から、地域発の番組を放送してほしい。

- 中学生たちが泊まった旅館のおかみさんの話を聞いて心が打たれるものがあった。誰が誰に向かって話をするのかという設定がよかったのだと思う。もし旅館のおかみさんがインタビュアーと話をしていたら、中学生に話していたような真心のこもったことばを引き出すことはできなかったのではないか。旅館のおかみさんが中学生にもわかるように一生懸命に思いを込めて語った、これからの時代を背負う人たちに残したことばだからこそ、多くの人たちの心を引きつけた番組になったのだと思う。

- 釜石を訪れた田辺の中学生は2年生ということだが、このようにまっとうな問題意識と倫理観、柔軟な判断力があることに驚かされた。

この番組は中学生の視点で一貫して描かれており、話をしてくれる釜石の旅館のおかみさんや高校生も、田辺の中学生に話しかけるような形で描かれていた。このようなシンプルな構成がよかったのではないかと思う。

中学生たちは釜石を訪れることで何かをつかみ、それがそのまま問題の核心に届くであろうと番組制作者が考えたとすれば、慧眼（けいがん）だったと思う。中学生たちが今後どのようなことに挑戦するのも知りたいと感じた。

- 私も大変すばらしい番組だと思った。番組を見ている中学生にテレビでしか表現のできない疑似体験を与えてくれるのではないか。

初めはあまり問題意識がなく、津波の映像を見ても自分たちに関係あるものとして捉えることができなかつた中学生たちが、実際に釜石を訪れて現地の人たちと話すことでいろいろな気付きが生まれた。中学生の気付きは非常に大きく、この気付きは大人にも小さい子どもにも伝わるもので、番組で中学生を取り上げたことは非常によかったと思う。津波の映像だけを見せるのではなく、中学生たちが避難訓練の必要性や、もっと逃げやすい場所を作らなければならないと感じ、自らいろいろなことを考えたということ、和歌山以外の中学生に伝えることは意義のあることだと思ふ。この番組は全国の中学生たちにも見せる価値があり、中学校の授業でも活用してほしいと感じた。ぜひ、多くの子どもたちに見てもらいたいと思う。

- 東日本大震災の被害を実際に受けた釜石の高校生が、南海トラフの巨大地震が起きたら被害を受ける可能性がある田辺の中学生たちに伝えたという、大げさにいえば民族としての体現の伝達という大構えの構造がよかったと思う。

高校生や大学生ではなく、中学生を取り上げたことによって、震災当時は中学生だった釜石の高校生たちがどうやって生き延びたのか、田辺の中学生たちがそれをどう受け止めたのかなど、同年代どうしてしか出てこないようなニュアンスや交流があつてよかったと思う。

一般の人々を番組で取り上げる際には、話の中心になる人物を置いたほうが描きやすいと思うが、この番組では中学生の子どもたちに焦点をあてており、番組を制作するうえで苦労した点などはあつたか。

(NHK側)

当初は、釜石を訪れた3日間だけに焦点をあてた番組とは考えていなかった。ディレクターは全国放送の「シンサイミライ学校」も制作しており、田辺市の中学校で、群馬大学大学院の片田敏孝教授の教えのもと、避難訓練などの活動をする中学生たちを常々撮影していた。そういった中で、自分た

ちの中学校よりも海に近いところにある幼稚園の園児たちを救いに行くという、中学生たちにとって難しい避難訓練を行った際に、このような避難訓練を行ったからには、災害時に幼稚園児たちを助けに行きたいと発言した男子中学生がいて、「紀の国スペシャル」では焦点を当てることにした。このように、避難訓練の中で問題意識をディレクターに語った男女2人の中学生を中心に、釜石を訪れることでどのように考えが変わるのか、どのような発言をするのかを見ていくことにした。

この番組で発言している中学生のことばはすごいと思う。自分の町を自分たちがどう守るか必死に考え、3日間だけでなく、もっと長い期間考えていることば1つ1つに重みがあり、多くの方々に知ってもらいたいと思って取り上げた。

- 学び合いの姿が見られ、東日本大震災という悲劇を未来につなげる意味でもすばらしく、志はよい番組だと思った。中学生たちが釜石で見学し、話を聞いて意識が変わっていく様子が描かれていたが、主体的な行動を起こすところまでつながっていなかったことは惜しいと感じた。旅館の部屋で女子中学生たちが語り合う場面で、「避難経路に手すりは無理でも、ロープがあるだけでも違う。設置できるなら、ロープだけでも許可をもらってつけたい」といった話をしていたが、「でも難しい」という形で議論が終わってしまった。これは非常にチャンスであり、和歌山に戻ってから、例えばなぜロープを設置しないのかを市議会議員に聞きに行ってみたり、自分たちで要望書を出してみるなど、目に見える形で成果につなげて、中学生が町づくりの主体になれるのではと感じた。

今後このようなドキュメンタリーは制作を続けてほしい。中学生たちがどのような行動を取るようになったかを追いかけることで、さらに人々に感銘を与えるものが提示できるのではないか。大人目線ではなく、中学生目線でありのままに撮影しても、撮ろうとしているものの尊さは損なわれないと思う。ぜひシリーズとして番組を制作し、中学生たちがどう主体的に踏み込んで行動を起こしていくかというところまで迫ってもらいたい。

(NHK側)

避難経路にロープを設置する件は嘆願書を出そうという話はあるが、まだ実現されていない。今後も取材を続けていけたらと思っている。

- 中学2年生の息子と一緒に見たが、すばらしい番組だった。最初に片田教授が田辺の中学校で「ちゃんと逃げる自分をどう作っていくか」と話していた言葉が非常に印象的であり、この番組の趣旨であると息子に話しながら番組を見た。しかし、最後に息子は、どうしたら他の人たちを助けられるかという方向に考えが行った。これはとてもよいことだが、母としては複雑だった。

自分だけが逃げるということの一番つらいところは、生き残ったことに苦しみ、それでも自分が生きなければいけないということであり、逃げるということは、現実には心理的にも社会的にもさまざまな大変な思いがある。その思いを当事者は言葉で伝えるが、生き残ったからこそ伝えられるつらい言葉だ。現実には助けられなかった人がたくさんいると思う。この番組はすばらしい番組だが、逃げるということは難しいことだとも思い、なおさら現実の、痛いところを私たちはもっと知らなければいけないと感じた。

- 素直に感動させられる番組だった。深い問いかけはもともと答えのあるものではない。避難訓練の場面で幼稚園児を探しにいくと言った中学生が出てくるが、その問題発見までの過程が断片的であり、そこに行き着くまでのプロセスをもっと知りたいと思った。この問いかけはNHKや学校が設定したわけではなく、訓練の当事者である中学生の中で芽生え、議論も行われたことで生まれてきたものだ。釜石に行く前からあった問題意識が、和歌山に戻ってきてどのようにつながっていくのか。番組として、釜石を訪れた3日間を切り取ることは1つの見せ方だと思うが、前後がもっとわかるように工夫すると、その深みが番組を見る側にも理解できたのではないかと思った。

- 厳しい意見もあったが、全般的には感動的な番組であり、テレビの力をあらためて感じる場所もあった。教育的要素や教訓が詰まっているだけでなく、心に染みる、視聴者の心情への到達度が高い番組である。表情豊かな中学生にスポットを当て、成長していく様子を見せたこともよかったのではないか。女子中学生が、お年寄りが逃げるときには助けが必要であることに気づき、最後は自分でも成長したというコメントをしていたあたりはうまくフォローできていたと思った。

私は2週間くらい前に宮城県の被災地に行ったが、南海トラフの巨大地震を想定して、視察に来る人が非常に多くなっている。南海トラフの巨大地震による被害が想定されている地域が広いことを考えると、この番組は多くの人に訴える報道番組としてもレベルが非常に高いのではないかと感じた。その後の中学生たちも見てみたいという気がする。

- すばらしい番組だと思った。中学生という、10代前半の子どもに自分の命か他

人の命かという選択を迫ることは、私たちは厳しい国土に住んでいるとあらためて感じさせる。彼らの葛藤が愛他精神か、“津波てんでんこ”かという間で続くが、二者択一を迫るような葛藤から抜け出るような契機が、番組の中に中学生自身の答えとしていくつかあったと思う。特に重要な提言だと思ったことは、避難経路の整備であり、津波避難タワーの建造といったことではなく、避難経路に手すりやロープを付けるだけでも助かる人が増えるということである。防災教育や避難訓練という人々の行動や心というソフト面だけで問題解決をしようとせず、設備の充実というハード面の両方に行かなければならないと感じた。

自分の感想と番組の終わり方を照らし合わせると、この番組は訴える力はあるが、もう少し普遍化への道筋をつけるならば、この終わり方でよいのかという迷いがある。心情への到達度が高い番組であり、中学生たちの成長も著しいので、自己完結的に終わっている印象もなくなかった。

中学生たちがここまでの答えを見出したが、それを県内のほかの地域に広めるにはどうしたらよいのか、さらに全国発信するのであれば、和歌山県外にはどうすれば届くか、空間的にどう敷延するかという問題があるが、時間軸の上でどう敷延していくかがこの番組では見えなかった。番組の終わり方はあまり自己完結しないで、どこか開かれた方向性が見えるような終わり方だと、より発信力の高い番組になったのではないかと感じた。

- 逃げる事が番組のテーマになっているところはよかったが、最終的に私の心には引っかかりが残った。私たちは常に番組のジャンルを考えるが、この番組が教育番組だとすると、そのメインテーマが逃げることでよいのかという感じがした。人間が生きていくときの最終的なテーマはチャレンジであって、逃げで全うできることはないと思う。この番組は決してそうになっているとは思わないが、いかに逃げるかが中心になっているというように受けとめることもできてしまう。

わたしが子どもの頃は戦時中であり、逃げる事が次の動作の始まりというような教育を受けた。敵機襲来の際にはまずは逃げ、防火用水を使って被災を食い止めたり、けが人を救助するなど、次の行動を考えることを教え込まれた。大人になってからも、自然災害などの際に、逃げる事よりも積極的に立ち向かって、どう対応するかということがわたしの主題になっていた。もしこの番組が教育番組であるとするならば、最終的にとにかく逃げればよいという印象が残りすぎると問題ではないかと思う。逃げる事はあるが攻めなければ最後は勝てないのであり、そういう点がどうしても引っかかる場所である。

こういう対応はもっと主体的にできないかという提言もあったが、そういう面で番組がもう少し切り込んでいけば全体のバランスがよかったと思う。

(NHK側)

中学生たちの取り組みはこの番組以前からも続いており、これからも続いていく。地元局としてこれからも追いかけていければと思っている。

津波に対する心構えや、逃げるということは次の動作への始まりといったご意見はたいへん参考になった。和歌山局内でも共有していきたい。

- この番組は全国放送したのか。

(NHK側)

6月19日(水)の深夜2時15分から総合テレビで全国放送する予定である。

- その時間は中学生が見ないのではないか。中学生が見られる時間帯での放送を考えてほしい。

(NHK側)

皆さまから高い評価や中学生に見せたいという意見をいただいたので、そのような時間帯での放送も考えたい。

<放送番組一般について>

- 6月2日(日)のNHKスペシャル「密着 エネルギー争奪戦～日本の逆襲～」は、「シェール革命」について取り上げており、今後どのように進んでいくかを興味深く伝えていた。原子力を推進していこうという国も多くあり、日本も原子力発電を輸出しようと考えているが、一方で安価なシェールガスによってエネルギーコストが下がれば、原子力の必要性が低くなるのではないかという議論もある。原子力を推進している国と抑制している国のそれぞれの理由などをNHKらしく淡々と取材し、番組で取り上げてほしい。
- 6月9日(日)のNHKスペシャル 未解決事件File.03「尼崎殺人死体遺棄事件」について、この事件は非常に入り組んでいて、考えるのも見るのも嫌だという印象を持っていたが、見ているうちに引き込まれた。この「未解決事件」では、今までに「グリコ・森永事件」などを放送しているが、これまでの番組と比べ

てもよく取材しており、相当よい番組になっていた。元被告は自殺したが、近所に住んでいた人や留置場で一緒だった人によくあれだけの証言を取れたと思うぐらい取材していた。本来は証言をつないで事実を浮かび上がらせるのが順当な方法だと思うが、それだけでは事件の全容が伝わらないので、再現ドラマを使っていた。高村薫さんは突っ込んだ分析をするのではなく、シンプルに同伴者としての役割を果たしていた。この事件の本質の1つとして、「彼女は家族が欲しかったのではないか」という元被告と留置場で一緒だった人の証言を掘り起こしており、検証力に感心した。

- NHKスペシャル 未解決事件 F i l e . 0 3 「尼崎殺人死体遺棄事件」は、見るのが嫌だという気持ちと見たいという気持ちの両方の思いで番組を見た。元被告が自殺してしまったことで、事件の闇は深いままであることは間違いない。元被告がさまざまな場所で事件を起こしたことで浮かび上がった社会のぜい弱さや警察の対応の鈍さ、地域社会はどうして察知する能力がないのだろうか、家族とはかくももろいものなのかと、社会についてよく考えさせる構成になっていた。再現ドラマを使った演出では、関西弁でのやり取りなどからリアルさが伝わり、事件のイメージ作りの一助となっていた。元被告と留置場で一緒になった人へのインタビューや、事件の現場を訪れるなど、深く取材していた。
- NHKスペシャル 未解決事件 F i l e . 0 3 「尼崎殺人死体遺棄事件」は、もう少し突っ込めたのではないかと思った。なぜあのような事件が起きたのかについて、家族という問題のあり方から現代の家族の危うさが裏側から照射されたような印象を受けたが、その闇に少しでも迫ってほしかった。
- 6月16日(日)のNHKスペシャル「中国激動 怒れる民をどう収めるか～密着紛争仲裁請負人～」は、中国の“紛争仲裁請負人”を取り上げていたが、中国の各地で開発に伴って発生した住民暴動について、住民と開発業者の乱闘など実際に暴動が起きている場面も伝えており、大変興味深かった。中国政府がこのような番組を制作することをよく許したと思った。中国政府は暴動が起きることを抑えるためにさまざまな配慮をしているが、番組では民衆の生活が脅かされている実態を取り上げていた。「NHKスペシャル」や「クローズアップ現代」は、NHKらしいテーマを多く取り上げており、大変すばらしいと思う。
- 「NHKスペシャル」は調査報道という側面を持っている番組だと思う。世界的に共通する問題だが、調査報道は新聞社にとって重要であるにもかかわらず、体力がなくなって今は弱くなっている。日本のジャーナリズムの中ではNHKが一番活

発に調査報道を行っているのではないか。調査報道は分析まではすることができるが、その後の政策提言までは達しない。例えば、日本の少子化の問題は深刻な問題である。スウェーデンやそれにならったフランスでは、人口減少に対して若年労働力の確保に取り組んでいる。日本でも若年労働力を確保することで、大きな経済基盤を作ることができる。これは政治問題としてではなく、社会問題として指摘して解決していかなければならない。そして、これを提言していけるのは日本ではパワーがあるNHKだけだと思う。期待する。

- 4月5日（金）のかんさい熱視線「“虚偽自白”取調室で何が」で、取り調べの様子を撮影した映像が使われていた。これに関連して、大阪地方検察庁は大阪弁護士会に所属弁護士の懲戒請求を出した。これは取り調べの可視化にも影響を及ぼすものであり、大阪地検が懲戒請求したのはおかしいのではないかと思う。映像は既に無罪が確定している裁判についての取り調べの様子であり、その後の裁判に影響を与えるものではない。この番組は近畿ブロックでのみ放送されているので、大阪弁護士会の結論などが出れば、全国放送をしてもよいと思う。その後の経過と、NHKはこの問題について今後どのように対応していくのか。

（NHK側）

かんさい熱視線「“虚偽自白”取調室で何が」では、取り調べの様子を撮影した映像を使用した。刑事訴訟法では検察官が開示した証拠の目的外使用を禁じており、「弁護士がこの映像を提供したことはそれに違反する」として、大阪地検が大阪弁護士会に所属弁護士の懲戒請求をしたという事例である。NHKとしては、映像をどこから入手したのかは申し上げられないが、映像は法廷ですでに公開されたもので、関係者からの了解も得ており、誰かわからないように音声を変えるなど配慮した上で、番組に必要と判断して使用することにした。取り調べの可視化は重要な問題であり、全国放送で取り上げる準備をしている。さらに取材を重ね、法務省で行われている議論も踏まえて、一步進んだ内容にする必要があると考えている。

- 4月28日（日）の「NHKニュース7」では、主権回復記念式典と沖縄で行われた抗議大会を取り上げていたが、それぞれを伝える時間などのバランスが取れていなかったのではないか。式典を伝える時間より、抗議大会を伝えている時間のほうがかなり長く感じられた。戦後のGHQによる占領や憲法制定などがあつた中で、

主権を回復したことの意味合いなどの説明がないため、深く掘り下げられていないように感じた。

(NHK側)

4月28日に主権回復記念式典が行われたが、沖縄からは反発の声があがっており、ニュースで取り上げる際には式典と沖縄の反応の両方を伝えなければならないと当初から考えていた。当日の「NHKニュース7」では、まず主権回復記念式典の様子を伝え、続いて沖縄県民の声や抗議大会について伝え、最後に再び式典での安倍首相の発言を紹介したが、時間も含めてバランスは取れていたと考えている。戦後の歴史にもう少し踏み込んだコメントがあったほうがよかったかどうかは議論のあるところだと思う。

- 現行の刑事訴訟法は戦後に定められたものである。GHQの影響を受けて制定されたが、ドイツの刑事訴訟法をもとに作られていたそれまでの日本の刑事訴訟法がかなり守られて作られたことなど、歴史的な継続性も伝えることによって、もっと深みが出たと思う。
- 5月31日(金)の首都圏スペシャル「逆境を生き抜け～急増“チャイルド・ブア” 闘う現場～」は、東京都北区立の中学校で不登校の生徒が通う特別な教室に密着しており、非常に繊細な問題によくあそこまで密着できたと思う。教室の運営をすべて任されている銭湯店主や教室に通っている生徒たちのヒューマンなドラマにもなっていた。学校の先生も一瞬だけ顔を出すか、教師が子どもたちと向き合っていく学校社会になっていることが分かった。学校が家族の事情に踏み込むのが難しいというコメントも出てくるが、今後もボランティアに依存し続けるかどうかということではなく、学校社会が直面しているもっと基本的な問題が見えている。非常によい番組であるが故に、制度や政策の面につながるような掘り下げ方をしてほしかったという印象を受けた。
- 6月5日(水)と12日(水)の「探検バクモン」は、「“性”をめぐる大冒険」として、2週連続でセクシュアルマイノリティーについて取り上げていたが、性の問題の深さや幅広さに驚いた。6月のテーマとして“セクシュアルマイノリティー”を取り上げている「ハートネットTV」とコラボレーションしているのが興味深かった。また、「探検バクモン」の電車の中吊りポスターも、爆笑問題の2人が口紅を塗って写っている目を引く印象的なデザインだった。

- 6月8日(土)の週刊 ニュース深読み「今度こそ… 女性の活躍 実現のカギは？」は、日本社会では女性の活躍が難しいという現状について、待機児童の問題を交えながらわかりやすく説明していた。また、15日(土)の「年金は？住宅ローンは？ 金融市場に異変アリ！？」では、株価の乱高下が投資家の問題だけでなく、年金の運用を含めて多くの人に影響を与えていることや、株式市場がどのように構成されており、量的緩和とは何かをわかりやすく解説していた。スタジオ出演している専門家による説明もわかりやすく、よいキャスティングだと思った。
- 「サラメシ」は好きな番組であり、よく見ている。さまざまな人が、週末にはそれぞれどのように過ごしているのかということが気になるので、「サラメシ」のようなコンセプトで週末の生活を紹介する番組を作ってほしい。
- 大河ドラマ「八重の桜」の主人公の八重を“幕末のジャンヌ・ダルク”とうたっているが、理解ができない。ジャンヌ・ダルクはフランス軍として外敵イギリスから自国を救って戦ったが、裁判にかけられて処刑されたとされており、八重をジャンヌ・ダルクに照らし合わせるのは違うのではないか。そういう点からも「八重の桜」は大河ドラマとして1年間にわたって放送するのは無理があるのではないかと感じている。
- 連続テレビ小説「あまちゃん」は、私の周辺の人たちが非常に評価しており、「じぇじぇ」という方言がおもしろいと言っている。これから、“3.11”を描くことになると思うが、これまで放送してきた蓄積の上に、どのような形で“3.11”を描くのか、宮藤官九郎さん脚本のドラマが楽しみである。
- 今年度から「ららら♪クラシック」の放送時間が30分に短くなり、「クラシック音楽館」でNHK交響楽団などのコンサートを放送するようになったが、この編成はよいと思う。「ららら♪クラシック」は60分だと間延びしている印象だったが、30分で内容が凝縮されたと思う。しかし、ゲストはクラシックについて詳しくない人が来ているようで、もう少しクラシックについての会話ができるゲストにしたほうがいいのではないか。
- クラシックコンサートをノーカットで見ることができる「クラシック音楽館」が新設されたことはよいことである。4月21日(日)は、東京フィルハーモニー交響楽団特別演奏会の「グレの歌」をノーカットで紹介していた。画期的な取り組みであり、今後の放送も期待できると感じた。

- 「SWITCHインタビュー 達人達(たち)」は好きな番組でよく見るが、消化不良に感じることが多い。この番組の趣旨は“達人達が見ている景色、お見せします”、“仕事の極意について語り合う”とホームページに書かれているが、誰に向けて制作されているのかとを感じる時がある。達人たちの言葉は非常に深く、これを十分に引き出し理解するには、もう少し説明や解説が必要だと感じた。例えば、達人たちがどのような人物なのかを番組前半で紹介することで、その後の2人の対談から学び取れることがわかりやすくなると思う。さらに、「人生とは何ですか」「仕事とは何ですか」「自分は誰ですか」「極めるとはどういうことですか」といった、何か2人の共通の信念がわかるような質問をすることによって、達人たちの景色がもっと見えてくるのではないか。そうすることで、20代の視聴者はその信念が深くは理解できないからもっと知りたいと思うだろうし、40代の視聴者はもっとまとまって聞きたいと思うのではないか。

この番組にも当てはまるが、NHKの番組には作り手の自己満足を感じることもある。こう見るべきである、こう見なければいけないといった作り手側の気持ちが番組から見えてしまい、残念に感じることもある。

(NHK側)

「SWITCHインタビュー 達人達(たち)」は今年度から始まった番組である。わかりづらい部分やキーワードが出てきたときには、視聴者により深く理解してもらえよう、いただいた意見を制作現場に伝えたい。

- 「小林賢太郎テレビ」は録画して保存するほど、放送を楽しみにしている。めったにテレビに出演せず、劇場公演のチケットも手に入りづらいという小林さんのように、視聴者に新しさと刺激を与えてくれる人たちをこれからも取り上げていってほしい。
- 「FIFA コンフェデレーションズカップ 2013」が始まるので、6月15日(土)の「サタデースポーツ」では長い時間をかけて取り上げていた。この日はラグビーの日本代表が強化試合でウェールズ代表に初勝利を挙げる快挙を達成したという大きなニュースがあり、個人的にも放送を大変楽しみにしていたが、伝えた時間が短く、快挙達成の感動も伝わらなかった。以前にも指摘したが、NHKはラグビーの位置づけが低いのではないか。2019年にはラグビーのワールドカップが日本で開催される。ホスト国としてラグビーの日本代表を盛り上げるきっかけになるような試合だったが、ニュースでの取り上げ方は残念だった。

(NHK側)

6月15日(土)の「サンデースポーツ」ではラグビーも取り上げたが、「FIFA コンフェデレーションズカップ 2013」のニュースに比べて、取り上げ方が少なかった。制作現場にご意見は伝える。「FIFA コンフェデレーションズカップ 2013」は、NHKではBS1で全16試合を中継する予定である。

ラグビーのワールドカップは2019年は日本で開催するが、放送権の交渉についてはこれから行われることになっている。

○ NHKの番組は視聴者を手取り足取りいざなっており、きれいに作りすぎているのではないかというように感じられる。「BS世界のドキュメンタリー」は世界のテレビ局やプロダクションが制作したドキュメンタリーであり、ときに強すぎる刺激で訴える内容になっているが、後に記憶に残るのはこのような番組なのかもしれないと思える。結論をうまく作り込まないほうがよい場合もあるのではないかと感じた。

○ 6月14日に法制審議会新時代の刑事司法制度特別部会が開かれ、取り調べの可視化についての素案が公表された。素案では、捜査に著しい支障の生じる恐れがあるときは除外するといった、適用範囲が著しく狭められる可能性が出てきており、これまでの議論から大きく後退しているように思われる。司法の話は国民にはわかりにくい部分もあるが、重要なテーマなのでぜひこのタイミングで全国放送で取り上げてほしい。

NHKはニュースで幼稚園の無償化を伝えていたが、これは複雑な問題である。平成26年度にまずは5歳児から実施するとしているが、それでも300億円の費用がかかる。300億円とは学童保育の全予算と同じだが、学童保育も足りなくて困っている。これは待機児童問題の小学生版と言える。小学校では保育園ほど長く預かってもらえないという問題など、インフラが欠如している状態にもかかわらず、先に幼稚園の負担を軽減しようというちぐはぐな政策を行おうとしている。無償化というよいことのように聞こえるが、優先順位が違わないのではないかと感じる。インフラを整えて、その後で負担を軽減するのが筋だと思うので、限られた財源をきちんと使うべく、議論の場を提供するような報道をしてもらいたい。

また、育児・介護休業法が注目されているが、育休給付金は特別養子縁組などをした場合には支給されない。実子とそうでない子の差別のような状況は意図してい

ないと思うが、法律のある種の欠陥が発生している状況がある。そもそも日本は特別養子縁組の数が少なく、新しい愛ある家庭を届けられるような仕組みのインフラ整備をしなければいけない中で、育休給付金が実子にしか出されない状況を放置してはいけないと思う。育休給付金にはさまざまな問題があるので、欠点をきちんと伝えたいうえで、育児・介護休業法をよくするための提言をしてもらいたい。

- TPP＝環太平洋パートナーシップ協定は7月23日から日本が交渉に参加する予定である。これまでと同様、国民全般に関わるさまざまな広範な課題が交渉事項になるが、一方で交渉はきわめて機密性や秘密性が高く、情報が伝わりづらい。そういった中で、政府高官がある意図を持ってリークしたことが報道されることも考えられる。日本だけでなく交渉の相手国も含めた、さまざまな業界の情報や観点などを高確度に情報収集して報道しないと、どのような交渉や議論がされているのかが正しく伝わらなくなってしまう。これから交渉が本格化する中で、このようなことに配慮して報道してほしい。

- 再放送はどのようなルールで編成しているのか。ドラマでは再放送がある場合とない場合がある。第1回だけを再放送しているケースもあるが、NHKオンデマンドでの視聴に誘導しているのか。

スペシャル時代劇「大岡越前」は、ホームページでは「毎週土曜 午後8時～」とあるが、番組を視聴しようとする放送されていないことがあり、放送予定がわかりづらい。また、本放送から時間が空いて再放送がある場合は、ホームページで随時チェックしないと見落とししてしまう。新聞のテレビ欄だけを頼りにしている人は見落とししてしまうのではないか。

(NHK側)

再放送については、「大河ドラマ」や「連続テレビ小説」など、定時で再放送している番組もあるが、すべてのドラマを再放送しているわけではない。放送後に評価が高かったものや再放送の要望が多かったものは随時再放送を決めている。第2回以降の放送を前に、第1回を再放送するといった、戦略的な編成をしている場合もある。

スペシャル時代劇「大岡越前」は変則的な編成になっている。3月から4月中旬にかけて3回、6月に3回、冬に3回の全9回の放送を予定している。6月の放送から、次回放送する冬まで期間が空くので、これまで放送した6回分をまとめて見やすい時間に再放送することを考えたい。ホームペー

ジの「毎週土曜」という表現については、それぞれの期間の3回ずつの放送は3週連続で土曜日に放送しているので、その3週間については毎週ということになる。

- わかりやすい表現にしてほしい。

(NHK側)

総合テレビの「ドラマ10」と「土曜ドラマ」は深夜に定時の再放送枠を設けている。緊急報道などで急きょ放送を休止する場合には、次回の放送までに再放送する必要があるため、定時以外の時間に再放送する場合もある。変更になった場合は、決まりしだい速やかにホームページで放送日時を案内している。

スペシャル時代劇「大岡越前」は、ホームページの放送日時の表現がわかりづらいので検討したい。

今後も大きな反響をいただいたドラマは随時再放送していきたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年5月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

5月のNHK中央放送番組審議会は、20日（月）、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、放送番組の種別および種別ごとの放送時間（平成24年10月～25年3月分）について報告があった。続いて、「総合診療医 ドクターG」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、6月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長 福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長 岸本 葉子（エッセイスト）
委員 大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
北城 恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
倉重 篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
紫 舟（書家）
平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
田中ウヰェ京（（株）MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<放送番組の種別および種別ごとの放送時間について

（平成24年10月～25年3月分）>

- それぞれの番組について、いろいろな調査をされていると思うが、視聴者を調査するとき番組の視聴率、公平性、中立性、個々の番組のよさについての質問に加え、視聴者はどの分野の比率を増やしてほしいと思っているかを聞いたほうがよいのではないか。視聴者に十分な公共放送としてのサービスを提供しているかどうか

に対する視聴者の満足度を調べると、比率が適切であるかどうかの意見が出せると
思う。

- NHKは視聴者の声をふだんからいろいろな形で聞いているが、この比率を決める過程ですでに視聴者から入っている意向がフィードバックされているか。

(NHK側)

視聴についての調査は個別の番組について、NHK放送文化研究所で年2回、1週間の期間でかなり綿密な調査を行っており、こういったジャンルに視聴者の要求が強いか、捉えられる調査も含まれている。

- どういうものが重要かという調査よりも、もっと比率を増やしてほしいのはどこの分野かを調べると、よりの確な判断ができるのではないか。

(NHK側)

比率については、免許上の条件としてあらかじめ決められているところがある。それを前提にして視聴者の意向も踏まえた比率をどうしたらよいかを考えている。

- 制作現場では、どのように活用しているのか。

(NHK側)

種別の調和原則があり、NHKが設定している目標値をできるだけ上回るようにしている。一方で、例えば国会中継はNHKとしての役割でもあるので、調和原則に合わせるために放送しないというわけにはいかない。国会中継の多い時期やその年は、結果として報道番組の比率が高くなるといったことになるが、各ジャンルは、定められた比率に基づいた編成をしようと心がけている。

(NHK側)

この種別の報告については、NHKだけでなく、民放もそれぞれの審議機関に報告している。もともとは民放の通販番組のボリュームが増えたのを受け、放送事業者としてバランスを取るためということが発端だが、NHKも民放と同じく

報告している。

<総合診療医 ドクターG「おなかが痛む」(総合 4月19日(金)放送)について>

- 以前に比べると洗練され、よくなっていると思う。番組が作られた最初のころに「こういった番組はだれが見るのだろうか」と思ったが、今は十分に楽しめる番組になっている。「人間の体はそうなっているのか」とわかってもらえる意味で、教養、教育番組のようでありながら、娯楽番組でもあり、なかなか上手に作られている。

1月15日(火)の視点・論点「総合診療医とプライマリケア」の中で、イギリスで総合診療医、家庭医を行っていた医師が話をしていた。イギリスでは総合診療医は家庭医と同じ意味合いで、内科も、外科も、産婦人科も全部取り扱う。国ができるだけ医療費を少なくするために、そういう人たちが診察してから、専門医が必要なときにはそちらに移ることになっている。日本でも医師は最初に総合診療医を目指さないといけないことになっていて、特に小児科は全部を総合的にみられるようになってからスペシャリストになる過程がある。この番組を見て興味を持ってもらえれば、医学界にとってもよいことだと思う。

- 番組のスピードが少しゆっくりで、強弱のない感じがした。女性の医師が登場したときに、コメンテーターが「お美しいですね」と言っていたが、医師としての適格性がとても鮮やかに表れている人が登場したのに、なぜ美しいといった方向に行ってしまうのかと思った。また、司会者が研修医に対して「ちょっと患者っぽいですね」というコメントをされていて、研修医の人は反応のしようがないように見えた。生放送ならばしかたがないが、収録なのにその部分を使った理由はなんだろうと思った。

一方で、ケーススタディーが大好きなので入り込むところもあった。スポーツ選手のメンタルトレーニングでも、ケーススタディーにこそ本物の迫力がある。本当の事実はそこにしかないのだから、事実の迫力はこの番組の根底にあり、ひきつけられる感じがした。母親的な立場、経営者の立場としても、診察のプロセスには思わずメモを取った。幅広く応用できるような要素が入っていて、おもしろいだけでなく、勉強になった。

しかし、この番組を続けて見るかどうかと考えたときに、見ないと思った。たとえば、大学の必修講義だったらすばらしいが、選択講義だったらとらないという感じと同じだ。よい番組だがお得感がない。つまらないのではないのが、よいだけの番組だ。自分事になるようなところへ誘導してくれると見たくなるのではないか。

(NHK側)

スピードがゆっくりということについては、ご指摘を参考にしたい。「美しい」「患者っぽい」という表現部分については、エンターテインメントの要素として、そこは許容していただけたらと考えた。

見続けたくない、得になると感じる情報がないというご意見をいただいたことはとても残念だ。番組で、最終的に挙がる病名はだれも聞いたことのないようなものになることもあるが、途中に出てくる病名は身近なものもある。今回の腎盂腎炎（じんうじんえん）は相当数の方が患っている。若くて、病気の心配をあまりしていない人にも、どういう兆候があればどういう病気の可能性があるか、ということを知ることでお得感を持ってもらえればと思っている。少しでも見たいと思ってもらえるように工夫していく。

- 「ためしてガッテン」などは、治療法や注意点を取り上げている。3人の研修医がクイズ番組のようにいろいろ推理をしていくプロセスはおもしろいが、終わったときに「こういう症例のときはこういう病院に行きなさい」「先生にはこのように話をしなさい」といった、患者にとって有益な情報を入れたほうがよいと思う。また、いまの司会者は番組に付加価値をつけていないと思う。発言でおもしろかった部分もなく、純粹にクイズ的に話をするだけでよかったのではないか。

出演していた金森真紀先生は、研修医を育てるすばらしい医師だと思う。質問のプロセス、話の聞き方を通して、こうやって研修医は育つのだと感じた。研修医を育てている先生がいることの意義がよくわかった。

「ドクターG」という呼び名が「総合診療医」として視聴者に理解されているかにもよるが、タイトル表示の「総合診療医」が、小さくて見えにくい。また、患者さんの名前に、仮名と書いていなかったのが実名かと思ってしまった。再現映像で、医師が患者に質問をしていたが、ストーリーからは金森先生が聞いているように見え、別の人が行っていることがわかりにくかった。番組としてはたいへんおもしろかったので、引き続き見たいと思った。

(NHK側)

患者として有益な情報をどのように紹介するか、一生懸命に考えている。「ためしてガッテン」とは異なるアプローチで、医師の頭の中を見るような、推理の過程から医療情報を提供

することにこだわっている。

司会者とゲストの位置づけについては、医師以外の方がスタジオにすることで、医師が一般の人にわかりやすいように話し方を変えてくれる効果を期待している。医師だけでは、専門用語が飛び交い、解説番組になってしまいかねない。「総合診療医」の文字が小さくて見えないという指摘については、今後検討する。再現VTRの中の女性の医師の声は、ドラマの部分なので声優にお願いしている。演出の1つとしてご理解をいただきたい。

- エンターテインメント性がもうひとつしっくりきていない。再現ドラマ、犯人当てクイズであればそれは1つの完結したストーリーで、素人のわれわれもある種のワクワク感を共有できる。しかし、この番組は擬似的な参加はまず難しい。また、医療現場でのやりとりはとても勉強になったが、かといって研修医が早押しクイズ風に当てた、外れたというところを楽しむものでもなく、その意味合いがすこし分かりにくい。犯人当てクイズとは違って、入院したときの病名が途中で出てくる。金森先生が自分のカンファレンスの再現ということで行っているので、行き着くまでに小出しをするので緊張感が薄まる感じがする。

(NHK側)

クイズ番組と医療紹介番組とのバランスをとりながら制作している。クイズ番組に特化しないのは、番組で取り上げた病気を患っている患者さんがおられるからだ。病名当てをクイズのような形で楽しむような演出は適さず、病気に対しては真摯(しんし)に向き合わなければいけないと考えている。娯楽的なおもしろさの追求はしていない。また、病名が途中で出てくるのは後出しじゃんけんみたいな印象を持たれるかもしれないが、医師と相談しながら番組を作っている。中途半端な感じは現場でも感じているところもあるので、今後の課題だと認識している。

- 内臓疾患で入院したこともあって、この番組にはグイグイ引き込まれた。よい番組だと思うので、ぜひ続けてもらいたい。個人的な経験だが、医師とのコミュニケーションは少なく、医師によってはほとんど患者さんと向き合わないでパソコンを打っていたり、尿検査、血液検査、放射線検査などの検査をしてからでないと会話しないうようなこともある。また、自分の想像とは病気の原因が違うこともあ

る。背中が痛いので筋肉痛と思っていたら、実は内臓が悪かったということもある。病名や病気の原因に行き着くにはいろいろな角度から分析し、会話をしないといけないというのはまさに番組のとおりだ。プロセスをこういった手法で見せることはよい。一方で、今回のゲストは恥骨骨折をしたことがあるとコメントしていたが、あまり関係がなく、発言も少なかった。病気の経験を踏まえ、患者の立場に立って意見が言える人をキャスティングするなど、ゲストの役割を明確にして生かしていく方がよいのではないか。そうでなければゲストは不必要だと思う。

(NHK側)

症例が決まっても、ゲストは収録の1週間前まで決まらないこともある。ゲスト2人のうち1人は関連する何らかの病気を経験した人を探している。もう1人は推理を楽しんで、専門的な知識はなくても旺盛な好奇心で食いついてくれる方を選んでいく。しかし、必ずしもタレント、文化人は自分の病気を公表しているわけでもなく、また、この人がよいと思っても本人にとっては病気のことは関係ないと断られることもある。

- とてもまじめな番組だと思う。テレビには、視聴者はドラマやミステリーなど、興味をそそられるものをどうしても要求する。この番組を「ベン・ケーシー」と重ね合わせて見ようとする、ドラマ性が薄く、背景が平凡に見えてしまう。平凡な中で、日々の医療は行われている。医師同士の話していることがこちらにはまったくわからないことや、カルテに書いてあることがまったくわからないことなどをうまく解説し、医者と患者との見えない壁みたいなものを突き破るといのが番組の役割という印象を受けた。1、2年生の研修医でも、難しい勉強をして知識がいっぱい詰まっておき、物事をよく知っているという雰囲気を引き出してはどうか。また、指導に当たった人はベテランなので、いろいろなことを経験していることが伝わると視聴者はなるほどと感心する。

こういった番組は海外でも例があるのか。

- 勉強になり、とてもよかった。自分の健康を守るためには、日ごろから小さなシグナルを大切に、医師にきちんと伝えることが必要だとあらためて感じた。しかし、ほかの委員から今後は見ないかもしれないという発言があったが、私も同感だと思った。とてもおもしろかったが、次回を見たいと思わないのは、番組を見ることによって自分の生活がよくなるなどのメリットやお得感がないからかもしれない。たとえば、精神疾患や発達障害などの例をテーマとして織り交ぜて、取り上げ

てみてはどうか。そういうことであれば、自分が当事者になったときにこうすればよいという納得感が自分の生活に引きつけて考えられる。また、腹痛など、かなりポピュラーな病状だが、追ってみるとこういう問題があって、大きな病気を引き起こしてしまうといったことを取り上げると、自分の生活に生かせるかもしれないと思うのではないか。

- この番組を継続的に見てもらうためには、見た人が「このように話したらお医者さんに正しい診断をつけてもらえる」というその1点にかかっていると思う。医療の専門化が進んでいて、それに対して漠たる不安を市民・患者が持っていること、医療現場でのコミュニケーションがうまくいかない不全感を視聴者が持っていること、不定愁訴が増えていること、この3つの背景があって番組になっていると思う。視聴者が見て受け取るいちばんのものは何なのだろうという原点に戻り、どうして視聴者がそういうものを受け止めたがっているのだろうという背景に立ち戻ればよいのではないか。

(NHK側)

近い番組としてはアメリカに、医師が人間模様を織り交ぜながら診断していく「Dr. House」というドラマはあるが、NHKのこの番組のスタイルは世界でも例がなく、海外への番組フォーマット販売として、海外の放送局から興味を持っていただいている。

取り上げる症例は年配の例が多いが、20代の疾患の例も取り上げたことがある。さまざまな年齢の方を登場させることで、自分に引きつけて見てもらえるようにしたい。

<放送番組一般について>

- 5月5日(日)のNHKスペシャル「新生 歌舞伎座 檜(ひのき)舞台にかける男たち」は、俳優と歌舞伎座の両方を紹介していたが、49分間だったので突っ込みが足りないと感じる部分があり残念だった。

5月11日(土)の「SWITCHインタビュー 達人達(たち)」では隈研吾さんと林真理子さんが対談していた。最初に歌舞伎座の話があり、隈さんが、歌舞伎座の壁の色は取り壊し前に建物の塗装を剥がす作業の中で出てきた色で決めたという、とてもおもしろい話をしていました。これは「NHKスペシャル」には出てこない話だった。また、回り舞台も取り上げていたが、舞台に収まってどのように動

いているのかも見せてほしかった。

- 5月18日(土)、19日(日)のNHKスペシャル「病の起源」はとてもおもしろかった。高齢化社会になって、医療や健康への関心がずいぶん高まっていると思うが、それを受け止める形の番組になっている。人類進化700万年の宿命とあったが、700万年どころか、何億年も前のゾウリムシのような時代から人間まで語られていた。病気になったらどうしようというより、むしろ人生はあきらめが肝心と達観できる番組でおもしろかった。コンピュータグラフィックスを巧みに使っていることや、アフリカで狩猟採取の暮らしを続ける人たちから最先端の医療機関まで取材していて、説得力があった。
- 「探検バクモン」はいつもおもしろい場所を取り上げている。5月8日(水)、15日(水)は「紙のみぞ知るニッポン」と題して国立公文書館へ行っていた。大日本帝国憲法と日本国憲法の原本を見せていたが、2つの憲法が使っている紙も、歴史状況が違うことで、大きく違うことを知った。玉音放送の原稿も、最後の最後まで推敲されていたので時間がなく、紙を削って書き直していたことや、御璽(ぎょじ)もとても大きいものだということがわかった。デジタルになってしまうとわからなくなりそうな、訴えてくるものがありおもしろかった。また、いつも田中裕二さんはカメラを持っていてよく写しているが、あれは演出なのか。

(NHK側)

「探検バクモン」のカメラは番組の演出だ。爆笑問題の2人とも持っていて、2人の視点を生かすということで、ケース・バイ・ケースで使っている。

- 5月13日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「希望のリハビリ、ともに闘い抜く リハビリ医・酒向正春」は、手術をして治った後のリハビリに取り組む医師を取り上げていて興味深かった。
- 5月17日(金)の特報首都圏「グローバル社会を生きぬけ～“国際教育”最前線～」を見た。日本の教育システムそのものから抜け出そうとする動きをとらえていて、ひょっとすると何か大きく変わりつつあるのではないかと感じた。また、秋田県の国際教養大学の事例は興味深かった。一方で、この事例は番組前半の小学校時代から日本を抜け出そうとする流れと別の話ではないかとも感じた。同列に論じず、それぞれ別の番組としてももう少し深く突っ込む方が興味深く、むしろよかったのではないか。

- 5月6日(月)から8日(水)まで「ハートネットTV」で放送していた「シリーズ 子どもの虐待 どう救うのか?」を見た。虐待はテレビで取り上げにくい問題だと思うが、取り上げなくてはならない時代が来ている。毎週、虐待された児童が病院に運ばれてくる状況になっている。そういう中で、児童相談所の立ち位置や、現場の医者がバーンアウトしそうになっているなど、現状をきちんと取り上げてほしい。根底にあるお父さん、お母さんを取り巻く問題を取り上げてほしいと思う。生活保護については昔からいろいろ考えられてきた。虐待について考えられていたのは水面下であって、表で考えなければならない時代が来ていることをNHKがもう少し問題提起するべきだ。

- 新番組では「さんすう刑事ゼロ」「チョイス@病気になったとき」「先人たちの底力 知恵泉(ちえいず)」が特に光っていた。

- 松井秀喜さんの国民栄誉賞のセレモニーの前日の5月4日(土)に、BS1スペシャル「松井秀喜 メジャーリーグ全ホームラン」と「命かけ 闘う～松井秀喜 貫き通した野球道～」(BS1 後8:00～8:55)を続けて、興味深く見た。

- 5月11日(土)の「欽ちゃんの全国びっくり王!」(BSプレミアム 後7:30～8:59)は、たいへんおもしろく、気持ちよく見た。バラエティーの演出としては、スタジオにお笑いタレントやあまり専門性のない女性タレントがいて、VTRが流れているときに小窓で出演者の反応が映し出されるという、これまで必ずしもよいと思わなかった手法だったが、VTRがテーマ性のあるものを集めていることやよく取材されていること、スタジオの進行役にベテランの萩本欽一さんが配されていることで興味深く見る事ができた。全国にこんなすごい人がいるということ、 “クールジャパン” や “地方の力”、 “仕事の熟練” というたくさんのサブメッセージとともに伝えていて、その重層性に支えられていた部分も大きかった。同じような演出方法でもこうした見応えのある楽しく見られるバラエティーは成り立つのだと思った。

- 選挙番組がおもしろくないことの1つに選挙速報があると思う。もちろん不必要とは思わないが、いったいだれのためにやっているのかと思う。研ぎ澄まされた速さはそこまで必要性があるのか。そこまで正確な選挙速報を出すのであれば、開票しなくてもよいのではないか。最後はどちらが勝つのか盛り上がるところをまったく楽しむことができない。選挙をおもしろくないものにしてしているものの1つは開票速報だと思う。出口調査に全力を尽くすよりも、むしろ選挙の前までに選挙に興味

を持ってもらうことや、投票のアクションにつながるような番組に力を入れてもらいたい。若い人たちに投票することはどういうことなのか、自分たちの手で社会を変えることができるのかといった問いかけで、興味を喚起し、結果的に投票率の上昇につながるような番組を作ってほしい。

(NHK側)

投票前に番組やニュースで投票行動につながるような企画をいくつも用意している。また、今回初めてネット選挙が導入される。昨今はビッグデータの活用が進んでおり、そういうものも織り込んで特番を考えているので、期待していただきたい。開票速報をすることでおもしろくなくなるという指摘は確かにそういう部分があるかもしれないが、一方で早く知りたいという方もたくさんいる。現場では、速く正確にと必死に取り組んでいる。

- 「ストップ風疹」の取り組みはすばらしいと思う。現場のプロデューサー、ディレクターが関係部署と連携していろいろな企画を出し合い、一部はニュースに、一部は特集という形で番組に反映され、ポスターの企業への配付や、インターネットでは映像が見られるようになっている。風疹を止めようと一生懸命に取り組んでおり、すばらしい。

(NHK側)

「ストップ風疹」は、NHK全体の取り組みとして行っている。夏がピークになる予測があるので、今後も続けていく。

- 生活保護費の不正受給の罰則強化、生活保護額の引き下げについて取り上げてほしい。生活保護法が改正され、罰則を強化し、額も引き下げられるが、これはさまざまな問題をはらんでいる。今までは窓口で、口頭で説明すれば、緊急事態だから保護するという対応が可能だったが、改正案では書類が全部そろっていないと窓口で断れることになっている。以前、不正受給の水際作戦が盛んな地域で、生活保護を断られて餓死し、死体の横に「おにぎり食べたい」と書かれた日記が残されているという、日本では信じられないようなことが起きてしまったことがある。そうしたものを助長するような罰則の強化はいかがなものか。これに関しては深く掘り下げようような特集をしてほしい。単に「不正受給だからけしからん」「やめろ」という風潮で日本の社会保障を考えるのではなく、最後のセーフティネットをどうするか、国民的議論がきっちりされたうえで進むようにしてほしい。

- 生活保護に関する指摘は重要な問題を含んでいる。日本では生活保護に限らず、従来、社会保障制度全般について、他の高福祉国家の制度に比べて日本はどうかといった議論はたくさんあった。しかし、国民全体がみんな努力し、ぎりぎりの最終的な幸せを保障するためのナショナルミニマムは何かという、きちんとした議論の詰めは、あまり行われたことがない。そういう議論がきちんに行われるような雰囲気を作り上げていく報道は大事だと思う。足りないというとすぐにやれとなるし、制度にうまく乗っている人がいるとなるとやめてしまえと流れがちになる。本当にナショナルミニマムは何かというのをみんなが互いに問い詰めることがこの国は少ないが、そこが大事だ。

- TPP＝環太平洋パートナーシップ協定の問題など、基本的な前提になる歴史的経過やほかのものとの関連がきちんと踏まえられないままに取り上げられることが、NHKの番組でも散見される。注目される問題についてはタイミングもあるかもしれないが、積み残しになっている課題は中期的な視野で見通した、落ち着いた議論によるシリーズ企画などとして取り上げてほしい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成25年4月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

4月のNHK中央放送番組審議会は、15日（月）、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（24年度第4四半期・1～3月、24年度全体）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告について、視聴者意向について、5月の番組編成についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長 福井 俊彦（元日本銀行総裁）
副委員長 岸本 葉子（エッセイスト）
委員 青柳 正規（国立西洋美術館館長）
大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
紫 舟（書家）
平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
田中ウヅエ京（（株）MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
若月 壽子（主婦連合会事務局）
和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（24年度第4四半期・1～3月、24年度全体）について＞

- 40代男性の接触者率が低いことについて、特定の要因を探り当てているか。

（NHK側）

ジャンルの的にはニュースは、40代男性の接触者率が少し減っている。メディア利用という点で、電車の中でスマート

フォンを利用してニュース項目だけを見るといったひとが増えるなど、インターネットに流れる傾向があり、特に都市部ではそういう変化も影響しているかもしれない。まだ原因をはっきり分析できている段階ではないが、現象としてはそういうことが少し目につく。

(NHK側)

NHKでは家族で見ることができる番組が少なかったことが、数字の低下に関係しているのではないかという分析もしている。土曜日に新しい番組を始めるなど、その点を意識して平成25年度の番組改定を行った。

- 日本中の人がNHKばかりを見れば、視聴率が上がるかもしれないが、私が子どもころのように、夕方暗くなって親が心配になるぐらいの時間まで、公園などで子ども同士がいろいろな話をしているほうが、家に帰ってテレビを見ているより健全という考え方もあると思う。40代男性で言えば、家に帰ってテレビを見ているより、会社で残業するとか、自分の仕事を一生懸命にしているほうがよいかもわからない。その点で、この接触者率や視聴率の数字をどう理解したらよいかよくわからない。数字に対して、NHKは何を求めているのか。

(NHK側)

民放の場合だと、視聴率が高いことがコマーシャル収入に結びつくということがあるが、NHKは公共放送なのでそういった関係はない。しかし、受信料をあまねく国民からいただいていることを考えると、番組を作る側としてはたくさんの人に見てもらいたいと考える。映像波でいえば、総合テレビ、Eテレ、BS1、BSプレミアムとそれぞれあるが、番組を1週間のうちに5分以上見たり聴いたりしてもらえれば、接触者率に反映する仕組みになっている。NHKの4つの映像波のうち、1つは見たいという番組があることが、NHKの多様性として必要だと考えている。その意味で接触者率はある程度高くないと、NHKの放送が視聴者のニーズにできていないということになると思っている。接触者率は、われわれがさまざまな取り組みをするときの1つの指標になると考えている。

(NHK側)

NHKの放送業務の評価を、接触者率や視聴率以外のもの
で評価するという意味で14指標を使って、期待度とその実
現度を測っている。公共、信頼を測る指標については8割ぐ
らいの期待度があって、とくに「①公平・公正」、「②正確・迅
速な情報提供」はその期待度とほぼ同じ8割の実現度を保っ
ている。放送の質については10点満点で評価しており、そ
の数字を高くしていくことを目指している。また、視聴率を
気にして質を落とすことにはならないように、NHKらしさ、
NHKにしかできない“NHKブランド”を大事にし、質を
重視するために、こうした放送の質的指標の数字を出してい
る。

- NHKの番組の質がいかに上がっているか、それをわれわれも厳しく見ていく。
質の向上が、視聴者の生活の質の向上につながるのが理想で、結果として接触者率
や視聴率が上がるという立体構造で議論すればよいと思う。
- ジャンル別世帯視聴率で科学・自然分野の視聴率が10%程度あるのは普通には
考えられないぐらい高い数字だと思う。書店などでも自然科学のコーナーはあまり
大きくない。NHKが科学・自然分野で果たしている役割がとても大きいというこ
とを評価すると同時に、こういう数字を積極的にNHKの中でも評価し、さらに積
極的にこの分野の質の向上に努めることがあってもよいのではないか。

(NHK側)

そういう意味合いもあって質的評価を始めた。

- この形式の調査を始める前から科学・自然の番組について評価が高いことは、N
HKとして自覚していたのか。

(NHK側)

科学・自然番組は、NHKスペシャル「宇宙の渚」をはじ
め、NHKの技術力の高さが番組と結びついた結果として制
作されているところがある。NHKとしては得意な分野であ
り、これまでも一定の成果を上げ、世界的にも評価される番
組を作ってきた。NHKスペシャル「世界初撮影！深海の超
巨大イカ」も科学・自然分野として同様のケースだ。

- 一般的に研究では、個々の研究について大きなまとめを別な視点から見直すことが、研究者の間ではできにくいという課題がある。それをNHKなどが、新たな視点で研究のとりまとめを行い、全体の流れを俯瞰（ふかん）することによって、研究自体に大きなインパクトを与え、研究現場に新たな視点や動きを作ることがある。こうした番組と現場の相互作用がしばしば起こるのは科学・自然の分野だと思う。NHKが初めて生態を撮影したということはよくあるが、それによってサイエンスが進んだことがある。相互作用という点で高く評価している。

(NHK側)

NHKには過去の蓄積があり、それぞれレベルの高い人材と技術がトータルとしてNHKに資産として保有されている。公共放送だからこそNHKが戦力を投入でき、そうした資産を持ち続けることが可能になっていると思う。そうしたNHKらしさを大切にする方向で努力をしようとしている。

- 4月14日(日)のNHKスペシャル MEGAQUAKEⅢ 巨大地震 第2回「揺れが止まらない～“長時間地震動”の衝撃～」もすごい番組だった。NHKが柱を丈夫にしたり、実際に防潮堤を造ったりしているわけではないが、番組を見た市町村や会社の関係者、個人が、地震、津波に対してもっと強い町づくりを目指したり、逃げるための準備をしようとしたりすることにつながることを考えると、NHKが防災、減災に果たす役割はとても大きいと思う。
- 今、われわれの周りにある自然科学はさまざまな問題をはらんでいる。要素還元論という考え方から出発しているので、それぞれの分野で勝手に発達しているが、横の関連があまりない。科学が発達すればするほど、科学全体の将来は神頼みになりつつある。そのために、一部では持続可能な科学が提唱されているが、だれも科学の全体像を把握していない。自然科学の発達の全体像をわれわれはもっと慎重に考えなければいけない。そのためには、いろいろな啓発的な番組を放送し、だれもトータルに把握していないことを訴えていく必要があるのではないか。自然科学に対してもっと人文科学などが積極的な発言をしていかななくてはならないが、徐々に哲学思想が力を失い言えなくなっているのが現状だ。その点もNHKで取り上げてほしい。
- NHKはスポーツを科学という点でとらえていることがよいと思う。最新の映像技術を使って、スポーツをさまざまな視点から、普通では見られないようなことまで、ゆっくりと時間をかけて掘り下げていけるのはNHKだからだと思う。スポー

ツは根性ではなく、科学にのっとなって行われている。技術、戦略、身体、心理などの面で最新の技術によって行われているのに、体罰のことも含め、トップスポーツにもまだ科学が入っていないのではないかと思われてしまっているところがあるのは残念だ。他の委員から指摘があったように、テレビを見ている時間自体には、本当は意味がない。ただし、「NHKスペシャル」をはじめ、貧困の世界やイラク戦争を取り上げた番組など、ふだんの生活では、見たくないと目を背けていることを見せられることで、私たちが生きている現実に、どう行動するかということを経験することができる。そういったこともNHKにしかできないことだと思う。

○ 報道の分野で、総合テレビについては「丁寧に取材・制作されている」が評価の高まったものとして挙げられており、「正確な情報を迅速に伝えている」もポジティブな結果が出ていたが、それらはNHKであれば当然で、期待されていることだ。それよりもむしろ「新しい切り口や演出に挑戦している」「社会的な課題について考えさせられる」ということに、もう少し力点を置いてほしいと思う。私にも経験があることだが、新しい切り口で記事を書いても、「何を言っているのかわからない」とか、「あまり関心がない」など、うまくいかないことが多い。「丁寧に取材・制作されている」「正確な情報を迅速に伝えている」はどちらかというところにあるニーズに応える役割だと思う。一方で「新しい切り口や演出に挑戦している」「社会的な課題について考えさせられる」は、視聴者が「自分はそんなことを考えたことがなかった」と気づかされるような、重要な役割があると思う。たとえ結果がすぐに出なくても、これらの質の向上に取り組んでほしい。

○ 「3か年の経営計画」に対し、それぞれどのように視聴者から期待され、どれだけ実現されたかを見られるのはたいへん結構だと思う。公共放送として今のNHKの番組の作り方、内容について、視聴者が総合的に見て満足しているのかを調査しているのであれば、その情報も見てみたい。日本で働いている人の8割は企業で働いている。企業で働いている人たちが、今のNHKを見て満足しているのか、全体として把握する必要があるのではないか。番組別、ジャンル別の接触者率などは出ているが、総合的な満足だけでなく、NHKにどういう番組を強化してほしいのか、それぞれの分野でさらに取り上げてほしいものは何なのか、年齢、性別、職業別に分析すると、全体としてNHKに対する満足度がわかると思う。

「モニター報告」では、個々の番組について満足度が出ており、それはそれで意味があると思うが、加えて、これはNHKらしい番組だったのか、期待している番組だったのかについてもモニター調査の中で聞いたほうがよいのではないか。私個人は「NHKスペシャル」などは、よく取材されているNHKらしい番組でよいと思う。また「連続テレビ小説」も家族で見ているがおもしろい。総合的には、NH

Kらしい番組が作られているのかどうかをどう調査され、それに対しての進捗状況をどう見ているのか知りたい。

- 経営計画における「達成状況の評価・管理」に関する世論調査の中で、総合的にNHKに対する希望、提言を書いてもらう項目は含まれているのか。

(NHK側)

NHKらしさを直接聞いているものはない。ご指摘の「モニター報告」についても、工夫するところがあると思う。別の調査になるが、年に1回、満足度を測る番組総合調査を、総合テレビの夜間の番組についてのみ行っている。その調査ではストレートに満足度を聞いている。

(NHK側)

「NHKらしい」というのをどうとらえるかは、いろいろな考え方があるので、そういう観点から14指標に分け、項目ごとに聞く形を取っている。トータルとして考えた場合、これを足して平均すれば、ある程度分析できるのではないか。調査の方式など、どういう形にすればトータルの傾向をくみ取ることができるのかについては工夫したい。

- 個別の項目を足し、平均したことが本当に視聴者の望むものとは違うかもしれない。NHKらしいということばの理解はいろいろあるが、NHKが期待されているものを放送しているのかどうか、常に聞くことは大事だ。民放とは違う、公共放送として取り組んでいることに対して視聴者はどう満足しているのか。個々の番組についても、NHKに期待されている番組なのかを把握して編成を考えたほうがよい。時間帯によっては、もっとNHKらしいものを放送してほしかったということがあるかもしれないので、常に考えてほしい。
- 期待度、満足度から考えるだけではなく、「NHKを実際に見ようと思わないのはどうしてなのか」という問いをたくさんの人にすることで、今後の改善点が見えてくることもあるのではないか。
- 14の指標の中に「多様性をふまえた編成」とあるが、多様性をふまえた編成を行うためには人材の多様性も大事にすべきではないか。内部の多様性に関して、意識的に取り組むことが、番組の多様性、革新性へつながると思う。番組審議会にも、

次世代育成ということで次の管理職世代、女性、現場の人たちがオブザーバー枠のような形で議論に参加することで、育成される才能もあるのではないかと思う。

次世代育成を考える場合、現在NHKを見ている人だけでなく、これからNHKを見るだろう人々のことについても思いをはせる必要があるのではないか。10年後、20年後に、NHKを視聴するスタイルが今と同様であるとは思えない。テレビの前に同じ時間に座って、同じ番組を見るスタイルから、インターネット等を通じ、場所や時間を超え、コンテンツを視聴するようになると思う。その意味で放送と通信を融合させていくべきではないか。先進的な取り組みの1つとして、歴史のあるNHKが保持する著作権の切れた映像を、投稿動画サイトなどに無償で公開し、多くの教育現場、研究者が共有できるようにすべきではないか。動画サイトのNHKチャンネルで何千何万のコンテンツを視聴できれば、当時の放送は世界をどのように描いたのかなど、10年後、20年後、50年後の国民が共有できることになり、すばらしいコンテンツ活用になるのではないか。

○ この場に出た意見の中で経営委員会でも議論していただいたほうがよいものがあれば、そういうつながりをつけていただきたい。

○ 報告していただいた達成状況を見ると、全体的に手堅く推移している印象を受ける。波の質的評価に影響を与えたジャンルと番組について、多様な番組が挙がっていることはとても望ましいと思った。1つの番組が突出して全体をけん引していく形でなく、多様な番組が全体的にボトムアップするのが番組編成の理想的な姿だと思う。NHKが弱そうな印象のあるエンターテインメントも貢献しているジャンルとして挙がっていることは評価できる。波ごとの重点領域としている部分で低くなっているところはなく、全体に高いか、維持している印象で、それも安心なところだ。ただし、総合テレビの「わくわく・ドキドキする」は重点領域であるにもかかわらず低くなっているので、ここは依然として課題だと思った。第4四半期は、この1年間の中で見てもそれほど大きなイベントはなかったが、量的指標もそれほど激しく落ちずに維持していることも、視聴者の評価を得ている現れだと思う。

40代男性の接触者率が落ち込んでいる一方で、40代女性の接触者率が上がっている。以前は、40代全体の接触者率が落ち込んでいるので、「連続テレビ小説」の開始時間を15分早め、「あさイチ」の内容を改善し、ドラマの内容を見直すなど、この数年は40代女性をどう取り込むかということに努力してきたように思う。女性は取れてきた中で、男性はどうしたらよいのか、女性に力を入れることで男性が離れてしまったとの反省があるかもしれないが、40代女性が家族でテレビを見る人たちであるならば、40代女性や40代男性の子どもの層に訴える番組を拡充し、40代男性にも見ってもらうなどの方法があると思う。それについて、今後調査

し、検討してほしい。

- 40代、50代は会社で残業をしたり、会食で情報交換したりして家に帰る人も多い。「ニュースウオッチ9」が夜9時から始まっているが、夜10時ぐらいからNHKでニュースを見られないかという声を聞く。たとえば「ニュースウオッチ9」を30分延長し、「時論公論」や夜9時台の前半で伝えたニュースを夜10時台に解説してはどうか。
- アンケート結果を見ると、経営計画の達成状況のさまざまな項目、質的指標で、高いレベルをきちんとキープしている。低い指標を改善することは当然だが、すでに高いレベルを維持している各項目については、絶対に落ちないように、より高くする努力をしてほしい。

<放送番組一般について>

- 3月31日(日)の今夜も生でさだまさしスペシャル「いつでも夢を！朝まで生で音楽会」(総合 前 0:05~5:00)を見た。手作り感があり、お金をあまり使っていないような見せ方だったが、それがとても気持ちよと感じた。その気持ちよさは何だったかと考えると、東日本大震災直後に、電気をこまめにつけるよりも、節電をして電気を1つずつ消すほうが気持ちよかったという感覚に似ていた。人は最先端のものや、デジタルを駆使したものだけを求めているのではないと感じた。
- 4月6日(土)のSONGS「“時代”～中島みゆき～」を見た。ライバルだった八神純子さんのエピソードや、また、東北の被災地で中島さんの歌が高校生に歌われていること、八神さんも被災地に行っていることなどが紹介されていた。歌の番組でありながら、ニュース性というか、今の時代を切り取っている感じがして、よい番組だった。
- 4月14日(日)のNHKアーカイブス「イラク戦争から10年～いま何を学ぶべきか～」(総合 前 1:50~2:55)で放送していた平成19年7月2日放送のNHKスペシャル「リトル・バグダッド ～急増するイラク避難民～」の中の映像で、国外に逃げていたイラク人家族の主人がさらわれ、家族が泣いている映像があった。現実を取り上げるときに、被害者が泣いている姿をあそこまで近距離ではっきり見せると、かえって心理的に非現実化してしまうという印象を持った。実際の現場ではカメラマンやディレクターは後ろで隠れているのかもしれないが、フィクション

でなければあれだけ近くで撮ることが出来ないと思ってしまうため、逆に視聴者はフィクションを見ているような感覚になるのではないかと思った。ドキュメンタリーなのに、迫真の場면을撮影できたことで、フィクションのように感じてしまうのはもったいない。かえって、もっと陰から見ているような映像の方が本当のことに感じると思う。これは事実で、こんなに怖いことがある、という現実感が伝わらないように思い、とても不安になった。

(NHK側)

一般論として、指摘のあったように視聴者に感じさせる映像が実際に撮れることもある。一方で、あえて遠く、陰から見ているように撮ったりすることもある。ドキュメンタリーとはいえ、作り手の計算のもとに制作しているので、両方ともありえる。

- 時代劇で、スペシャル時代劇「大岡越前」とBS時代劇「妻は、くノ一」が始まった。民放の「大岡越前」は、加藤剛さんが主演だったことは知っているが、当時は見ていなかった。初めて「大岡越前」を見たので比べてどうこうということはない。ただ、テーマソングが民放のときと同じ曲を使っているのはなぜなのかと思った。また、将軍吉宗が勝手に出かける話の中で、庶民に10両をあげる場面があった。大名でもお金を持ち歩かないという話を別の映画で見たことがあったので、どうなのだろうと思った。
- BS時代劇「妻は、くノ一」は番組名を聞いたときにどういった内容になるのだろうかと思ったが、見てみると意外とおもしろく、主演の市川染五郎さんもよい。また、瀧本美織さんは、所作もぎこちなさがなく、自然でよかった。田中泯さんも存在感があり、これからどうなるのか、楽しみだ。

(NHK側)

スペシャル時代劇「大岡越前」とBS時代劇「妻は、くノ一」は京都の太秦にある撮影所で撮っている。この撮影所は、民放の時代劇など多くのドラマを撮っていた。それらの定時番組がなくなったこともあり、そこでの伝統を継承しなければならないという役割も考えながら作っているドラマだ。「大岡越前」は、民放で放送していたときに制作していた会社と共同で制作している。そのこともあって、当時のテーマ音楽をアレンジして使っている。

- 「タイムスクープハンター」が再び始まった。江戸時代の話が続いているが、無名の人が主人公で、庶民役の登場人物は着物の着方がだらしなく、髪型も月代（さかやき）がきれいでなく毛が生えているなど、リアルな再現になっている。どのように考証しながら作っているのか知りたいと思った。

社会的課題の共有という意味では、社会保障についてはあまり取り上げられていない気がする。「社会保障制度改革推進法」が、私たちの生活にどのようなインパクトを与えるのか、あまりわかっていないと思うので、取り上げてほしい。

- 4月10日（水）の「探検バクモン」でも太秦の撮影所を取り上げていた。時代劇を制作するのはたいへんな作業であり、伝統芸能の継承といった側面もあると思うので、がんばってほしい。

（NHK側）

「タイムスクープハンター」については、当時のリアルさをどのように表現するか、日々議論して作っている。本当の庶民の生活を表現したいということで、月代や着物の着方など、できるだけ当時の実態に近づくように追求して作っている。

- 「ハートネットTV」は、とても重いテーマに真正面から切り込んでおり、質の高いコンテンツになっている。たとえば虐待、障害、貧困、性暴力、薬物依存、LGBT、HIV、自殺など、押しつぶされそうなテーマを取り上げている。こうした社会的課題に苦しんでいる人や悲しんでいる人がいる中で、社会的に何か行動を起こし一歩踏み出そうという、社会を動かす内容になっている。今後も続けてほしい。

- 「おとうさんといっしょ」という番組が始まった。限られた予算だと思うが、これはとてもよい内容だ。着ぐるみもあまりかわいらしくはないが、おとうさんの興味を引くようなところにどん欲に迫っている。ハラハラしながら見ているが、がんばっている感じに押され、いつの間にファンになっていた。パパならではのダイナミックな遊びを紹介するなど、手探りの中でがんばっていると思う。母親だけでなく、父親も子育てに参画するのが当然という社会づくりのために、こういう番組の貢献は大きいと思う。視聴率に左右されずに、ぜひ続けてほしい。

- 2月23日（土）のグローバルディベートWISDOM「世界が語る メディアの未来」（BS1 後 10:00～11:49）は、興味深かった。メディアが視聴率を追い求め

ることにより、メディア自身に悪い影響を与えていると言及していたことはたいへんおもしろかった。

- 3月20日(水)と23日(土)の「ぐるっとマレー半島5200キロ 海のシルクロードをいく」(BSプレミアム 後7:30~8:59)を見た。この番組は、出演者の女性が誠実に、彼女自身に与えられた役割を担って、思いを持って準備して臨んでいる。ほかの番組ではメインの出演者でも、台本に沿って読んでいるだけのように見える人もいる。そうした予定調和では、見ていて興味が持てなくなる。
- NHKスペシャル「MEGAQUAKEⅢ 巨大地震」はよい番組だった。第1回、第2回とも見たが、コンピューターグラフィックスが、番組をわかりやすくするためにとても大きな役割を果たしていると思った。第1回では地下に延びる活断層を画像化し、第2回では日本の地図上に揺れの大きさをわかりやすく表示していた。これは映像メディアの強みだと思う。こうしたコンピューターグラフィックスはNHKで作っているのか。それとも、研究者が作ったものを番組で使わせてもらっているのか。

(NHK側)

NHKスペシャル「MEGAQUAKEⅢ 巨大地震」のコンピューターグラフィックスは、研究者から提供された貴重なデータをもとに、NHKのコンピューターグラフィックスを専門に制作する部門が作っている。

- NHKスペシャル「MEGAQUAKEⅢ 巨大地震」を見た。日本は縄文時代中期に鬼界カルデラが大爆発を起こし、九州の一带に大きな被害を与えて、“アカホヤ”という火山灰は関西周辺まで降っている。そういう意味で、巨大地震だけでなく、噴火についても取り上げてほしい。
- ニュース番組で、国会の審議についての項目のときに、国会議事堂の上空や正面からの映像、議論の内容と関係ない映像が長い間映っている。容疑者が逮捕されたというニュースでは、だれも通っていない警察署の建物がずっと映るなど、とてもシュールな感じがする。ニュースに即して、もう少し生々しい映像にしたほうがよいのではないではないか。また、人が歩いている映像でもよいのではないか。

(NHK側)

ニュースの場合、人が歩いている映像を使うと、その人が

事件と関係あるように受け取られてしまう場合がある。特定のもの映すと、それが意味を持ってしまう場合があるので、資料映像を使うことが多い。

- 私は「NHKニュース7」や「クローズアップ現代」などはおもしろくて見ているが、夜8時になるとほとんどNHKを見なくなる。そして、夜9時になると「ニュースウオッチ9」が始まるので再び見る。それぞれの時間帯別の視聴率がどうなっているのか、また、それぞれの時間帯の番組に対し、視聴者が“NHKらしい番組”という視点でどう評価しているのか知りたい。民放と同じような内容をNHKが放送しているのであれば、ある程度の満足感を視聴者が得ていたとしても、公共放送としては、放送する必要があるのかという視点も出てくる。視聴率を高くしてほしいということではなく、その時間帯にふさわしい番組だったのかを評価するために、1週間分の視聴率を見るなどすると、さまざまな議論ができるのではないかな。

(NHK側)

夜8時台の視聴率は高い。「ためしてガッテン」は13%ほど、「鶴瓶の家族に乾杯」は16%を超える番組だ。「NHKニュース7」は平均で16%、「クローズアップ現代」は12%前後、「ニュースウオッチ9」が10%ほどだ。

- 「ためしてガッテン」は私もだいたいはおもしろいと思うし、すべてがだめと言っているわけではない。視聴率が高いかどうかとも評価の1つだが、“NHKらしさ”という点で、どう評価されているかを見ておいたほうがよいのではないかなという意味だ。

(NHK側)

民放で視聴率データを分析するのは違った意味で、われわれも日々いろいろなデータを分析している。時間帯毎に男女別や年齢別にどのようにテレビが見られ、なおかつNHKに対してどのようなものが期待されているかは、長年のデータの蓄積である程度はつかんでいる。全員にフィットするわけではないが、なるべく期待している人たちの大きな塊に合うように、平日夜8時台は、比較的年配の方向けの番組を意識して作っており、その層の満足度はとても高い。夜10時台は40歳代から50歳代、深夜0時を回ると若者向けの新し

い番組を放送している。番組によってはあまり世代と関係なくたくさんの人に見てもらえるタイプのものもあるが、視聴率が高い低いは関係なく、どうフィットさせていくかについて視聴率データなどを含めて分析し、さまざまな面から考えながら制作している。

- 視聴率だけでなく、公共放送らしさというか、この番組はNHKに期待している番組だったと見た人が思っているのかを常に考えたほうがよいのではないか。視聴率が高いことはもちろん大事だが、NHKが公共放送として制作してくれてよかつたと、期待されることが多くなるのがよいと思う。

(NHK側)

NHKは、地上波が総合、Eテレ、BSが2波と映像波が4波ある。映像波では、さまざまなニーズに応えるために、4波を使ってうまく編成している。たとえば、夜10時台に総合テレビでドラマを放送している時間には、BS1の方で「ワールドWaveトゥナイト」という国際情報番組を放送している。土曜日には「ドキュメンタリーWAVE」、日曜日には「Biz+ サンデー」という経済番組を新設した。その時間帯にいずれかの放送波で、多様なニーズに応えるNHKらしい番組があるという編成になるよう心がけている。

- すでに接触している視聴者からの期待、未接触の視聴者からの期待と呼べるものがあるとしたら、その内容にはかなり違いがあるような気がする。開発番組や若年層向けの番組は、未接触の視聴者に見てもらうための期待がどこにあるのかを探っているのだろうと推察する。未接触の視聴者には2タイプあって、1つはテレビを見ない人、インターネットや情報ツールが中心でテレビにあまり親和性のない人、もう1つはテレビを見ているがNHKを見ない人に分かれる。そういう人たちの期待を探るときに、つかんでいるデータで未接触の視聴者の期待もある程度予測して番組を制作しているのか、あまり予測やデータはなく、いろいろな種類の番組を制作しているのか、そのあたりの試みの状況を知りたい。

(NHK側)

NHKを見ていただいていない方に少しでも見ていただいで、公共放送の使命を達成したいという思いがある。たとえば以前放送していた「サラリーマンNEO」などは、既存の

視聴者ではない人たちのことを考えて作った。放送は常に新しいことにチャレンジし、新鮮でないと、たとえNHKのファンの方でも飽きてくる。それについては、常にいろいろな手を考えている。うまくいくときもあれば、うまくいかないときもある。

- 次の世代は、放送と通信との融合の世界へとつながっていく。そのつながりも意識した番組づくりが生きた番組づくりになると思う。

- 4月1日（月）からNHKの語学番組が、一部のスマートフォンやタブレット端末などで見られるようになった。放送と通信の融合をまさに具現化していて素晴らしいと思う。

NHK編成局
番組審議会事務局